阿片戰爭

江馬修著

日本プロレタリヤ作家叢書第六篇

戰旗社版

阿片戰爭

江馬修著

戰旗社版

編輯 日本プロレタリア作家同盟

目次

装幀　大月源二

甲板船客

印度の勞働者たちがあらゆる方面に向つて國際的團結を求めてゐることは最近注目に値する事實である。

――「インターナショナル」一九二八年二月號――

「シンガポールから珍客が乘りますよ。」

事務長がおもしろさうに云つた。

「珍客といふと?」と僕は聞いた。

「甲板船客(デッキパッセンジャー)のことですよ。」

それなら歐洲航路の一名物として、僕も前からよく話にきいてゐた。そして印度の勞働者と接觸する機會が得られるかも知れないと内心樂しみにしてゐたのだ。

船はシンガポールでひと晩碇泊した。

そして正午にこゝを立つ筈になつてゐた。前日來上陸して、猛烈な暑氣にも負けずあちこち驅けずり廻つてゐた僕は、一時間ばかり前になつてやつと船へ戻つてきた。

僕はしかしすぐ船室へ入らうとはしなかつた。そしていろ〳〵な物賣りのうるさくつき纏ふデッキ

をぶら〳〵しながら、港の有様を眺めにかゝつた。僕たちの船のまはりには、古ぼけたフランスの貨物船や、二萬噸にあまる堂々としたオランダの客船や、その他いくつとない船が碇泊してゐたが、ひろ〳〵とした港は落ついた靜けさの中に、燃ゆるやうな日ざしをじり〳〵照り返してゐた。そこには椰子や檳榔子の繁つた綠の小島があつて、美しい赤屋根の洋館別莊が水に臨んで涼しげに立つてゐた。さらにその向ふにも青々とした島があるが、さてそこにどんな恐ろしい設備が隱されてゐるか。惡魔だけが知つてゐやう。そして人の胸にはおのづとかういふ考へが浮かんでくる。——

「なる程、港としては絕好の場所だ。イギリスの帝國主義が東洋侵略の足溜りとしてこゝを選んだのは賢明と云はざるを得ない。同時にこゝを一大軍港にしやうとして騷いでゐるのも無理が無い。然しもしそれが實現した曉こそ、それは唯アジアの帝國主義に對してばかりでなく、東洋のプロレタリアートにとつても一つの脅威となるだらう。」

ふつと氣がつくと、波止場の方から、祭のやうに華やかなボートが、二つとなく、三つとなく、この船を目がけてやつてくる。はて、僕は双眼鏡を目にあてた。外でも無い、例の珍客を滿載したボートだ。一體印度の勞働者は男子でも赤とか淡紅とかの派手な色彩の布をその黑いからだに纏ふてゐるが、今の場合それよりも多くの婦人たちのつけてゐる印度更紗のサーリの色がボートをあんなに華やかに見せてゐるのだ。サーリといふのは印度の婦人服で普通四尺幅の非常に長い布を腰に卷き、その

一端を左の後より、背を越えて右肩の前方に垂れかけるか、それで頭を蔽ふかしてゐる。

　ボートは徐々に僕たちの船に近づいて、階段の斜めにおろされてゐる船腹へついた。見たところ、男の數と女の數と半々ぐらゐの割合である。男たちはいち早く階段へ飛び移つて、女たちの手をとつてボートからそちらへ引きあげてやる。それから彼等は女の後からトランクや袋や手荷物などをもつて階段をメインデッキへ上つてくる。擧動は總じて緩漫で、むやみに昂奮したりあわてたりした樣子が見えない。

　メインデッキといふのは、人も知つてゐるとほり、大抵商船の中央マストの下にあつて、甲板としては一番廣い場面を占めてをり、僕の乘つてゐた船では、――一萬噸以上の郵船だつたが、――總に二百坪ぐらゐあつたらう。貨物を納める大きな倉庫が二つその下にあつて、丁度この時には貨物の出し入れの仕事がみんな片つき、ハッチがすつかり蔽はれてゐた。この甲板と、その大部分を占めてゐる一段高いハッチの上とが、甲板船客の居間なのだ。熱帶の恐ろしい日光を遮ぎるために上には白いズックの大天幕が張られてゐるが、下は板の間むき出しの儘だ。

　ボートは彼等を滿載してつぎ〳〵とやつてきた、そしてメインデッキの上は忽ち彼等の群で蔽はれた。初め、彼等はいづれもハッチの上に陣どるために、毛布を敷いたり、荷物を積み重ねたりして、それぞれの、またはそれぞれの家族の住居をつくつた。そして大きな二つのハッチの上がまもなく彼

等でいつぱいになると、今度はハッチを取りまいて、デッキの上へぢかに圍まつて陣どつた。何と云つても、みんな落つくまではひと騷ぎだ。

一等船客たちは、いづれも各階の手すりに靠れて、下の有樣をもの珍らしさうに眺めてゐた。反對側の二等の客たちも同じだつた。僕はメインデッキへおりて行つて、手すりに寄りかゝつて、やつてくるボートと、デッキの上の騷ぎとを交互に見てゐた。すると、ボートからおろされて、デッキへ積みあげられてくるこの人たちが、貨物で無いまでも、少くも捕虜かなんかのやうに思はれてきた。

船が出る頃には、彼等は大概落ついた。今やひろいメインデッキは甲板船客の一大集團でいつぱいになつた。みんなで少くも百人以上はゐた。マレイ人もゐたが、殆んど大部分は印度の下層階級で、小商人や、出稼勞働者や、農民や、移住者とその家族だ。

斷はつて置くが、同じ航路でも外國船では殆んどかうした甲板船客を取扱はない。彼等の堪らない臭氣と不潔を嫌つてだ。中には稀に取扱ふところがあつても、その待遇が全く奴隸同樣で、冷酷を極めるので、彼等は好んで人種的に近い日本の船に乘りたがるといふ事だ。

しかし日本の船にしたつて、彼等の臭氣と不潔は同じ事だ。——勿論異人種の立場から見ての事であるが、隨つて一二等船客からいつも猛烈な抗議が出るばかりでなく、このためにヨーロッパ人は日本の船を忌避する仕末である。しかも日本郵船會社はいつも喜んで彼等のために甲板を解放してゐ

る。その筈だ、シンガポールからコロンボまで、一週間ばかり、食事なしで、つまり板の間を貸すだけで一人前三ポンドの運賃だ。百人ゐたら、約三千圓にあたる譯だ。やかましく云へば、この事實は船舶法違反にあたつてゐるのだ。と云ふのは、船では一定の人員に對していくらかの割合で、例へば十人に一つといふやうな割合で便所を設ける事に規定されてゐる。これは衛生上全くさうあるべき事だ。ところが、甲板には勿論便所の設備が無いので、彼等に三等のそれを使はせる事になつてゐる。そして、その三等の便所なるものが、五つか三つぐらゐしか無いのだ。つまり三つ乃至五つの便所を百人あまりの甲板船客と外に十人乃至二十人の三等船客とで使ふのだ。熱帶の燃ゆるやうな暑さの中で、しかも衛生的な掃除の殆んど行き渡らないまゝで！

一等船客でも船室内の苦熱に堪へきれないで、甲板へ出て外氣の中で寢る地方の事だ。板の間で暮らし、そこで眠ることは、甲板船客にとつてもさして苦痛では無いであらう。もし周圍のものたちの侮蔑的な眼ざしと、ひどいどしやぶりさへ無かつたならば。ところが、熱帶の海上に特有なスコールが、日に何回となくやつてくるのだ。

もう最初の夜に、猛烈なスコールが僕たちの甲板船客を見舞つた。天幕が張られてゐたにしても。瀧のやうな夕立は烈しい風に煽られて、容赦もなく彼等の上に注ぎかゝつた。しかもそれはスコールにしては珍らしく長くつゞいた。彼等は毛布やござやありつたけのものを役立てゝ身をかこつたが、

まだ充分に凌ぎ切れなかつた。とう〳〵二三のものが、三等のボーイの所へ行つて、もつと何か防雨具を貸してくれるやうに嘆願した。

「デッキパーの癖に生意氣な事を云ふな。」日本人ボーイは侮蔑と憤りを交へた調子でどなり返した。

「雨曝しになるのがそんなに厭だつたら、一等か二等の切符を買つて移つたらいゝぢやないか。」

僕の熱心な興味にもかゝはらず、初め、彼等の臭氣には全く堪へきれなかつた。一年後僕は日本でライスカレーを食べやうとした時、フト彼等の匂ひを思ひ出して急に食慾を失つた事があるが。確かにそれに似てゐて、しかももつと色濃く、烈しい。椰子の實の匂ひだとも云ひ、にんにくの匂ひだともいふが、ちよつと吐き氣を催ふさせられる。勿論かういふ事はわれ〳〵にとつての事で。彼等にとつて全く命にかけても食ひたいあのドリアンの美果も、――事實それは世界の果物の帝王と云はれるのだが、――われ〳〵には堪らないアンモニアの臭氣を聯想させて吐き氣を催ふさせるにすぎないやうなものだ。

けんに船員の一人が僕に云つた。

「妙なものです。初めての時なんか僕もこの匂ひには頭痛を起して閉口したもんですが、何遍となくこの連中を送り迎へしてゐるうちに。今ではこの匂ひが却つて懐かしいものになつてきましたよ。こ

の匂ひには、實際何とも云へない美がありますよ。」

　これは本當に違ひない。しかし不幸にして僕はこの猛烈な匂ひに慣れてゐなかつた。それに抵抗するだけでやつとの思ひだつた。僕はまつすぐに彼等の中へ入つて行く事ができないで、上のデッキから、せい〳〵メインデッキの片隅からそつと彼等を眺めてゐた。誰でも初めて異人種に接する時の、つまらない不愉快な自然的障碍の前に僕はためらつてゐたのだ。

　みんなはだしだ。女だつてはだしだ。

　貴族もはだしで歩く國の事であるから、彼等のはだしは驚くに當らない。しかし僕がすでにシンガポールで無數に見てきた長いひよろ〳〵した足、榮養の惡い貧しい無氣味な足がこゝにも多かつた。彼等は灰色のちゞれ髮をもぢや〳〵に束ね、歷史の長い年代によつて「賤民」の刻印を受けたやうな見るから奴隷的な風貌をし、腰によごれたドーテーを卷いてゐるだけで、骨ばつた黑い全身は殆んどまる出しだ。印度人の平均壽命が二十四年あまりにすぎないといふ事實の前に、辛うじて餓死から免れてゐるやうなかうした奴隷的勞働者の姿は見るに堪へないものだ。

　もとより大抵はひとり者だ。

　小商人なぞになると、少しは良い風をしてゐる。腰に印度更紗やフランネルのドーテーを卷いてゐる事に變りは無いが、多くは廣い布の上衣で上半身を蔽ふてゐる。シャツを着て洋服の上衣を着たも

のもゐる。そして頭衣をかぶるか、ハイカラなところで海老茶色のエヂプト帽をかぶるかしてゐる。彼等は大抵女房と子供をつれてゐる。囘々教徒は、二人乃至三人の若い妻を引きつれてゐた。

　彼等が女たちに叮嚀でやさしい事はいきなり目についた。人も知るやうに、印度は牝牛と同じやうに婦人を崇拜する國だ。

　それにしても、女たちがいかに金づくめにしてゐる事か。金の耳輪と腕輪をしてゐないやうなものは殆んど無い。しかも大きな太い腕輪を一つの腕に二つも三つもはめてゐる。足首にはめてゐるのもゐる。鼻の兩翼に、すなはち小鼻のところに金を埋めてゐるものもある。大抵贋金だらうといふが、さうばかりでもあるまい。印度くらゐ金を貯藏するところは無いし。これらが親ゆづりの唯一の財產だといふから。

　多くは若い女であつたが、どれが妻で、どれが娘か、僕にはちよつと見さかひがつかなかつた。ほんの十二三の小さい娘が、生れたての赤ん坊を抱いて、まだ子供らしい乳房を含ませてゐるでは無いか。髮の白い老女も二三人ゐた。年老ひた、色の黑い、瘦せさらほけた姿は、何となくもの凄く見えた。

　白狀する、僕はその後歐羅巴に行つて色の白いいろいろな美人を見たが、印度の婦人たちほど親しみ深くは感じなかつた。黑褐色の皮膚の色は決してそんなに厭はしいものでは無い。つゝましく分け

て束ねた髪と圓い額、弓形の濃い長い眉、青く澄んだ大きな黒い柔和な眼、高い素直な鼻、小さい、もしくは大きな引しまつた口、――アリアン型の顔。そして金を飾り、美しいサリーを寛やかに纏ふて豊かな胸を張つて、はだしでゆつくり歩く樣子はなか〳〵立派でもあり、優雅でもある。そこには明らかに古いギリシヤ文化の傳統が感じられる。――とは云へ、僕は最初彼等の異臭に避易してしまつたので、これが僕の眼にうつるまでには暫く待たなくてはならなかつた。

船は穏やかな航行をつゞけてゐた。彼等のために二日目の夕方がやつてきた。眩しい落日の光線が天幕から辷り落ちて、甲板船客の群の上にぢかに射し渡つた。この時僕は、赤臙脂色の華やかなサリーを纏ふた十二三の少女が、ハッチの縁に腰をかけて、はる〳〵とした水平線の上に玉子の黄味の吸ひこまれるやうに徐々に沈んでゆく大きな太陽を、じつと見守つてゐるのに氣がついた。彼女の膝の上には大きなまるい椰子の實が一つ置かれてゐた。しかし彼女は自分が果實（このみ）を持つてゐる事なぞ疾うに忘れてしまつてゐるらしい。彼女は身動きひとつしなかつた、そしていつまでもうつとり夕日を見送つてゐた。

この時以來、僕には彼等の匂ひが、これまでのやうに堪へ難いものとばかりは思はれなくなつてきた。

僕は徐々に彼等に近づいて行つた。しかし彼等と知合ふのは思つたより容易では無かつた。何しろ二千幾百といふ種性に分れてゐる印度人の事であり、しかもそれが種族的に幾らかに細分され、そしてさらに混血してゐるのだ。習慣がまるきり違ふとほり、言葉もてんで通じはしない。そして僕の方でどんなに接觸しやうとしても、彼等は彼等自身の境遇と生活ぶりの中にとぢ籠つてゐて、他國人なぞ振返らうともしないやうに見えた。

僕が最初に友達になつたのは、小さい子供たちだつた。色こそ黑いが、いづれも大きな愛くるしい眼をして、眉間には釋迦のやうに小さい、黑點をつけてゐる。僕が菓子や果物を持つて行つてやると子供たちは喜んで、それでも幾分臆病さうに側へ寄つてきた。そして言葉が通じないので、唯もの珍らしげな、驚いたやうな、そして親しみ深い眼付で僕を見守りはじめる。しかしまもなく父親か母親かゞそれを見つけて、子供の手を引いて向ふへ連れて行つてしまふ。――こんな譯で、僕は唯、外部から彼等の生活を見守つてゐるより仕方が無かつた。

日ぢゆう彼等は大ていごろ〳〵して暮らしてゐた。唯食事の前になると彼等は忙がしかつた。或るものは米を磨ぐ、それを焚く。鷄を籠から取り出してきて、殺して羽根を挘りはじめる。女たちは椰子の實を割つて、その堅い白味のところを、鉋のやうなもので細かく刻んでゐる。各人各家族がそれをやるのだから、甲板の上はまるで一大炊事場に化したやうだ。

それから食事が始まる。常食はライスカレーだ。大てい芭蕉のやうな幅廣い大きな青葉を食器がはりにして、右手を使つて、指で器用に摑んで口へ持つてゆく。この食べ物がとうてい日本人には食べる事のできないやうな猛烈に辛い〳〵やつだ。それを見てゐると、四つ五つぐらゐの子供でも平氣で食べてゐる。さて食事がすむと、今度は一せいに口のうがひを始める。水を含んで、口の中でごくごくやるまではいゝが、それをみんな甲板の上そこら一面に吐き出すのだ。彼等はふだん唾でも平氣で甲板へ吐きちらす仕末だ。

見たところ、いろ〳〵な用事は主に男がやつて、女たちは多く何にもしないやうだ。そしてかういふ貧しい階級に於いても、彼女たちはいかにもふだん女性として尊敬され、大事がられてゐる女のやうな落つきと、品位を示してゐる。それにしても、女たちばかりでなく、總じて彼等はどうしてあんなに言葉少なに默つてゐて、晴れやかに笑つたり、しやべつたりしないのだらう。彼等は賭博もやらなかつた。女たちといちやついてゐる風も見えなかつた。そしていつもをとなしくはあるが、何かしら重々しい、うち解けない、陰欝な雰圍氣がこの集團を蔽ふてゐた。

時々、頭に白い布を卷いて寛衣をまとふた族長めいた老人や、四五の若ものたちが、一定の時刻になると必ず同一の方向へ向いて甲板の上に平伏してゐるのが見られた。云ふまでもない、彼等は回々敎徒で、神聖なメッカの方向へ向いて、うやうやしく禮拜を捧げてゐるのだ。

夜になると、甲板にはきまりの電燈しかなくて暗いので、彼等は大てい早く眠つてしまふ。どうかすると、細々とした蠟燭の火かげで、印度教の讃歌を高々と朗詠してゐるものがある。もとより僕たちには何の意味か分らないが、丁度日本で老人が講談本を朗讀してゐる時のやうな調子だ。

然し九時をすぎると、甲板にはもう人聲がしない。唯、彼等の中から病人の切なげな呻き聲だけが浪の音をとほして際立つて聞こえてくる。附添人があるのかどうか誰も知らない。船員の話では、甲板船客にはとかく病人が多いといふ事だ。そして航海中に死んで水葬されるのが、毎回二三に止まらないさうだ。

づんぐりと肥つた、頑丈さうな、中年の奴だ。赤いドーチーを腰に卷き、白い洋服の上衣を着、濃い海老茶色のエジプト帽を冠り、濃い口髭をたて、手には太い金指輪を三つもはめてゐた。そしていつも喫茶を――パーンといふ蔓草の葉に、煉石灰、檳榔子の實なぞを入れて小さく包んだもので、印度人はこれを煙草のやうに愛用する、――そのパーンをいつも嚙んで、口ぢゆう血を啜つた野獸のやうに眞つ赤にしてゐた。彼だけは外の甲板船客と違つて、船をわがもの顏にどこへでも歩きまはり、血のやうな赤い唾をそこらぢゆうに吐きちらし、誰にでもなれなれしく話しかけ、殊に船員たちと親しさうに肩に手をかけたり、冗談を云ひ合つたりしてゐた。そして高級船員も彼だけを何か特別なもののやうに扱つてゐた。

彼は僕にも達者な英語で、何處へ旅行するのかなぞと話しかけた。僕は彼にどんな職業をやつてゐるのか聞いてみた。彼は白味のぎら〳〵するほどに白い大きな眼とまるい顎で、そこらの同胞たちを輕くさし示しながら、

「僕はこの連中を毎回日本の船へ世話するのが商賣だ、」と得意さうに答へた。そして更に、

「かうして僕は甲板で暮らしてゐるが、本當はこの船の一等船客なのだ。」

そして彼はポケットから英語で印刷された船客名簿を取出して、一等船客の名前の列の中から自分の名を指して見せた。郵船會社がこの功勞者を無料で優待しやうとするのに何のふしぎも無かつた。

「それだのにどうして君は一等の方へ行つて暮らさないのか、」と僕は聞いてみた。

「僕はブルジョアが嫌ひなのだ。」彼はぺつと赤い唾を吐きながら、づるい得意げな笑顏をして答へた。「あんな一等なんかへ行つて納まつてゐるよりは、この連中と一緒にゐる方がずつと心やすいからね。」

「なる程、それは良い心がけだ、」と云つて僕は笑ひ出した。

實際笑はせる！　一等の方へ行けば、うんとチップもはづまなければならないし、食べ物だつて口に合はない。それにドーテーを巻いて、はだしではまさか食堂へも出られないぢや無いか。

一見マレー人のやうだ。然しセイロン人だと云ふところを見ると、兩方の混血かも知れない。四十二三の、淺黑い痩形ではあるが、至極健康さうな男だ。こいつ一人だけが麻の洋服を上下そろひで着て、パナマ帽をかぶり、新しい靴をはいてゐた。いつもはしつこさうに動きまはつてゐて、よく廊下づたひに三等の婦人部屋に行つてゐた。

外でもない、そこには彼の妻が、三つぐらゐの女の子と一しよにゐたのだ。よく肥つた大柄な女で、白い洋服をきて踵の高い靴をはいてゐた。色が眞つ黑で、獅子つ鼻で、大きな口が突出してるてや丶奇怪な顏をしてゐた。子供がまた母親そつくりな顏で、これも歐羅巴風に洋裝させられてゐた。

亭主はこの妻に對してとてもやさしく從順だつた。何かと彼女の世話をみたり、子供の守をしたりした。その向きも細君の方は橫柄で、威張つてゐるやうに見えた。

彼は勿論甲板船客の一人だつたが、彼等と一緒に見られることを明らかに恥ぢてゐた。そして妻と子供だけでも三等の船室に納まつてゐる事が、外のものに對して得意らしかつた。だから彼はあらゆる口實を作つて、妻のところへ行つてゐたのだ。

彼は甲板の同居者仲間とは殆んど口をきかなかつた。その癖、仲間以外の船客と船員とは積極的に近づく機會を求めてゐた。僕たちに話しかける時、彼はいかにも取り入らうとするやうな、媚びるや

うな、そしてあなた方文明人とかうして對等に話しうるのは非常に幸福です、と云ひたげな顔付をした。

僕は彼が胸に小さい金の十字架をぶらさげてゐるのに目をとめて聞いてみた。

「君はカトリック教徒かね。」

「このとほり。」彼はその十字架を指して、得意さうな顔をした。

「君たちの中でクリスチアンといふのは珍らしいね。」

「あの連中はみんな、」と彼は甲板の仲間にさも馬鹿にしたやうな、厭はしげな視線を投げて云つた。

「みんな印度教徒か回々教徒ばかしでさあ。頑迷な偶像禮拜者どもです。てんで文明が何だか分らないんだから仕方がありませんよ。」

「頑迷な事はクリスチャンだつて同じ事さ、」と僕は云つてやつた。

彼は飛んでもない事をといふ顔をして僕を見た。

「いや、違ひますよ、キリスト教は文明國の宗教です。イギリス人でもアメリカ人でもみんなクリスチャンですからね。」

「君はどんな仕事をしてるんですか。」

「私ですか、コロンボで、イギリスの官廳へ勤めてゐます。書記ですよ。妻の母がシンガポールにゐ

るもんで休暇を貰つて會ひに行つてきた所です。コロンボへついたら、是非私の所を訪ねて下さい。どこでも喜んで御案内しますし、お望みでしたら、官廳の長官を御紹介しても宜しいですから。」

その後、僕は、この男が二等の甲板で、船客や船員たちと力くらべをしてゐるのを見た。彼はもうこんな所に幾人かの文明的な知合を作つてゐたのだ。しかし彼は力くらべでは、決して他のものに讓らうとしなかつた。初め椅子に片手を伸ばして、その一脚の下部をもつて高く差あげる競爭をやつた。誰も彼に勝てなかつた。つぎに腕倒しをやつた。それでも彼はやはり一番强かつた。

さうだ、こんなに强い肉體の力を持つてゐながら、彼はそれを同じやうに虐げられた仲間を救ふために使はうとしないで、反對に、仲間を馬鹿にして、それを出し拔いて、自分だけひたすらいはゆる文明人の仲間入りをするために、そして壓制者イギリスを支持するために、一生けんめい使つてゐるのだと思ふと、僕はどうにも癪に障つてならなかつた。

印度敎の坊主が四五人乘つてゐた。いづれも若い黑ん坊で、唯一人三十五六の和尙樣らしいのがゐた。幅廣い黃いろな布をサリーのやうにからだに卷いてゐたが、——勿論法衣なのだ、——顏はまさしく羅漢の一人だ。

僕が手すりの側で海を眺めながら煙草をふかしてゐると、この和尙が僕の側へきて、叮嚀に挨拶を

して、何か云つた。言葉の意味はよく聞きとれなかつたが、口に火の氣の無い卷煙草をくはへてゐるところを見ると、火をくれといふ意味らしかつた。僕はマッチを出してやりながら、

「君は英語を話せませんか、」と問いた。

　彼はそれに返事をするかはりに、辛うじて意味をとりえられるやうな、とても拙い片言の英語で僕にきいた。

「日本の坊主は日に何遍飯を食ふや？」

「三遍は食ふだらう。中には四五遍食ふ奴もゐるかも知れない。」僕は笑つて答へた。

　彼は輕蔑するやうに肩を聳やかした。そして勝ち誇つたやうな得意な顏をして云つた。

「印度敎の坊主は、一日に一回食するのみ。」

「印度の百姓は大變に貧乏で、年々饑饉で死ぬものが多いつて云ふぢや無いですか。君たちはそれでいゝとして、みんながもつと飯の食へるやうに考へてやつたらどうですか。」

「我々は大食することを忌み嫌ふ。」

「馬鹿坊主！」と、これだけは僕は日本語で呟やいた。「しかし印度敎の坊主は煙草を吸つてもいゝんですか。」

「煙草……吸ひます。煙草は……」

そして彼は逃げて行つた。そして二度ともう僕の側へ來やうとしなかつた。

夕食の後で、僕は例によつてメインデッキへ出て行つた。そこでも夕飯がすんだばかりらしく、あたりがざわついて、あちこちでうがひの水を跳ね飛ばしてゐた。もう暗かつた。見あげると、一等のプロムナード・デッキにはあか〳〵と明りが輝いて、蓄音機の曲に合はせながら、着飾つた幾組かの男女が樂しさうに踊つてゐた。こゝから見ると、全く別世界だ！

誰か僕の側へ寄つてきた。非常に叮嚀な、殆んど卑屈に近いやうな謙讓な態度で挨拶をした。そしてまるで女のやうな、かぼそい、內氣らしい聲で何か云つた。見ると、二十二三の貧しい青年だ。顏も樣子も、その聲と態度のとほりにかぼそく、弱々しい。さう云へば、僕はひる間彼を見知つてゐた。彼は勞働者だ、そして若い妻と、赤ん坊があつた。彼は仲間の中でも、いつも目立たない片隅の方に、大事な妻と寄り添ふやうに暮らしてゐた。そして會ふ人每に低く頭をさげてゐた。

で、彼は今僕に何を云つてゐるのか。二三度繰返させて、やつと意味が分つた。

「船の飾はがきを頂けないでせうか、どうかお願ひします、お願ひします……」そして彼は何か重大事でも嘆願するやうにむやみに頭をさげた。

僕は船員に賴んでみてやつた。ところが、船では一人にやるとみんなにやらなくてはならぬからや

れないといふ返事だつた。僕は船室へ戻つて、自分の繪はがきを二組持つてきて、彼にやつた。

彼は非常に喜んで、さらに何遍も頭をさげた。全く拜まんばかりなのだ。そして大急ぎで片隅の妻のところへ戻つて行つた。

謙譲なよりも卑屈に近い、去勢されたやうに神經質で弱々しい、そしておよそ反抗心とは緣の無いやうなこの印度青年は、僕を寂しくした。しかしその後コロンボへ上陸して、僕はそこでもかうした青年を幾人か見たのだ。

シンガポールを立つてから、船はもう五六日やつてきた。魔の海と云はれて不吉がられるベンガル灣も、どうやらおほかた無事に乘り切つたらしい。明日の朝はコロンボへ着く筈だ。そして甲板船客とも全部お別れだ。

その晩、彼等もさすがに昻奮してゐるやうに見えた。手荷物を整理したり、動きまはつたり、聲高に物を云ひ合つたり、いつになく落つきなくざわめいてゐた。そしていつものやうに早く眠らうともしなかつた。

僕は彼等の間をあちこち歩きまはつてゐた。初めのうち堪へ難いものに思はれたあの烈しい匂ひも今ではそんなに氣にならなくなつてゐた。そして五六の親しい顔なじみもできたし、二三の話相手も

できてゐた。しかし彼等の生活の大部分は默々として僕の傍を素どほりして行つたのだ。こゝに言葉も通ぜず默つて塊まつてゐる貧しい被征服民の悲慘、勞苦、そしてあるかも知れないその希望などは、たゞ古沼のやうに神秘めかしく僕の前に横はつてゐたのだ。それを思ふと、僕は實にもの足りなかつた。

僕は鐵の船べりに靠れかゝつた、そして時々浪のしぶきを浴びながら、電燈の遠い薄くらがりをとほして、影のやうにそこらにざわめいてゐる彼等の黑い動きをぼんやり見守つた。

この時僕の側へ一人の男が來て立つた。三十前後の頑丈らしい、體格の立派な印度人だ。格子縞のドーテーに、白い肩衣をつけてゐるが、灰色の縮れた頭髮はむき出しにしてゐる。彼は薄暗をとほして親しげに僕の顏を覗きこみつゝ、早口な英語でこんな風に話しかけた。

「君は毎日われ〳〵の中へ來てゐるが、どうして僕とは話さうとしないのか。」

「僕は何とかしてみんなと知合になりたいと思つてこゝへ來てゐるのだ。唯君とは不幸にしてまだ知合ふ機會が無かつたが……」

「君はまさか、僕が貧乏な勞働者だからつて輕蔑はしないだらうね。」

「飛んでも無い事を！　僕は君がどうか勞働者であつてくれゝばいゝがと、たつた今思つてゐた所なのだ。」

そして僕は右手を差出した。彼は僕の手を堅く握り、さらに兩手で僕の手を溫めるやうに掴んで、言葉をつゞけた。
「僕は日本人と非常に知合になりたいと思つてゐた。どうか日本の事をいろ〳〵話してくれ……」
彼の濃い褐色の顔に丈夫さうな白い齒並が目立つた。
「宜しい。だが、君はどういふ勞働をやつてゐるのか。」
「いろ〳〵やつた。何でもやつた。だつて僕は勞働する外に生きる道を知らないから。」
「でも最近には？」
「昨年の春はボンベイで鐵道工夫をやつてゐたが、ストライキをやつて首になつた。それからコロンボで暫く波止場人足をやつた。それからまた友達に誘はれてスマトラに行つた。シンガポールに行つた。そしていろ〳〵仕事をしたが、みんな駄目だ。」
「君は勞働組合に入つてゐるのか。」
「以前鐵道の組合に入つてゐた。しかし組合はどこでもイギリス人が勢力を入れてゐるから駄目だ。印度の勞働者はまだ力づよく組織されてゐないから、ストライキをやつても負けるばかしだ。」
そして彼は暗い顔をした。
「どうか日本のことを話してくれ。」彼は大きなからだで僕の方へ屈みかゝるやうにして再び熱心に云

つた。白い肩衣のあひだから汗ばんだ黑い肌が覗いた。
「日本人は偉い。アジアでは日本だけが本當に獨立した國だときいてゐる。日本はすばらしい武力を持つてゐる。しかし日本はわれ〳〵の印度よりも、イギリスの方を愛してゐはしないか。」
「そりや日本のブールジョアジーはね。しかし……」
「僕は年寄からきいた。日本がロシアと戰爭をして勝つた時、どこよりも印度が喜んだ。印度人は信じたのだ。日本はアジア民族のチャンピオンになつて、歐羅巴人を片つぱしから叩き伏せて、印度の獨立を助けに來てくれるに違ひないと。ところが日本はその後でわれ〳〵の敵のイギリスと同盟した。そしてわれ〳〵の獨立を一層困難にした。日本の勞働者はこの事を知つてゐるだらうか。」
「勿論よく知つてゐる。日本のプロレタリアは君たちのためにも心からイギリスを憎んでゐるのだ。」
「ぢや日本のプロレタリアはわれ〳〵に味方してくれるだらうか、そしてわれ〳〵を助けに來てくれるだらうか。」
彼は僕をのぞきこんだ。彼の熱心な顏には切ないやうな期待の色があつた。
「勿論われ〳〵は君たちのために出來るだけの事をするにきまつてゐる。同樣に、われ〳〵も印度のプロレタリアに非常な期待を持つてゐるのだ。」
「あゝ、君がわれ〳〵の仲間とはほんとに知らなかつた。」

そして彼は僕と並んで船べりに靠れかゝつた。そして片手を鐵柱に摑まらせながら、一生懸命で話し出した。なか〳〵雄辯だつた。しかも俗語と訛りの多い殖民地の英語だつたので、時々理解するのに骨が折れた。しやべりながら彼は絶えず荒くれた素手で顏の汗を拭いた。そしてのべつ、ちえつ〳〵と舌を鳴らした。然しそれは單なる彼の癖で何の意味も無かつたのだ。

彼は印度の勞働者の生活の悲慘なことを話した。いつも百姓が餓死に瀕してゐることを話した。大衆の大部分が續々乞食になりさがりつゝある事實を話した。

「君はこゝにゐるわれ〳〵の仲間をよく見てゐられる。しかし彼等はまだ眠つてゐる。どうして自分たちがこんなに慘めなのか知りもしないし、知らうともしない。彼等の大部分は印度教徒で、餓死しかけてゐても外國人の手から食物を貰はないといふ連中だ。回々教徒もかなりゐる。彼等は眼に見えないメッカばかり拜んでゐる。しかもイギリス政府に利用されて、この二つの宗派はいつも睨み合つて喧嘩ばかりしてゐる。それは印度の恥辱だ。僕は彼等を憎む。しかし僕はやはり彼等を愛してゐるのだ。彼等はみんな僕の仲間だ。彼等の悲慘も、苦しみも、結局みんなわれ〳〵のものだ、僕のものだ。」

彼は甲板船客の群を眺め渡した。彼の黒い大きな眼には、明らかに或る自負と力が光つてゐた。僕は初めて甲板船客――印度の大衆の心臟部に觸れたやうに感じた。

「君の希望と戰ひは同樣に彼等のものだ、」と僕は云つた。「心から僕は君の健鬪を祈る。一日も早く勝つてくれ給へ。」

彼は急に變な笑ひ方をした。

「僕は多分殺されるかも知れない。印度ではわれ／＼の仲間は片つぱしから投獄されたり殺されたりするんだから。でも、結局われ／＼は勝たないでは置かぬさ。」

そして彼は更に勞働運動に對する英國官憲のおそろしい暴壓ぶりをこま／＼と話し出した。

僅かな電燈もいつのまにか消されて、甲板の上はすつかり暗くなつてゐた。船客たちは深い眠りの中に靜まり返つた。そして僕たちの聲高い話聲が彼等の眠を妨げるらしく見えたので、僕は彼と別れる事にした。

「君がコロンボへ上陸したら、」彼はうしろから僕に追ひ縋るやうに云つた。「われ／＼の生活をもつとよく觀察して、日本へかへつてからみんなによく話してくれ、同時にわれ／＼が日本の勞働者の援助を待つてゐることを必ず忘れないで傳へてくれ。」

僕はちよつと眠れさうも無かつた。それで船室へ入るかはりに、上の甲板へ行つて、汗を流しながらいつまでもあちこち歩いてゐた。

風の少ない、暑苦しい夜だ。月の無い空には、美しい大粒な星が鮮やかに輝いてゐた。

海は暗く、穏やかだつたが、それでも印度洋の浪は山のやうに大きく悠やかにうねつてゐた。そして到るところ、燐光が青白くゆら〳〵と燃えた。

僕は時々メインデッキに臨んだ手すりへ行つて、天幕のすき間から、僕の仲間たちの方をそれとなく覗いてみた。彼等はいづれもハッチの上や、板の間にごろ〳〵と横はつてゐたが、暗いので殆んど何にも見えなかつた。ひと所、どこからか漏れるほの明りの中に、若い妻が男の胸に顔を埋めるやうにして眠つてゐるのが美しく見えた。

ふつと僕は行く手の暗い水平線の上に、一點の光明を、――燈臺の火を認めた。痛ましくも懐かしい彼等の郷土、セイロン島がいよ〳〵あそこにあるのだ。夜があけてきたら、濃青(こあを)の明るい海と一しよに、椰子と檳榔子で縁(ふち)どられた長い海岸線がわれ〳〵の前にあるであらう。

然し、今は微かな星あかりの影に、辛うじてそれらしい黒い陸の影が、徐々に水平線に浮かび上つてくるのが見えるばかりだ。

――一九二八年七月五日――

黑人の兄弟

日本郵船會社の××丸が、ポートサイドを出やうとする半時間ばかり前、印度人の兄弟、ダナとチルタはやつと船に乘りこんだ。

ボーイは二人を直ちに船底のやうなうす暗い三等室へ案內した。三等室とは云つても、とにかく船室(ケビン)になつてゐた。寢床は十あまりあつてごた〳〵してゐたが、それ〴〵花模樣のあるさつぱりした更紗のカーテンがついてゐたので、部屋全體が狹苦しいながら、割合に氣持ちよく出來てゐた。それに、二人にとつて何よりも嬉しかつたのは、こゝには外に誰も船客のゐなかつた事だ。白人や日本人が、さぞいつぱいに部屋を占領してのさばり返つてゐる事だらうと、あんなに心配でならなかつたのに！

「こりやあ、なか〳〵良い。」

兄のダナは滿足さうに云つて、一番奧にある下の寢臺の端に兩足をかけて、白く塗られた鐵板の天井に近くいかにも、船尾らしく屈曲した壁の上にくりぬかれた小さい圓い窓から覗いて見た。つい外には小さい荷積船が、ゆら〳〵搖れてゐて、蒼黃いろく濁つた浪が、つい鼻先までひた〳〵打寄せてゐた。

「ほんとに良い。」弟のチルタも嬉しさうに云つて、ぐる〳〵あたりを見廻した。「それに、このまゝだ

と、コロンボへつくまで兄さんと僕と二人きりでこのひろい部屋を占領してゐられる譯ですね。途中エデンへもどこへも寄みちしない筈だから。」

「さうだよ。」兄は窓から身を離して、鷹揚さうにちよつと行きつ戻りつして、巻煙草を吸ひつけながら云つた。「やつぱし、日本の船にして良かつたな。」

「だから僕あんなに强硬に言ひ張つたんですよ。」弟は得意だつた。

「僕だつて何も、日本の船に乘ることに强いて反對した譯では無かつたのさ。實際、この前イギリスの船ではどえらい目に會つたからね。ほんとに白人の船なんかには金輪さい乘るもんぢや無いよ。」

「死んだつて二度と乘るもんぢや無い！」

　そしてチルタは往きの恐ろしかつた航海を思ひ出して、思はず兩肩を竦めた。

「そこへ行くと、日本人は何と云つても我々と同じアジア人種だ。この船なら、きつと氣持よく暮らせるだらうよ。さあ、とに角寢臺をきめて、荷物を整理してしまはう。」

　二人は上着を脱いで仕事にかゝつた。

　彼等はセイロン島のカンデーのもので、寶石商だつた。二ケ月前、商賣のために埃及へやつてきてカイロやアレキサンドリアなぞでかなりうまい取引をすましたので、これから歸國するところだ。兄は二十四になる。背こそ高くなかつたが、體格のがつしりした、きりつとした男だ。同じ黒人と云つ

てら、普通の印度人と違つて、落窪んだ、白味の輝くやうな黑い大きな眼、高い顴骨、赤い厚い唇、むしろアフリカの黑人に似てゐる。それから見ると、チルタの方は年こそ十九だが、からだが小柄で弱々しく、どこか女性的だ。褐色の顏は線が細く、上品で、神經質と聰明さとをあらはしてゐる。これは然し印度の現代の青年によく見られるタイプだ。兄はすでに結婚して子供があつたが、弟の方はまだひとり身だつた。

彼等は奥の方に、對ひ合ひの位置に、それ〳〵下の寢臺をとつた。そしていくつかあるトランクやスートケースは、出し入れに都合の良いやうに、どこでもそこらの空いた寢臺の上に置いた。

「やれ〳〵」とチルタは自分の寢臺の端に腰をおろして、兩足をぶら〳〵させながらうれしさうに云つた。「これで、十日あまりこゝに寢ころんでゐれば、ひとりでに家へ歸られるんだな。」

「さうだよ。だがお別れにデッキへ行つてもう一度ボートサイドを見て來やうかね。もうぢき船が出るだらうから。」

そして二人は上着をひつかけ、房のついた濃い海老茶色の埃及帽を冠つた。そして細いくらい廊下をうねり、埃つぽい階段を登つて、明るい甲板へ出た。

まだ朝だ。アラビアの沙漠から昇つた太陽は、こゝアフリカの一角に明るく輝いて、空は青々と晴れてゐる。空氣は澄明で、肌寒い。その筈だ、やうやく新年になつたばかりである。

ポートサイドは見るから植民地らしい町だ。いかにも安普請(やすぶしん)らしい、高層な、赤いけば〳〵しい建物が海ぞひに層々重なり合つてゐる。領事館や、ホテルや、商店のいろ〳〵な旗があちこちに上つてゐる。ある屋根の上に廣告の言葉が大きく切り拔かれた英語の文字で並べられてゐる。それが遠い青い空を背景にして黒くくつきりと透かして見られる。埃及人に親しみ深い空はこんな廣告にまで作用してゐるのだ。さう云へば、波止場に近く堂々と立つてゐる官省めいた大きな建物には、二つの大きな青いアラビア式の圓屋根(クポーラ)がついてゐる。立派なもので、天象を形どつたやうにも見えれば、地球儀めいてもゐる。その上には、新月に星をあしらつた赤い埃及の國旗が、青空の下、朝日の中にしづかに飜つてゐる。

港の中には××丸の外に、イタリアやフランスの旗をつけた商船が三つ四つ碇泊してゐた。英本國から、支那の革命に備へるために香港へと送られる白い巡洋艦も二つ三つとまつてゐた。その一つに今石炭船が横づけにされ、跳橋を傳つて多くの土人がせつせと石炭を運びこんでゐた。その忙がしげに上つたり下つたりする黒い人影が、遠くからまるで餌を運ぶ蟻のやうに見える。

ダナはかうした光景をもつとよく見るために、後甲板へ登つて行かうとすると、チルタがそれを引き止めた。そして階段の上に英語と日本語で白く書かれた黒い制札を指さした。

「二等船客(オンリー・セコンド・パッセンジャース)の外登るべからず。」

ダナは登りかけた階段から、しづかに足をおろした。彼はしかし、別に腹立ちも不愉快も感じなかつた。彼は自分たちが三等船客であることを充分心得てゐた。唯彼等には、下のメインデッキの外、進歩を許されてゐない事を知らなかつたのに過ぎない。

メインデッキでは、もう荷づみの作業を終つて、小人(こびと)めいた水夫(セーラー)たちが、大きな二つのハッチを蔽ふために忙がしく立働いてゐた。そして埃及人アラビア人ユデア人なぞの物賣りが、――煙草屋、繪葉書うり、頸飾り賣り、埃及帽うり、名物の海老うり、それから黒い兩手の中で各國の錢をちやら〱鳴らしてゐる兩替屋(マネーチエンジヤー)なぞが、それ〲片言の英語や日本語で騒々しく呼びかけながら、客を目がけて雜然とそこらを歩き廻つてゐる。片隅では、一人の土人がデッキの上へぢかにあぐらを掻きこんで、「がら〱〱、がら〱〱」と異樣な呪文めいた言葉を唱へながら、茶碗を使つてしきりに奇妙な手品をやつてゐる。日本人の船客と船員たちがそのまはりに垣を作つて、面白がつて見物してゐる。

船べりには、一二等客らしい日本人と歐羅巴人が五六人、外を見おろしてしきりに笑つたりどなつたりしてゐる。見ると、土人たちがボートを船に近く漕ぎよせて、アラビア織の卓布や壁掛を賣りつけやうとしてゐるのだ。一人の色の黒い子供がボートを流さないやうに一心に櫂を操つてゐると、父親らしい中年のアラビア人が、ピラミッドや、椰子や、沙漠や、駱駝などを描いた織物をいくつとな

くひろげて見せる。そして片手をあけて指で數を示しながら、上へ向いて大きな口をあけて喚く。
「オールピーセス、五ポンド、大變安い。」
「馬鹿、」と客がてんで相手にしないと云ふ樣に笑ひながら云ひ返す。「オール、十シルリング。そんなら買つてやらう。」
掛合が暫くつゞく。出帆の時刻の迫つた今となつては、五ポンドの言ひ値が十シルリングにも五シルリングにも引きさげられる。値がきまると土人は買はれた品を細い繩にくゝりつけて、甲板目がけて放りあげる。かはりに金がくゝりつけて戻される。客たちは買つた織物をすぐ甲板の上にひろげて何かと評價しながら眺め入る。
ダナとチルタは、かうした中を、もの珍らしげにぶら〳〵歩き廻つた。日に照らされて船體が發するあくどい臭氣、ハッチから通風塔を通して發散する咽るやうな雜貨の香、そして異つた色々な人種の匂ひ、こんな不愉快な感覺も見るものゝ面白さに紛らされてしまふ。彼等のまはりでそれ〳〵に異つた言葉、――英語、日本語、埃及語、アラビア語、荒々しい土語なぞが、のべつ聲高に呼び交される……
機關士か、運轉士のやうな制服をつけた船員が、時々用ありげに甲板を横ぎつて行く。その度に、二人は右手をあげて會釋した。船員たちはいづれも叮嚀に挨拶を返して行つた。殊に、事務長らしい

男は、わざ〳〵帽子を脱いで彼等に親しみ深く頭をさげて通つた。

「兄さん。」チルタは嬉しさうにに〳〵して云つた。「この前こちらへくる時、僕たちはどうして日本の船にしなかつたんでせうね。」

「うむ。」ダナは悠然と卷煙草を燻らしながら、やはり滿足さうに答へた。「この次から、航海の時はいつも日本の船に乘る事にきめやう。」

「えゝ、贊成です。是非さうしませう。」

最初の銅鑼は、物賣りや見送り人たちを下船させるために、もの〳〵しい音を立てゝもうかなり前に響き渡つた。それでも、船はなか〳〵出さうに無かつた。スエズの水先案内者がまだやつて來ないらしい。

二人の印度人は待ちくたびれて、船室の方へ引返した。

戶口から入らうとした時、先に立つたダナは驚いて立止まつた。外でもない、六フキート近い巨きな白人がうす暗い船室の中に突つ立つてゐたのである。そればかりぢや無かつた。ダナが自分のものとして選んで置いた寢床を占領してしまつたらしく、そこに置いた小荷物は荒々しく床の上に放り出されてゐたのである。今しも彼は――植民地わたりの英國人に違ひない。四十ぐらゐな、酒飲みらし

い、横柄で下品な奴だ！——重いトランクを上の寢臺へ押しあげやうとして、やつと肩のあたりまで持ちあげたところだつたが、探るやうな意地わるい眼付でちよつとダナの顔を見たかと思ふと、彼に向つてそのだぶ〳〵した顎をしやくつた。
ダナはその意味を悟つた。然し彼は戸口に突つ立つて、相手を見つめた儘默つてゐた。チルタも彼の横に、脅えたやうな目付をして部屋を覗いてゐた。
「おい、」と英國人は太い聲で腹立たしげに呼んだ、まるで自分の奴隷にものを云ふやうだ。「こゝへ來て己を手傳はないか。」
ダナの落窪んだ大きな黒い眼はぎらりと光つた。數秒すぎた。と、彼は急に何か決心したらしく、手にしてゐた卷煙草を投げすてゝ、大股に英國人の側へ行つた。そして彼を手傳つてトランクを上の寢臺へあけてやつた。
英國人は別に禮も云はなかつた、然しさすがにほつとしたといふ風で、ダナのものである筈の寢臺の上へどかりと腰をおろしながら、小馬鹿にした調子でかう問いた。
「君たちはどこまで行くのかね。」
「コロンボまで。」
さう答へながら、幾分卑下した態度で、ダナは鼈甲製のシガレツトケースを隱しから取出した。そ

してそれを開いて彼の前へさし出した。
「サンキュー、」彼は尻上りな下品な調子で云つて、卷煙草を一本手にした。「ふむ、ぢや君たちは印度人だね。」
「いや、セイロン人です。」ダナはマッチを擦つて彼の煙草に火をつけてやつた。
英國人はその灰色の眼でづるさうに相手をじろ〳〵見ながら、いゝ氣になつてつゞけた。
「ふむ、セイロンもやはり印度ぢや無いのかね。」
「多くの人はさう思つてゐますが、事實は違ひます。」ダナは或る民族的な誇りをもつて、はつきりした態度で答へた。
「そしてあなたはどちらまで？」
「己は香港までさ。」
ダナはちらと弟の顔を振返つた。
「君たちはやはりこゝで乗つたのか。」
「はあ。」
「見たところ、君たちは商人だね。」
「はあ。」

「どんな商賣をしてるのかね。」

ダナは再び弟の顔をかへり見た。寶石商であることをしやべつたものかどうかと訊ねるやうに。さういふ彼等は、紳士ではもとより今度の旅でもカイロやアレキサンドリアで、買ふといふ體の良い名義のもとに、品物を掠奪するのを常習としてゐる英國人をさらに知つてゐるのだ。

「いゝえ、」とダナは當惑しつゝ答へた。「僕たちは今度商用で來た譯ぢや無いんです。カイロに親類のものがあつて遊びがてらやつてきたまでゝ……」

「ふむ、ぢや君たちは困つてる人達といふ譯ぢや無いんだね。」

そして彼は意味ありげににやりと笑つた。

ボーイが廊下をとほりながらちらと戸口から覗いた。

「おい、」英國人はボーイを呼び止めて、戸口の方へのつそり歩いて行つた。

「三等の船室はこゝだけか。」

「えゝ、さうです。もう一つ三等室がありますが、婦人用になつてゐますから……」とボーイは成つてゐない、片言の英語で答へた。

「ちえつ!」と彼は忌々しさうに舌打ちした。

「ぢやコロンボまで、この臭い黒奴(ニイグロ)どもと一緒に行けつて云ふのか。堪らん。だから日本の船は駄目

だ。これが歐羅巴の船なら、我々と黒奴と一緒にするなんて亂暴な事は決してしやしない。馬鹿々々しい。日本人は我々歐羅巴人を待遇する事を知らんのだ。」

「ぢや、一等か二等へお變りになつたらどうです。」ボーイは眞顔の中に、一味皮肉な色を湛へて云つた。

「ふむ、もしかするとさうするかも知れん。とに角、今すぐ行つてビールを二本取つてきてくれ。」

「はあ、」とボーイは片手を差出した。「お金を。三等客はみんな現金で頂く事になつてゐますから。」

「いくらだ？」腹立たしげに云つて、彼は片手をづぼんの隱しに突つこんだ。

ダナとチルタは顔を見合つた儘、いつまでも默つてゐた。やがて、兄は床の上に放り出された小荷物を拾ひにかゝつた。その中には寶石類の見本を納めた大切な箱もあつたのである。弟も默つて手傳つた。そして英國人の寢床からできるだけ遠く、戸口に近い所に二人の場所を選んで、外の荷物と一緒にそこへ引越した。

そして二人はまた默然として顔を見合せた。ダナが卷煙草の吸口を無暗に嚙み切つてぺつ〳〵と吐き出すのを見ると、チルタは息苦しさうにそつと溜息をついた。

いつのまにかスクリユーが響きを立てゝ、部屋が動搖してゐた。

船はボートサイドを立つたのだ。

この英國紳士はウヰリアム、アンダーソンといふのだ。

船客の名簿には、職業が技師となつてゐた。しかしどこの會社の、何の技師であるか、判つたものぢや無い。一體、植民地から植民地へとわたり歩くかうしたえたいの知れない外國人には、漫然と技師と名乘るものが多い。そしてこんな連中は、大抵底なしに横柄で、づうづうしくて、づるい。そしてどこへ行つても、わけても有色人種の間では自分たちが白人であることを、とりわけ大英帝國の臣民であることを誇示したがる。まるで彼の一切が惡德に包まれてゐたつて、その白い皮膚さへあれば特別な優越を誇り得る充分な理由になると心得てゐるやうだ。アンダーソンも、明らかにさうした奴の一人なのだ。

彼の一つしかないよれよれのスコッチの服も、綻びたワイシャツもひどく汚れてゐた。そのために靴だけ不調和に立派なのが妙に眼についた。荷物も僅かだつた。どうせ三等に乘つてくる紳士氣どりの外國人だ、その慘めさは墜落した天使にも例へられやう。

彼は滅多に船室から外へ出なかつた。初め毎日一二度くらゐビールを買つて來させて飲んでゐたが、それも三四日で止めた。金が無くなつたのだ。そしていつも寢床の上に大きなからだを横たへて旅行案内記や雜誌をよんでゐるか、眠つてゐるかした。

ダナ兄弟は彼に對してできるだけ當らず障らずの態度を取つてゐた。時には、長い間民族的に植ゑつけられた宿命的な諦めから、卑下した從順と尊敬さへ示してゐた。例へば、食事の時には、アンダーソンはまるで主人のやうに横柄に振舞つて、ダナとチルタに何かと用を云ひつける。なぜなら、三等ではボーイも忠實には食事に奉仕しないので。そんな時、いつもチルタは兄をかばつて、自分が立つてアンダーソンのために用を足してやる。そして茶が出ると、ダナはきまつて埃及製の上等の卷煙草のつまつた龜甲製のケースを彼の前に差出した。彼は默つて、それをとつてチルタに火をつけさせて、悠々と煙を吐きながら、折から皿を集めにきたボーイに不機嫌らしくこんな風に云ふのだ。

「おいこの連中が毛むくぢやらな黑い手をぬつと突出して白いパンを摑むところを見ると、己は食慾が消えてしまふ。今度からこいつらとは別々に食はせてくれないか。」

二人は例によつて默つて顔を見合はせる。そして次からは、英國人が食事がすむ頃を見計らつて、そつと食堂へ入つて行くやうにした。しかしボーイが一度に片づかないのをぶつ〳〵云ふので、彼にはチップを握らせねばならなかつた。

そして彼等は一日の大部分、甲板で海を見て暮らした。廣くもない船室に人もなげにひつくり返つてゐる巨きな白い豚らしい獸のことを思ふと、どんなに日ざしが強くつても、または臭くつても、メインデッキをぶら〳〵してゐる方がずつと氣持ちよかつた。少くとも時折、いるかの群が威勢よく跳

ね返りながら船を追つかけたり、波の上を掠めて無數の飛魚がすうつ〳〵と飛びかふのを氣がねなしに眺める事ができるといふものだ。

彼等は生れ落ちた日からの苦い〳〵經驗と見聞によつて、白人、わけても英國人の大部分は何らかの意味で皆人殺しか泥棒であることを知つてゐた。それで、二人は甲板で暮らしてゐても、船室に殘してある荷物のことがいつも氣がかりだつた。もつとも、ダナは一番安全な方法をとつて、寶石の見本を納めた箱や、セイロン島のあらゆる寶石をちりばめた象牙の象や、現金の大部分は早速事務長の所へ持つて行つて保管をたのんでしまつた。それでもやはり安心がならないので、二人は時々交替に用ありげな顏をして、そつと船室を覗きに戻つてみた。

一度、ダナがウエストミンスターの五十本入の罐のふたをあけて、そして十本ばかり卷煙草入に入れて、殘りを寢臺の片隅に隱すやうにしまつて置いて、デツキへ出て行つた。次に部屋へ戻つた時、何氣なく煙草の罐をみると、殘りの大部分は誰かに拔きとられてゐた。

見ると、アンダーソンは例のやうに寢臺の上に仰向になつて、雜誌を見ながら澄ましてウエストミンスターを燻してゐた。

ダナは默つてゐた。

その夕方、彼は新しいウエストミンスターをひと罐、アンダーソンに送つた。まるで盜みをされた

ことを感謝するやうなものだ。多分ダナのかうした心理は、勃興民族、わけても白人なぞには理解されないだらう。もとよりダナとしても、アンダーソンに好意や同情をもつてそんな馬鹿をした譯ではない。むしろそれを彼等の間に起ることを豫想せずにゐられなかつた、或る危機に對する一種の豫防手段と考へたかも知れない。いづれにしても、結果としては、彼等はアンダーソンによつていよ〳〵馬鹿にされるばかしだつた。

それからまもなくの事だ、チルタは不意に部屋へ戻つてきて、アンダーソンが何やら一心になつてダナの寢床をひつ搔きまはしてゐるのを發見した。

チルタはすぐ兄を呼びに行つた。ダナが昂奮して部屋へ入つてくると、アンダーソンはいきなり卷煙草を啣へながら聞いた。

「君、マッチを持つてゐないかね。」

で、ダナは隱しからマッチを取出して、火をすつて、彼の煙草につけてやつた。

彼は默つて出て行つた。兄弟は早速荷物を檢べてみたが、幸ひまだ何にも取られてゐなかつた。

まるで陸の見えない日がつゞいた。暑さは日に〳〵烈しくなつた。この紅海は、兩側にアフリカとアラビアの燃えるやうな沙漠を控えてゐるので、暑さは印度洋にまさつてゐる。そしてメインデッキ

には、日よけのために大きなずつくの幕が張られた。

ダナたちはもう甲板ばかりで暮らすこともできなくなつた。厭でも應でも、狭い暑苦しい船室でアンダーソンと一緒にゐなければならなかつた。

アンダーソンは相變らず、横柄な、意地わるい主人のやうに振舞つてゐた。例へば、煽風器にしても、彼はいつも自分ひとりで風を受けるやうな風に向けて置く。そしてダナが少しでも、自分たちの方へも風がくるやうにその向きを變へると、彼はぶつくさ立つて行つて、すぐ又、もとどほりに直すといふ仕末だ。唯二人の兄弟がいつも我慢づよく默々としてゐたので、まだ荒々しい喧嘩にもならなかつたのだ。

或る時彼はダナに向つて、不意に、五ポンド貸せと云ひ出した。

「コロンボにつけば、そこに僕の親友が警察署長をしてゐる。それから金を借りて、まちがひなくすぐに返してやるから。」そして彼はづるい笑ひを浮かべて、半ば脅やかすやうに、じつと相手の顔を見守つた。

ダナは非常に當惑した。貸せばもう取れないにきまつてゐる。拒絶すれば、こゝに一緒にゐてさきどんな目に遇はされるか知れたもんぢやない。仕方が無い、彼は二ポンドか三ポンドでもやつてしまはうか、さう思はないでも無かつた。

彼は暫くの間、考へ込つてゐた。そして結局、ありつたけの勇氣を絞つて、自分たちは餘分な金を持たないからと云つて斷はつた。といふよりは、寧ろ、あやまつたのだ。

アンダーソンは、長い間、ひとりでぶつ〳〵怒つてゐた。

ところが、夕食の後で、彼は妙ににや〳〵しながらダナの側へやつてきた。そして寫眞を二三枚差出しながら、これは滅多に手に入らない珍らしい品だ。一ポンドで買へと云ひ出した。あくまで押しつけがましい强制的な態度と調子だ。

ダナはまた困つたと思つたが、とにかく寫眞を手に取つてみた。チルタも側から覗きこんだ。彼等の目の前には、いかゞはしい形をした男と女の白いからだが入り亂れた。ダナは殆んど嚴肅な、腹立たしい顏をして、同時に赤くなつて、大急ぎでそれを相手に返した。

「どうだ、素敵だらう、みんな白人の美人だ。一ポンドは安いもんだ。」と英國人は彼らの前に立ちはだかつて、巨きなからだを搖すぶつてけら〳〵笑つた。

ダナは十シルリングの金を取出して、彼の前に差出した。

「私はその品はほしくありません。でも、あなたは金が御入用のやうですから、これだけ差あげます。取つて置いて下さい。」

アンダーソンは大いに不平な顏をして、すぐ金を取らうとしなかつた。

「十シルリング、それでは安すぎる。どうしても一ポンドで無くてはいけない。」

ダナはとう〳〵一ポンドの紙幣を出してやつた。英人は滿足して、寫眞をダナの手に渡さうとしたが、彼は何か穢らはしいもののやうに振返つて見やうともしないで部屋を出て行つた。

アンダーソンは上機嫌だつた。直ちにボーイが呼ばれた。ビールが運ばれた。彼はぢき良い氣持ちに醉つて、シャツ一枚でひつくり返つて眠つてしまつた。

アンダーソンがチルタに向つて萬年筆を貸せと云つたものだ。チルタは素直に、その大事な愛用の萬年筆を取出して、彼にやつた。彼はその日一日返さなかつた。

次の日の午後、二人の兄弟が甲板から部屋へ戻つてみると、アンダーソンはボーイと頻りに烈しく云ひ爭つてゐた。何でも、アンダーソンが洗濯賃を拂はないので、ボーイが怒つてゐたらしい。彼はひどく激してかう云つてゐた。「あなたがもしどうしても拂はないと云ふんなら、仕方がない、船をおりるまで荷物を差押へるからそのつもりでゐるがいゝ。」

「ふん、勝手にしろ。」巨きな英國人は、小さい日本人を掴み潰さないばかりの權幕で、烈しくどなつた。「英國の紳士を何と考へてるんだ、東洋の小猿め！　もしそんな事をしたら貴樣を英國の警察へ突出してやるぞ。」

「何が紳士だ、笑はせやがらあ、」と毒づいてボーイは荒々しく出て行つた。
アンダーソンは寝臺に腰をおろして、ぶり／＼一人で怒つてゐた。そして側にあつたビールをとつて、癇癪まじりに栓をひつこ抜いた。
ダナは滿足さうな微笑をもつて、セイロン語で弟にさゝやいた。
「この白い獸は、僕たちばかりでなく、船の日本人からもひどく嫌はれてるんだね。」
「あたり前ですよ、」とチルタも快心らしく答へた。
そして彼はいつものやうに、日記を書かうと思ひついて手帳を取出した。同時に、萬年筆がきのふ英人に貸したまゝになつてゐる事を思ひ出した。
チルタはアンダーソンの側へ行つた。英人が不機嫌きはまる苦い顔をして、ぐび／＼ビールを呷つてゐるのを見ると彼はちよつとおじ氣づいた。しかし必要なものは仕方がない。彼は幾分おづ／＼した叮嚀な調子でかう切り出した。
「書き物をしたいのですが、萬年筆を返して頂けませんか。」
「何だつて？」英人は妙に眼をぎら／＼させて、射るやうにチルタの顏を見つめた。「それならきのふお前に返したぢや無いか。己は二本も借りやしなかつたよ。」
チルタは脅やかされた上にびつくりしてちよつと默つてゐたが、やがておづ／＼と吃つた。「私はあ

なたから返して頂いた覺えがありませんが……」

「馬鹿っ！」と彼は雷のやうにどなつた。「君の寢床へちやんと入れて置いたんだ。よく檢べて見ろ。」

「ぢや、お前の寢床を探してごらん。」とダナはしづかに注意した。彼はさつきから異常な緊張をもつて彼等の對話を見守つてゐたのだ。

二人の兄弟は、チルタのばかりでなく、ダナの寢床まで、隅から隅まですつかり探してみた。しかし萬年筆はどこからも出て來なかつた。

「このとほり。」今度はダナが英人の側へ行つて、嚴とした態度で云つた。「いくら探してみても、萬年筆はありません。もしや、あなたの考へ違ひぢや無いんですか。」

「そんな事を云つたつて、返したものは返したんだ。己は知らん。」英人は顏を背けた。そして憤懣と腹立ちにしたゝか眉をひそめた。

「でも、もし寢床へ入れて置いたと云はれるのが本當なら、ちやんとそこにある筈です。ところがこのとほり……」

「ぢや、さつきの日本人のボーイでも盜んだんだらうよ、あの小猿めが！」

「あなたは恥づかしくないか。」と、ダナは急にひどく昂奮して云つた。「あなたはちやんと知つてるんだ……」

「ぢや貴樣は己を嘘つきだと云ふのか、それとも泥棒だと云ふのか。」

彼は相手をぐつと睨んだ。その間にもぶる／＼と震へる毛むくじやらな大きな手は、ビールをなみ／＼と注いだコップをそろ／＼と口もとへ運んでゐた。

「もし人が、」ダナはきめつけるやうに云つた。「他人から物を借りて置きながら、嘘をついて返さないとしたら、それは明らかに泥棒といふものだ。」

この言葉を云ひきるか云ひきらないに、英人の手からコップが飛んだ。ダナは肩から胸へかけてさつとビールを浴びた。そしてはつとする間もなく、アンダーソンは更に片足をあげて、靴の踵でダナの太腿のあたりを力まかせにぐんと突き飛ばした。彼はよろ／＼と倒れさうになつた。

この光景に面くらつて、チルタは思はず叫び聲を立てた。

ダナは立直つた時、全身をぶる／＼と震はせた。顔は蒼黑くなり、厚い赤い唇はぴく／＼引きつつた。アンダーソンに釘づけにされた彼の落窪んだ、白味の輝く、大きな黑い眼はもの狂ほしくぎらぎらと燃えた。兩手にはおのづと堅い拳が固められた。突如、彼は猛獸のやうに身を躍らした。と思ふと、巨きな英國人を寢床の上へ仰向けに突き倒して、兩手で相手の太い咽喉を力かぎりぐい／＼締めつけた。

チルタは悲鳴をあげて、部屋から外へ飛び出した。そして廊下を走りながら、大聲をあげて人を呼

んだ。

厨司係や、事務員や、ボーイなぞがどや／＼と部屋へ驅けこんできた。それを見て、ダナはやうやく相手の咽喉から、手を放した。アンダーソンは氣を失つて、ぐたり兩手をひろげて、死んだものゝやうに寢臺の上にぶつ倒れてゐた……

直ちに船醫が呼ばれた。彼はまもなく息を吹き返した。

ダナは事務長の部屋へ呼ばれた。若い事務長の前に立つた時、彼は今にも氣を失ひさうにしてゐた。英國人に對してあのやうな暴行を働いた以上、——よしや、全部の罪は相手にあるとしてもだ、——彼は當然受けなければならない重い處罰をすつかり豫期しないぢやゐられなかつたのだ。

しかし、有難い事には、こゝは英人によつて支配されてゐる彼の郷里セイロンでも無ければ、英本國でも無かつた。また、英國の船でも無かつた。それは日本の船であり、云はゞまるで利害の異つてゐる日本の領土であつた譯だ。それで事務長がダナからひと通り事情を聽きとつた後で、彼を責めるやうな色を少しも見せなかつたばかりで無く、却つて優しい同情と好意を示した時、彼はびつくりした。そして初めてその理由を理解した、そして助かつたと思つた。

「それは本當にお氣の毒でした。」事務長はまるで陳謝するやうな態度で云つた。「どうも、あゝした種

民地わたりの英國人には、私共もいつも手古ずらされてゐるんでしてね。まつたく困つたもんですよ。」
そして彼は實際當惑したやうに笑つた。
ダナは裁判官のかはりに、親切なやさしい味方を發見したのだ。そして彼等白人が印度人に對していつもどんな無茶苦茶な横暴や、掠奪や、殺人的な行爲をやつてゐるか、それを熱心に訴へはじめた。彼は再びすつかり昂奮してゐた。
ダナに對する一般の同情から、事件は簡單に片がついた。どつちにしたつて、彼には何の罪も無かつたのだ。然し、こゝに困るのは、船室の問題だ。こんな事になつては、二人の兄弟は、いくら何でも今後アンダーソンと同じ部屋に寢起してゐる譯に行かない、それは虎と同居するやうなものだ。それで彼等は事務長にかけ合つて、二等の方へ移るより仕方あるまいと考へた。
然し、そんな心配は無用だ。アンダーソンはこんな機會を利用しないで置く奴ぢやなかつた。彼はこの事件は、苟も、大英帝國の一紳士をあのやうな穢はしい黑奴と同室させた船に責任あるものとして、彼のために直ちにもつと適當な別の船室を用意するやうに、强硬な態度で事務長にねぢこんだ。これには事務長も困つた。營業政策から云つて、殊に殆んど英國の領土ばかり通過しなければならない歐洲航路に於いては、英國人の機嫌を損ねることは何よりも禁物なのだ。事務長は仕方なしに、アンダーソンを二等の方へ移さうとした、――勿論三等の料金のまゝで。ところが、二等の船室はボー

トサイドからもう滿員になつてゐた。船室は一等にあるばかしだ。アンダーソンは一等へ移される事になつた。

かうして、次の日から、アンダーソンの見すぼらしい、しかし傲然たる巨きな姿が、一等のプロムナード、デッキの上に見られるやうになつた。

ダナとチルタは部屋へとぢ籠つてしまつた。

わけてもダナはひどく鬱ぎこんでゐた。食事さへとらないで考へこんでゐる仕末だ。どうやら事件は片づいたやうなものゝ、かうした出來事の後で、白人どもが決して自分達を許して置く筈の無いことが、ちやんと判つてゐたのだ。もし甲板の上でアンダーソンに出會ひでもしたら、今度は彼がダナを海へ叩きこんでしまふだらう！　例へさうでなくつても、白人どもがもし黑奴に復讐しやうと考へたら、容易にどんな手段でも見出し得るのだ。そんな事は、大人が子供の手をねぢあげるくらゐに簡單な事だ。こゝはまだ日本の船だ。しかしまもなくコロンボへつく、そして英國の權力下に身を置くが最後、どんな事が豫期し得られるか、知らないものは神樣だけだ！……

チルタには兄の氣持ちがよく判つた。そのために却つて慰める言葉も見つからなかつた。彼は唯ダナの側に座つて、彼の暗い重い心配げな横顏を眺めては、そつと溜息を漏らすだけだ。

次の日だ、見知らない一等のボーイが入つてきた。そしてダナに一通の手紙を渡して行つた。アンダーソンからだ。宛名には「黒き惡魔へ」と書いてある。ダナの手は微かに震へた。彼はすぐに封を切らうともしない。そして暗鬱な眼をぢつと床の上に据えてゐる。

「何を云つてよこしたんでせう。僕開いてみませうか。」

チルタが兄の手から手紙をとつて、封を開いた。中には萬年筆で、——勿論チルタのそれだ、——かう英文が書かれてゐる。

「親愛なる黒き惡魔、化物の君よ。御機嫌はいかゞ。君たちの親切な行爲に對しては、僕は今さら何と感謝していゝかを知らない。とに角君たちが僕を、——大英帝國の善良なる一市民を絞殺せんとしたることは、否殆んど瀕死の狀態に陷れたることは、明白なる事實だ。君たちは植民地に於ける英國の法律がどんなものか、充分御承知の筈だ。コロンボにつき次第、僕は直ちに君たちを英國の官憲の手に渡してやる。君たちは直ちに死刑に處せられるであらう。

大英帝國市民

ダブルユー・アンダーソン」

手紙が床に辷り落ちる。チルタは彝と兄に抱きついた。

「どうしやう、どうしやう、兄さん。」チルタは涙を流し、聲を震はして呟いた。「だつてみんなあいつが惡いんぢや無いか……。」

「いつもかうなんだ、あいつらのやり方は。僕は知つてる。」ダナはうつろな聲で云つて、ちよつと唇を嚙んだ。「實際あいつはこのとほりにやるだらう、僕たちの首を締めてしまふだらう。あの時から、僕にはちやんと判つてゐたんだ。」

「だつて、」氣弱なチルタはとう〳〵泣き出した。「だつて、そんな無法な事が出來る筈が無い。そんな、そんな……」

「駄目だよ、いくら泣いたつて。」ダナは殆んど冷酷な調子で云つた。「この世では、僕たちはどうしてもあいつらには叶はないのだ。それに、お前は知つてるだらう、あいつがいつか五ポンド金を貸せと云つた時に、コロンボの警察署長が親友だと云つたことを……」

「おゝ、兄さん、どうしませう!」

チルタは一層しつかり兄のからだに抱きついた。そして肩に顔を押しあてゝ子供のやうにしくしく泣いた。ダナは氣の拔けた眼をして、ぼんやり前方を凝視してゐる……

紅海はすでに通りぬけた。そして船は今燃えるやうに熱い、茫洋とした印度洋へ乗り出したのだ。

落日は近い。幻想的な狂ほしい雲に自分自身を灼熱した焔でかくかくと焼き爛らしながら、水平線の上で巨きな太陽を三つの部分に引きちぎつた。そのために、そこにはまるで三つの太陽がひと塊りになつてくら／＼燃えてゐるやうだ。そして凪いだ果てしない海の面には、黄金色の熱い熱い光が流れ、輝き、ゆさぶり返つてゐる。

船客はプロムナード、デッキから、ヹランダから、メインデッキから、二等の遊歩場から、それ／＼この美しい、眩惑的な、荘麗な印度洋の落日を眺めてゐた。

船尾には三四の人影に交つて、ダナの姿が見られた。彼はさつきから手欄(てすり)に片肱をかけて、何か恐ろしく熱中した顔付で、身動きひとつしなかつた。落日の下に揺れかゞやくひろ／＼とした海の上には、船の進んできた跡が、白くうね／＼と印されてゐる。彼の沈鬱な眼は一心にその跡を追ふてゐるのだ。船は進む、船の下では恐ろしい勢ひで白い泡が湧き返る。そして新しく跡を刻む、しかし遠くの水脈(みを)はつぎ／＼と浪に消されて、段々幽かになつてゆく……

ダナはいつまでもその場を動かなかつた。とう／＼彼は一人になつた。

厨司・長(チーフ・スチユーワード)が両手をうしろに組んで、ぶら／＼そこを通りかゝつた。

「もし／＼、」彼は通りすぎやうとしたが、フト立止まつて声をかけた、「あなたは何等(なんとう)のお客さんで

すか。」

ダナは振返つてじろりと相手の顔を見た。そして何にも答へなかつた。

「とに角こゝは二等客の遊歩場になつてゐるんですから、さうで無い方は下へおりて下さい。」

さう云ひ棄てゝ、厨司長はこつ〳〵立去つた。然しダナは依然としてその場から動かうとしなかつた。

それから五分とは經つてゐなかつた。

二等の遊歩場でゴルフをやつてゐた支那人のひとりが、不意に途方もない大きな聲を立てた。船尾に立つてゐた知らない男が、不意に手すりに片足をかけて、深く深く前かゞみになつたかと思ふと、そのまゝ海へ落ちて行つたのを見たのである。勿論、ダナだ。

人々は船尾へかけ集まつた。ひとりがいきなり側にあつた浮標（ブイ）を海へ投げこんだ。しかしその間も船はぐん〳〵進んでゐるのだ。もう三十間も彼方に、浪の間からダナの頭がちらと見えるばかりだ。そして白い浮標は彼からずつと離れて、徒らに浪に弄ばれてゐる。

大騒ぎだ。厨司長はまつしぐらに船長室へ驅けて行つた。船長はすぐブリッヂへ驅上つて行つた、そして船を廻轉させるやうに手筈した。三等運轉手は直ちに通信器（テレグラフ）の眞鍮のハンドルをとつて「徐行（スロー）」へまはした。それは直ちに氣たゝましい鈴の音となつて、狂暴な轟音を立てゝ器械の荒れ狂ふ、汽罐

室に通じた。汽罐室では思ひがけない命令にみんな異常に緊張して部署についた。船が徐行になるのを待つて、舵手はかぢを取り直した。

やがて、巨きな船體は徐々に右へまはり始めた。ダナが投身した箇所から、少くももう半マイルは來てゐる。だから船はそこを中心にして、かなり大きな圓を描かねばならない。船員も、船客も、みんな手すりによりかゝつて、緊張した眼を浪の上に注いだ。そこにはアンダーソンさへゐた。あつちでもこつちでも双眼鏡が動いた。火夫たちは早くもボートデッキへ集まつて、ボートをおろすばかりの用意をしてゐる。

目くるめく日はとうに沈んだ。一時は暖かい華やかな夕燒がぎら／＼海を燃え立たせてゐたが、それも見る／＼薄れて行つた。反對の水平線にはもう夕闇が迫つてゐる。そして暮れてゆく海の上には弱い光の反射と、暗い浪の影とがあやしく入り亂れる。何しろこゝは大海の眞ん中といふばかりでなく、一萬フィートから一萬四五千フィートの深海だ。鮫や鱶の類が跋扈してゐるのは云ふまでもない。そこへ今一個の人間が沈んだのだ。人々は魔の淵を覗くやうな、凄い、無氣味な感じを持たずに覗いてみる事が出來るものぢや無い。

船はまはる、ゆる／＼とまはる。しかしダナの姿は誰の双眼鏡にも映らない。人々は二三度浪の間に彼の頭を見たと思つたが、それは浪の影がつくる錯覺にすぎないのだ。

三十分ばかりで、船はつひに一つの圓を描き終つた。ダナはとう／＼發見されなかつた。規約としては、かういふ場合、船を二回まはしてみる事になつてゐるのだ。然し、大抵一度まはして見つからなければ、二度とくり返す勞は取らない。そして××丸は再び先の針路をとつて、東へ東へ走つてゆく。

厨司長が船尾へぶら／＼歩いてゆくと、先にダナがゐた所に今チルタが立つてゐた。

「船長！」とチルタは泣きながら彼に叫びかけた。「船長、どうか船を止めて下さい。そしてもう一遍まはして見て下さい。そしたら兄はきつと見つかります。どうか、どうか、船長！」

「あなたはそこにゐちやいけない。こゝは二等だから三等の方へおりて下さい。」

これがチルタへの返事だ。そして厨司長は頭を振つてしづかに立ち去つた。

チルタはやはりそこを動かなかつた。

海は暗くなつてゐた。月は無かつた。それでも船の走つてきた跡は、白い浪がしらによつてずつと遠くまでうねうねと見すかされた。そして大きな浪のうねりの上には、斑點になつて青い燐光が燃えた。彼の目には人魂のやうにも見えるだらう。

眞夜中すぎ、そろ／＼夜あけの方が近くなる時刻だ。

船は相變らず闇をついて、東へ東へと走つてゐた。マストには風が鳴り、船のまはりには絶えず大きな浪が白く碎けてゐる。潮が惡いと見えて、プロペラーがまはる度に船體は痙攣するやうにぴくん／＼と妙な搖れ方だ。

よく晴れた印度洋の夜の空こそ見ものだ。オリオンの星座が赤い火のついたマストの上にはつきり懸かつてゐる。ポンチ繪じみた兵隊の姿。南西の空には、特別一等星のシリウスが、燃えてゐる寶玉のやうな鮮やかさだ。そして南東の空には、美しい十字架星座がやうやく水平線の上に昇つてきたところ、これと同時にわれ／＼は北の空に低く、暗い水平線の上に沈みかゝつてゐる北極星と、大熊星を微かに見る事ができるのだ。

甲板には人影が無かつた。唯メインデッキのハッチの上に、ボーイが二三人、部屋の苦熱を避けて眠つてゐるだけだ。

水夫がひとり、提灯（ランターン）を手にして、どこからか出てきた。彼はメインデッキを橫切つて二等の遊步場へと登つて行く。彼は船尾へ行つた。そこには船の進行の度を計る裝置があつた。彼はそれを檢べるのだ。

船尾には誰か客がひとり立つてゐた。しかし印度洋の熱い眠られない夜には、そんな事は別に珍らしくも無い。彼は用をすますとそのまゝブリッヂへ引返して行つた。

次の朝、船ではまた大騒ぎがもち上つた。朝食の時になつて船の中のどこにも、チルタの姿の見えない事が判つたのだ。然し今度はもう船をまはして見る必要が無かつた。夜ふけに水夫が彼を船尾で發見してまもなく投身したものとしたら、船は旣に七八十マイルは來てゐた譯だから。

船はつひにコロンボへついた。英國の檢閲官吏が、上陸客の旅券を檢査するために、早速××丸へやつてきた。そして例によつて、一等のスモーキング、ルームに陣どつた。

今度の事件について、日本の人員たちは皆ダナとチルタに心から同情してゐた、そしてアンダーソンをひどく憎んでゐた。それで、事務長はアンダーソンを罪人として官憲に引渡してやらうと考へて、英人の官吏が旅券を檢べにかゝる前に、先づ航海中の悲劇について語り出した。

若い事務長は義憤に驅られて一生懸命だ。彼は話しながら昂奮してきた。悲しいことに、英語が思ふやうにあやつれなかつた。彼はあせつた。そして二人の犧牲者がどういふ種類の人間であるかといふ事さへ、說明するのを忘れてゐたものだ。

オスカー、ワイルドのやうな顏付をした若い官吏は、葉卷を燻らしながら、鹿爪らしく眉根をよせてみたり、ちよつと書類をいぢつたりして、事務長がしやべるのをきいてゐた。おもしろくも無い話だ。ひと通り話が終るのを待つて、彼は手帳を取出した。そして書きこむ用意をしながらぶつきら棒

にかう聞いた。

「で、自殺者の國籍は？」

「二人ながらセイロン人で、兄弟です。」

「あゝ、くろんぼか！」と彼は呟やいた。

「何だつまらない！」さすがにさう迄では云はなかつた。そして、とにかく何事かを手帳に記入した。そして、直ちにつめよせた客を相手に、旅券の檢査に取りかゝつた。

それだけだ！ そしてアンダーソンは別に檢べられさへしなかつた。

次の朝、××丸はコロンボを立つた。

船がしづ／＼と動きはじめると、どこからともなく、小さい丸木舟（カノー）が幾十となく船のまはりへ漕ぎよせてくる。まるで魔術で現はれるやうだ。その丸木舟にはそれぞれ土人が黒い肌を露（あらは）に猿股ひとつで乗つてゐる。彼等は客に船の上から海へ金を投げさせて、水中へ飛びこんで行つてそれを拾ふのだ。それにしても、どこまで行つても、どこへ行つても、世界には黒奴の仲間が、何とまあ無限に多くゐることだ！

アンダーソンは一等の遊歩場を、例の傲然たる態度でぶら／＼やつてゐる。そして客が海へ金を投

けたり、黒人が水中へ潜つて行つて見事にそれを拾つたりするのを、蔑すむやうに眺めてゐるのだ。
その時船のま近まで丸木舟を漕ぎよせてゐた一人の黒人が、アンダーソンの方を見あげて叫んだ。

「金を投げてくれ。」

アンダーソンは氣のつかぬふりをしてゐたが、何と思つたか、急に吸ひかけの卷煙草を口からとつて、その黒人めがけて放りつけた。火のついた卷煙草は、くる／＼と舞ひ落ちて、黒人の灰色の縮れた髪にあたつた。彼は激怒した。そして下から櫂を振りあげて彼にどなつた。

「やい悪魔！　泥棒！　人殺し！」

「貴様こそ悪魔だ、化物！」と英人はどなり返した。

そして彼は毒々しく笑つた。それから今度はさらに上衣の隠しから、煙草の罐を取出した。彼は大急ぎで中味を抜きとつた。そして先の黒奴めがけて力かぎり空罐を放りつけた。罐は漕ぎ手の足を擦つて、どぶんと海に沈んだ。

黒奴は火のやうになつた。それを見て、外の丸木舟の連中も烈しく怒つた。彼等は一せいにアンダーソンに向つて、吠え立て、櫂を振りまはし、拳を振り、あらゆる脅かしの身ぶりをした。殊に火を投げられた最初の黒奴は、もう仕事の事なぞ忘れてしまつたやうだ。そしてあくまでアンダーソンに追ひ縋らうとするやうに、徐々に速力を早めつゝある××丸を追つてきた。その他の丸木舟も一緒に

つゞいた。然し一萬トンの船と、哀れな丸木舟とでは、今の場合どうにもならないのだ。

アンダーソンは高い手すりから彼等を見おろして、相變らず横柄な態度で毒々しく笑つてゐた。それにしてももう一度くり返して云ふが、どこまで行つても、どこへ行つても、世界には黑奴の仲間が何とまあ無限にうざ〳〵ゐる事だ！

いきり立つた黑奴の群も、つひに追ひ縋るのを斷念しなければならなかつた。そして彼等は船を見送りながら、アンダーソンに向けて再び櫂をふりあげ、拳をふりまはし、彈丸のやうに吼えた。

「今に見ろ、人殺しめ、貴樣たちをこの足の下に踏みつけてやるぞ！」

船大工

「冗談云つちやいけねえ、何にも物ずきにこつちから、己の方から話しかけた譯ぢやねえんだ。事務長ぢやあるまいし、己にや初めつから一等船客の御機嫌なんぞ取る必要は無かつたんだ。」

船大工大助が充血した大きな片眼で事務長をぐつと見すえて、内心憤慨したのももつともだ。それあ、彼は確かに一等船客の遊歩場を横切つて歩いてゐた、――色の褪せた紺の詰襟の服の胸をぐんと張つて、外曲りの不恰好な足に重い長靴を引きずつて。もとより船大工は必要次第で船の中なら何處へだつて行くんだ。

折から船はポートサイドを出たところだ。日が暮れかゝつてゐた。目のくらむやうな大きな太陽がアフリカ大陸の向ふへ落ちて行つたのはかなり前だ。黄金色に輝いた夕空では、刻々光が衰へて行つた。風が寒かつた。防波堤がどこまでもつゞいてゐて、積み重ねられたかどかどしい大きな岩の上を、暗い冷たい潮が乘り越え、飛び越え、ざわついてゐた。

いよ／＼眼に果てもない地中海へ乘り出したんだ。行く手にはわびしい夜の色と一しよに、暗澹とした重い積層雲が一面に蔽ひかぶさつてゐる。そして沖へ出るに隨つて、船は妙に搖れ出した。船體が巨きいのでちよつと際立たないが、しかも横ゆれと竪ゆれとの交り合つた意地惡い搖れ方だ。おまけに港で貨物の積みこみ方が拙かつたと見えて、脚の重い船が中心を失つたやうに、かなり左へ

傾いでゐる。何の事は無い、ぴつこで旅に出るやうな心もと無さだ。

「おい君、あれは何だらうね？」

大助は立止まつて、振返つた。鳥打帽子、金縁眼鏡、頬の赤い丸顔、小柄ででつぷりした中年の紳士、——原子爵が左手に持つた双眼鏡を目から離しながら、右手を海の方へ指してゐた。見ると、わびしい灰色の水平線を背景にして、一海里ばかり離れた海の上に、一本の細長い棒がにゆつと突き出てゐる……

「あ、あれですか。」大助は笑つて無雑作に答へた。「あれはずつと前、ドイツの潜航艇にやられて沈んだ英國の船ですよ、旦那。」

「ほゝう。マストだけ見えてるんだね。して見ると、こゝいらはまだそんなに深くは無いんだね。」

「港の近くですからね。ところがあの時分は、みんなポートサイドの近くまで來て、燈臺の火を見てやれ安心といふところで、ドーンとやられたんですよ。けんに、わつしの乘込んでゐた××丸なぞは……」

「おや。」子爵の愛想のよい圓顔は異常な興味と好奇心で輝いた。「君も潜航艇にやられた經驗を持つとるんかね。」

そしてさも感嘆したやうに船大工の黒い鬚だらけの顔を仰ぎ見た。

大助は持前の胸を張り、兩手をうしろに組み、長靴の兩脚をぐんとひろげて突つ立つてゐた。そしてつゞけた。

「……わつし等はマルセイユを出る時から何よりも潜航艇が恐ろしかつたので、――その時分にはどこの船だつてさうでさ――いつやられても差支へないやうに、ボートデッキからはいつでもボートをおろせるやうに宙にぶらさげたまゝやつてきたのです。幸ひ地中海も何日かかゝつて無事に乘り切つた。やがてポートサイドの燈臺も微かに見え出した、こゝまで來りやもう大丈夫安心だといふので、ずつと用意のできてゐたボートをみんなひつ込めてしまつたんですよ。すると、そこへドイツの潜航艇がひよつこり現はれて、ズドーンでさ。」

「それで船はすぐ沈んだかね。」子爵は先を促すやうにせきこんで聞いた。

「五分間で沈んでしまひましたよ。船の沈むのは早いもんですからね。」

「で、君たちは……みんなはどうした？」

「わつし等はまた大うろたへでボートをおろしましたよ。勿論ボートに乘り損ねて慘死したものもありましたさ。あれであの時五十人くらゐやられましたかね。ところが實に綺麗な月夜の晩でしてね、わつし等は夜ぢゆう海上に漂つてゐましたよ。しら／＼明けにフランスの巡洋艦がやつて來てみんなを助けてくれましたが。」

「随分恐ろしかつたらうね、やられた時は？」

「もう十年も前の事で……でもあんまり良い氣持はしませんよ、そりや。」彼は黒い亂ぐひ齒を見せて短く笑つた。

「そりやさうだらうとも。」

そして明らかに話ずきな子爵は、大助を途ぎらせまいとするやうに、親しみ深い調子でさらにかう話を持ちかけてきたものだ。

「君は海上生活をするやうになつてから、もう何年ぐらゐになるかね。」

「もうざつと二十年になりますよ。」

「二十年！　ほう、随分長い間だね。さぞ色んな目に會つた事だらうね、その間には。」

「それや、もう……」

「大暴風にも、衝突にも、坐礁にも、大抵の事には出遭つただらうね。」

「みんな出遭ひました。」そして大助は何か話し出さうとした。

「まあ君、」と子爵は彼をひつぱるやうにして云つた。「あつちへ行つてひとつビールでも飲まうや。そして君が海上生活の經驗談でも聞かうぢや無いか。」

子爵は先に立つてさつさと歩き出した。

相手は貴族で金持だ。御馳走になるのに何にも遠慮する事はない。それに、彼には子爵の平民ぶりがかなり氣に入つた。

「僕は君たちのやうな勞働者と話をする事が好きでね。」

子爵は酒場の受付の前に大助と並んで、二人のためにビールを注文しながら、一層親しさうに云つた。

「やあどうも恐れ入ります。」

大助は大きなコップに二杯三杯と立てつゞけに飲んだ。子爵は相手のコップにビールを絶やさせなかつた。更に五杯六杯と飲んだ。大助はとても良い心持になつた。彼は酒が好きなと同じ程度に話好きでもあつたのだ。まして好意に充ちた熱心な聞き手を持つてゐるのだから、彼の口は自然に輕くなり、太い聲はだん／＼高まつて行つた。船乘りに取つては、いつだつて、どこへ行つたつて話の種の盡きるといふ事は無い！ 今しも彼は醉で片目を血走らせながら彼がもう一つの不幸な片眼を失つた時のことを、――つまりボンベイの波止場で英國の水兵多勢と、もの凄い亂鬪をやつた時の事を得意になつてしやべつてゐた……

彼等のうしろは狹い廊下を隔てゝ、喫煙室の入口になつてゐた。中では明るい電燈の下で、四五人の邦人の一等船客がさつきから麻雀（マージャン）に夢中になつてゐた。

中から薄い口髭のある若い事務長が、兩手をうしろに組んでそろりと出てきた。彼は二人を、とりわけ大助の上機嫌らしい横顔を見た時、その眼がちよつと光つた。子爵は何氣なくうしろを振返つた。事務長は叮嚀に擧手の禮をして、しづかに遊歩場の方へ出て行つた。

二三分すると事務長は用ありげにまたそこへ戻つてきた。彼は二人の方を見やうともしないで、うつ向きがちにして喫煙室へ入つて行つた。暫くすると彼はまたそこから出てきた。そして熱心に話しこんでゐる大助のうしろ頭を睨むやうにちらと見て、大急ぎで出て行つた。

大助は何にも氣がつかなかつた。ボーイがやつて來て、事務長が用事で呼んでゐると告げた時も、彼は胸をそらして高々と笑つてゐて聞きとらなかつたくらゐだ。

「おい。」ボーイは彼の腕を摑んで聲を高めて云つた。「事務長が用事があるからすぐに來いつて呼んでるぜ。」

「うむ、事務長が？　あの若僧が已に何の用があるんだい。また窓の締まり具合が惡いとか何とかぬかすんだらう、べら棒め、そんな事あ自分で直せと云つてやれ。」

彼は樽はずしやべり續けやうとして、さらにビールを引つかけた。然しこの上官の命令は、もう彼の感興を遮つてしまつた。で、彼は子爵に向つていきなりぺこりとお辭儀をした。

「ぢや旦那、御馳走さまでした。事務長が呼んでをりますので……」

感興を遮ぎられたのは原子爵も同様だつた。

「残念だね。」と彼は大助の荒くれた大きな片手を握つて残り惜しさうに云つた。「ぢや、用事がすんだらまた來給へ。船の中は實に退屈でね。君の話はなか〳〵面白い！」

大助は媚びられて、すつかり良い氣持になつてゐた。階段を下り電燈の暗く細長い廊下をとほり、事務長の室の前に立止まつてドアを開けるまでは。事務長は両手をうしろに組み、落つかないいらいらした樣子で、狭い部屋の中を行つたり來たりしてゐた。

「何か御用で？」彼の醉ひで赤黒く見える顔にはまだ笑ひの痕が殘つてゐた。

若い事務長は立止まつて、冷やかにじろりと彼を見た。

「君は今上で何をしてゐた？」

「何を？」不審さうに彼は繰返した。「原子爵さんと話してゐましたよ。とても話ずきな旦那でしてね……」

「それだけぢやあるまい？」

大助は愈々面くらつて答へた。

「それだけですよ。そしてビールを御馳走になりました。酒場のところで。」

そして、それがどうしたんだと云はぬばかりに彼は事務長の顔をじつと見返した。

事務長は眼を伏せた。そして一層いら〳〵した様子で再び部屋を歩き始めた。
「困るぢやないか。」やがて彼は投げつけるやうに云つた。「無暗に一等船客の所へ行つて話しこむさへあるに、酒まで御馳走になるなんて。お前はどんな下品な臂や調子で臆面もなくしやべり立てゝゐたか自分で知らないんだらう。」
大助は一時に酔の醒める思ひがした。太い眉毛がぴく〳〵動いた。大きな充血した片眼をぐつと据えて、相手の視線を避けるやうに、うつ向きがちに部屋を動きまはる事務長の後を、しつこく追つてゐた。
息苦しい緊張と、沈默の數十秒がすぎた。機關室のもの凄い轟音が近々と響くだけ。大助は今にも何か云はうとした。
「もう行つても宜しい。」事務長はさう云つて、再び冷やかにつけ加へた。「これからみだりに一等船客のところへ行つて話しこんだりなんかしては困る。」
大助は唇を動かした、然し何にも云はなかつた。そしていきなりばたりとドアを開けて、長靴の音荒々しく行て行つた。
「ふん、學校出たての青二才め！」彼は廊下を歩きながらひとり毒づいた。「己が一等船客と話してゐたのがいけないつて。一等船客なんかみんな束にして貴樣に呉れてやらあ。畜生！」

すつかり暗い夜だ。彼はいつか鐵の手すりに凭よつて、暗い海に瞳を凝らしてゐた。浪は高く、船の動揺は烈しかつた。そしてマストには風がびゆう／＼唸つてゐた。

「畜生、これで大暴風にでもなつて見ろ。」大助は北風の吹きすさむ眞つ黒な空を見あげて拳を擧げて唸つた。「その時には、事務長、貴樣に一たい何ができるんだ。」

實際、風は刻々烈しさを增して行つた。下甲板には既に浪が打ちあげてゐた。

暴風の襲來は疑ふべくも無かつた。

ボーイたちが窓を鐵の扉で堅めるために受持の部屋々々を慌しく驅け廻つた。大抵の客は船酔ひで苦しんでゐた。事務長も青くなつて、ベットの上に仰向になつてゐた。

甲板では水夫たちが、ハッチの蓋を浪に取られない前用意に、太綱を八重十文字に絡みつけるため忙がしかつた。

その時、彼等の足はもう絶えず浪で洗はれるやうになつた。水夫たちは今度は、甲板を横切つて太い麻繩を引かねばならなかつた。船員やボーイはその繩に摑まつて甲板を行つたり來たりするのだ。

暗い大浪は船べりに碎けて、大砲のやうに轟いた。船は恐ろしく動揺して、五十度、四十度ぐらゐに傾いた。どうかすると、船はそのまゝ沈むのでは無いかと氣遣はれた。

廊下を歩くと、からだをあちこちの壁に打ちあてられた。階段ではてもなく轉がり落ちた。ベット

では客のからだは轉がりまはつた。

夜の十時頃、暴風は今が荒れ狂つてゐる最中かと思はれた時、或る船室の窓の鐵扉が浪のために打破られた。いよいよ船大工が登場しなければならなかつた。續いて、下甲板から二等の遊歩場へ上る鐵の階段が大浪のために叩き折られた。然し大助は今その方に構つてはゐられなかつた。それよりも下甲板に彼の作つた急ごしらへの厩があつて馬が二匹繋がれてゐたが、その小屋がどうかすると、馬もろとも浪に浚はれさうになつてきた、大助は今、水夫たちの助けを借りて、ぐらつき出した小屋の破損を繕つたり、それを太綱で通風筒に、縛りつけたりしなければならないのだ。

煙突、マストも折れるかと思はれるばかり猛惡に吹きつける風、船べりを越えて打あける山のやうな暗い大浪、少しも體を安定させない烈しい船體の動搖、――そんなものに大助は一向不安も恐ろしさも感じなかつた。それどころか、鍛へられた海上の勞働者は、こんな中で働くことに却つて英雄的た勇氣と喜悦をさへ感ずるのだ。船なんてそんなにやすやすと沈むもんぢや無い。それに、彼がこれまでに幾度か經驗した遭難から較べりや、これなんかまだ最惡のものぢや無いんだ……

「おい、その槌をよこせ、何をまごまごしてるんだ、間拔け！　早くしろ……」

大助が忙がしく働きながら、近くの水夫にさうどなり終らない内に、彼等は闇の中で一齊に大浪をかぶり足を浚はれた、そして溺れる者のやうに悶いた。畜生。大助は夢中で厩の片隅にしがみつい

た。同時に浪は激しい加勢を得て、悠々と小屋を浮かび上らせた。そして暴れまはる二匹の馬や、力ない人間共と一緒に、再び元の暗い荒海へ引揚げて行つた。

荒れ狂ふ眞夜中をとほして、甲板の上で異様な叫び聲が起つた。

「馬が浪にさらはれた！」

「船大工と水夫が浪にさらはれた！」

――一九二八年十一月二十七日――

名譽婆さん

この間、チヤツプリンの「キツド」を見たいばつかりに、或る場末の活動寫眞館へ行つた。ところが、樂しみにしてゐた「キツド」はもう半ばすんでゐて、ぢきおしまひになつた。そして、次が例の軍事宣傳劇として評判をとつた「吉岡大佐」だつた。私はがつかりしてしまつた。そしてすぐに戻らうかと思つた。然し折角料金を拂つて入つたばかりだのに、この儘出てしまふのも殘念だつた。

「おい、どうするい、お前はもつと見てゐたいか。」と私は一緒に行つた妻に聞いてみた。

「さあ、」と彼女は躊躇してゐたが「でも折角やつて來たんですから、もう一つぐらゐ見てゆきませうよ。日本映畫も久しく見ないから稀にはいゝでせう。」

「でも、(吉岡大佐)ではね……」

「だつて構はないぢやないの。軍事宣傳劇つてどんなものだか參考に見て置くのも惡くは無いわ。」

「それもさうだね。」

そして私は腰を落ちつけて、引つゞいて幕に映り始めた「吉岡大佐」に見入つた。

私も妻も、最近數年來といふもの、日本の映畫をまるで見なかつた。古い失望が、てんで見る氣を起させなくしてしまつてゐたのだ。ところが、今「吉岡大佐」を見てゐるうちに、まづ、日本の映畫も隨分進步したものだと感心した。筋も自然で誇張が無かつた。場面々々の選び方も、撮影の仕方も

うまかつた。役者も熱心で上手にやつてゐた。ところ〲に出てくるユーモアもなか〲良くきいてゐた。見物には非常に受けた。殊にそこに出てくるものが我々がその中に住んでゐる日本の生活であるだけに、一切が非常に親しみ深く感じられて、同じおかしさで笑ふにしてもチヤツプリンの映畫を見る時のやうな遠い離れたものとしてゞはなく、實に近いぴつたりとしたものとして生々と感じられるのだつた。映畫が進むにつれて、館内に溢れた群衆はだん〲熱してきた。正直な所、私なぞも或る程度までつい見ることに熱心になつてゐた。

然し、この感化力について反省した時、私は何だか恐ろしくなつた。

事件は進む。東洋の風雲は急をつけて、つひに戰爭が爆發した。一般の愛國的昂奮と戰爭熱、動員令、出征……軍事的宣傳がだん〲露骨になつてくる。しかも相當の効果を伴つてゐる。突然幕の蔭で出征の兵士を送る歌が、子供たちの合唱によつて涌き起る。――その瞬間私も妻もぞつとした。

然し、一般の見物は熱するばかりだつた。

やがて、旅順の攻撃、日本海の海戰、奉天の激戰。そこでは日本の陸軍が後援のために出動して、役者を助けて盛んに活動してゐた。私は、これは叶はないと思つた。少數の反軍國主義者（アンチ・ミリタリスト）がいろ〲對抗してみたところで、國家が助けてするこの宣傳の感化力を防ぎ止める事は、容易な事では無いとさへ思はれた。

そして私自身もまた、あの日露戰爭の時代を再び經驗するやうな氣がした。あの頃、私はまだ小さい田舍の中學生で、國民一般と同じやうに愛國的熱情と戰爭熱との目まぐるしい猛烈な渦卷の中に經過したからである。事實、あの時くらゐ國民が愛國主義と軍國主義の熱狂の中に一致團結した事がかつてあつただらうか。そして私は今「吉岡大佐」の映畫を見ながら、二十年前のあの緊張し熱狂した一般の人々と空氣を思ひ出し、一種の懐かしささへ感ぜずにゐられなかつた。

妻はしかし私よりずつと年が若かつたし、直接その時代に生活してゐなかつたので、さうした私の感情にはまるで沒交渉だつた。そしてこの「吉岡大佐」が、殊に戰爭の場面が、彼女には悲慘で、殘酷で、厭はしいものとしか見えなかつた。それで館を出た時、彼女はこの映畫を見ないで歸らなかつたことをつくづく後悔して話した。

私は彼女の氣持を少しも無理だと思はなかつた。むしろそれが本當だつたらう。然し先にも云つたとほり、私にはこの時代への回想の一種の懐かしさがあつた。そして歸る道すがら、私は思ひ出すまゝに、戰爭時代のことを何かと彼女に話してやつた。動員の通知、出征兵士の見送り、新聞と號外による戰爭と勝利の報知、戰死した知人とその遺族の生活。そしてそこには唯名譽があるばかりだつた。到る所名譽だつた。名譽の軍人、名譽の勝利、名譽の戰死……

そして私は久しぶりであの名譽婆さんを思ひ出した、さう、名譽婆さんといふのがあつたつけ。そ

れにしても、實に長い間、まるで忘れたやうに思ひ出さなかつたものだ。

私はそしてこの奇妙な婆さんのことを妻に話してやらねばならなかつた。

名譽婆さんといふのは、云ふまでもなく綽名である。しかも戰爭當時になつて知らず識らずつけられた綽名である。本當はおたき婆さんと云つて、私の家の飯炊女だつた。

私は一體、おたき婆さんがいつ頃から家へくるやうになつたのか、確かな記憶がない、恐らく隨分古くからの事で、私がまだ子供の時分からかも知れない。いつも汚れた儘にぼう／＼と亂れてゐる髮、落窪んで奇妙にぎら／＼光つてゐる眼、笑ふ時赤い齒ぐきばかり見える齒のない無氣味な口元、黄ばんだやつれた顏いろ、それから少しも構はない汚ないつくり、――誰がどう見ても、これはたゞの婆さんではない。實際、私なぞもいつとはなしに、彼女を氣違ひだと思ひなれてゐた。別にさう變つた事を云つたりしたりする譯ではないが、時々少し變なところが見えるのだ。隨つて、どちらかと云ふと、清潔を要する飯炊女には向いてゐない。しかし、實によく働く女で、少しでも油を賣るなぞといふ事がなく、大裏にあつた製絲工場の百人の女工とその他大勢の召使の炊事を、殆んど彼女ひとりで引受けてゐたものだ。そんな譯で、母には非常に氣に入つてゐた。外のものにも、それ／＼好意を持たれてゐた。

彼女は町はづれの方に、小さい貧しい所帶を持つてゐた。彼女には亭主と、勇造といふ一人息子があつた。息子は立派な若もので、大工だつた。婆さんが勇造のことをしやべる時、あのきら／＼と異樣に光る眼が急に云ひ難い優しさをおびて、黄ばんだ無氣味な顏がどんなに得意さうに輝いたらう。殊に、彼が徴兵檢査で甲種に合格した時なぞ、婆さんは大變な自慢だつた。息子が選ばれて國家の軍人になる！彼女には貧家の子としてこれ以上の榮達は無いやうに思はれるらしかつた。そして、この喜びと得意の前には、働き手が軍隊へとられた後で、自分たちがいきなり生活に困る事など考へても見ないかのやうであつた。

そして息子は町の人々に祝はれつゝ、賑やかな見送りを受けて、入營した、――といふのは私の國では隣國まで行くのである。婆さんは大はしやぎにはしやいで、涙をほろ／＼溢しながら、二里ばかり息子について行つた。

今では婆さんは亭主と二人きりになつた。亭主といふのは中氣のために、十年來廢人同樣に床についてゐるのだつた。

この、長わづらひのために氣むづかしくされた、厄介な亭主に對する婆さんの忠節は、以前から有名なものだつた。それればかりでなく、婆さんの大きな誇りだつた。彼女は亭主を心から愛してゐたのかどうかは知らない。唯少くも彼女は、妻としての義務を心の底から感じてゐたのは事實である。實

際、十年と云へば決して短かい時日ではない。その間彼女は一方に私の家へきて働きながらも、夜明け前と晩しかない自分の休養時間を全部、何かと病人の看護と世話にさゝげてきたのである。そして彼女は自分の忠節をいつも自慢して話しはしたが、少しも愚痴の種にしなかつた。唯事情をよく知つてゐる私の母は、いつも婆さんをほめそやした。その時彼女は心から慰められて、有難がつて、ほろ〳〵涙をこぼすのだつた。

女に廢りは無いといふ言葉はあるが、それにしても物ずきな奴があるものだ。家の工場で働いてゐたある若い男が、或る晩この婆さんをくどいたものである。彼女は怒るまい事か、次の朝早速私の母の前へやつてきて、若い奴の不屆きを告訴したものだ。

「いくら病人でやくに立たんでも、亭主は亭主ぢや。わしには、これでも立派に亭主があるのぢや。さう云つて、わしは、あいつにどなりつけてやりましたが、さうぢやありませんかなあ、おふくろ樣。」

「さうとも、さうとも、お前はほんとに感心な人ぢや。わしもまたあいつを呼んで、よく云つて聞かせて置くからな。」と母はやうやく彼女を宥めて退らせた。

母は後で側にゐるものに笑つて云つた。

「なる程、婆さんも女だつたなあ。これまで一度もそんな事を考へても見なかつたが……」

日露戰爭が勃發した。勇造のゐる師團は早くも出征した。

出征に際して勇造からきた手紙を、おたき婆さんはみんなに見せて歩いた。それには名譽ある國家の軍人としてこれから戰ひに出かけてゆくが、例へ死ぬにしても、決して見つともない死にやうはしない覺悟た、あくまでも正義人道の敵をやつつけないうちは承知しない。だからお母さんも、くよ〱と餘計な心配をしないで、唯息子が戰場で男らしく立派な働きをしてくれるやうにと、唯それだけを祈つてゐてくれ、といふ意味が書かれてゐた。まつたく軍人らしい健氣な精神と勇氣に充ちてゐた。婆さんは人毎にそれを示して、幾度となくよんで聞かせて貰ふのだつた。そしてその度に幾度か深い溜息をもらし、感嘆に堪へぬもののやうに唸り聲を出し、そしてほろ〱と涙をこぼしながら、この立派な息子を際限もなくほめ讃へて話すのだつた。

どこでも寄るとさわると戰爭の話ばかりだつた。老人も子供も戰爭の事ばかり話してゐた。そして日本軍は海に、陸に、連戰連勝だつた。人々は寄つて昂奮し、熱狂した。彼等は一人殘らず狂信的な帝國的軍國主義者となつた。そして言葉どほり、萬歲と歡呼の聲は町と村々に溢れた。

おたき婆さんも、もとよりその例に漏れなかつた。どこでも人が二三人よつて戰爭の話をしてゐると、彼女は仕事を手放しにしてそこへ首をつゝこんだ。そして一生懸命で戰爭の模樣と經過を知らうとした。實際、彼女はまもなく滿洲のいろいろな地名や、師團長の名や、戰術上の言葉を覺えこん

だ、そして自分から人に向つて戰爭の話をし出すのであつた。但し、まるで聞きなれない言葉が多かつたので、彼女が時々奇妙な間違ひをやつたのは仕方が無い。例へばウラヂオストックは、ウラジロストッペと發音された。白雷火は地雷也になつてしまつた。旅順口はろ順口、牛莊（にゅうちゃん）はぎゅう莊と云つた風。唯一つ彼女にも一遍で無雜作に覺えられた地名があつた。南山がそれで、彼女に云はせると難産に通ずるからだつた。

「なあに、露助の五萬や十萬が何ぢやい。わしの息子ひとりで相手に成つて見せるぞ。日本軍の中に、わしの息子の勇造のゐる事を知らぬかよう。」

彼女は凄い威勢でさう云つて、後で急にくつゝけたやうに、わつはつはゝあと大きく笑ひ崩れるのであつた。

旅順口の攻撃が始まつた。私の地方の屬してゐる師團はそれに參加してゐた。それで平和な田舍にも、次々と戰死者と負傷者が通知されてくるやうになつた。

「けふは何町の何々さんが戰死したといふ通知が來たげな。」

「誰々も重傷を負ふたさうぢや。」

「名譽の戰死ぢや、名譽の負傷ぢや。」

日と共に、そして勝利が重なるにつれてそれは多くなるばかしだつた。初めの有頂天の歡呼は、今

や悲壯の色を帶びてきた。役場や在鄕軍人や小學校あたりの慰問係は每日遺族訪問で忙がしく活動しなければならなかつた。そして總ては名譽の言葉に蔽ひつくされた。實際この空氣の中に生活したものでなければ、當時この「名譽」といふ言葉が、どれほど魔術的な効果を持つてゐたか想像する事が出來ないかも知れない。どんな氣の毒な遺族でも、唯、この名譽といふ言葉によつて慰められたのだつた。

おたき婆さんはこの時分から妙に陰鬱になり、考へ深くなつた。これまでと打つて變つて、人々が戰爭の話をしてゐると押つてそれを聞くまいと骨折つてゐるやうに見えた。云ふまでもなく、これまで何か違いもののやうに考へてゐた戰死とか負傷とかいふ事が、もうひと事でなく感じられてきたのである。勇造も旅順口で戰つてゐたからだ。

彼女はこれまでにも增して一層信心深くなつた。町のあらゆる寺と神社を拜んで步いた。まるで狂信者のやうだつた。

「なむあみだぶ、なむあみだぶ。」

彼女は働きながら口からそれを絕やさなかつた。そして炊事場で米を研ぎながら、また火を焚きつけながら、一心凝つた顏付をして彼女がかうひとりでぶつ〳〵云つてゐるのを人はよく聞いた。

「神さま、佛さま、たつた一人の息子でござりまする。どうか命を護つて下され。息子のかはりにこ

の婆あの命をとつて下され、そしてどうか助けて下され。神さま、佛さま、あんたは親切なお方ぢやで、わしがどれほど息子がかわえゝかようく分つて下されるぢやろ。頼みましたぞ、神さま、佛さま。」

鼻の先には流れる涙が水滴のやうに光つてゐた。

かと思ふと、彼女は急にはしやぎ立つて、出會ふほどのものを誰彼の區別なくひつ捕へて、唾を飛ばしながらこんな風にしやべり立てるのであつた。

「なあ、人間はどうせいつか一度は死ぬんぢや。わしもお前も死ぬんぢや。わしの息子ぢやつていつか一度死なにやならん。どうせ死ぬんなら、やつぱし戰爭で死んだ方が良え。名譽の戰死ぢやもの。わしはさう思ふ。さうぢや無からうかな。へえ。」

彼女のきら〳〵と輝く氣違ひじみた眼には、無理に押しつけられた無限の苦惱が見えすくやうだつた。それに觸れるものは誰でも深く彼女に同情した。そして優しく彼女の言葉を受入れつゝ、徐ろに慰めるのであつた。

「なあに、わしぢやつて日本人ぢや。例へ息子が戰死したつて、びつくりしたり、めそめそ泣いたりはせん。そんな事は恥ぢや、日本ぢゆうに可愛い〳〵息子を殺されて、それでも國家のためぢやと思つて諦めてゐる母親は澤山あるのぢや。それぢやのに、わしの息子はまだ死なん、まだ生きてゐる。たつたこの間も手紙がきたのぢや。まだ丈夫で露助と戰爭してゐるのぢや。こんな目出たい事が

あらうかなあ。わつはつはつは。」
　そして彼女はわざとらしく全身をゆすぶつて笑ひ轉げるのであつた。
　時々婆さんは私の母の所へひとりで笑ひながらかう云つてきた。
「おふくろ樣。すみませんけど、また猫の皮を貸して下され。いろ〳〵考へてゐたら、またばんばら〳〵やりたうなりましたのぢや。」
　猫の皮とは三味線の事である。私の母が心よく三味線を貸してやると、彼女はそれをもつて大裏の飯場へ行つて、誰もゐないがらんとした板の間にぺたりと坐つてすぐに彈き出すのであつた。もとより調子などは滅茶苦茶で、唯出たらめに掻き鳴らすだけである。そしてはやり唄でも何でもやたらに喚き散らすのである。そして愉快で堪らないのか、それともそんな事をしてゐる自分が我ながらおかしいのか、時々齒の無い赤い口元を大きくあけてから〳〵と笑ひ出す……
「ほら、また氣違ひが始まつたぞ」。家のものは憫れみながらも眉を顰めたものだ。
「可哀さうに、」私の母は大裏から響いてくる惡魔じみた音樂と哄笑に耳を止めて、思はずつぶやいた。「あれで息子がもし戰死でもしたら、それこそ本當に氣違ひになつてしまふだらう。どうかそんな事のありませんやうに、なむあみだぶつ。」

最初の豫想を裏切つて、旅順口はなか〳〵陷落しなかつた。攻擊戰はます〳〵猛烈となり、戰爭はいよ〳〵慘劇の度を加へてきた。私の地方から出征した兵士は、日に〳〵死んで行つた。勝利の歡びに有頂天になつてゐるのは、恐らく自分の身內から一人も兵士を出してゐないものだけだつたらう。兵士を出してゐるうちでは、號外の聲をきく度に、新聞をひろげる度に、戰爭の噂をする度に、不安と恐怖で胸を騷がしたものだ。

おたき婆さんの息子はやはり無事で戰つてゐた。そればかりでなく、最近戰功が手傳つて上等兵に昇進した。婆さんは大得意だつた。

「どんなもんぢや、」と彼女は鼻をうごめかして笑つた。「やつぱしわしの息子は偉い。わしが神佛に祈つてゐるお蔭で、死にもしないで上等兵になるとはうまくやつとるわい。これぢや死なずに、大將になつて、金鵄勳章を光らして歸つてくるかも知れん、萬歲々々。」

彼女は全く踊らんばかしだつた。しかし數分後には、彼女は仕事をしながら再び陰鬱になり、考へ深くなつた。そして念佛を唱へながら、一心を凝らして神佛に縋りつくのであつた。

九月の或る晩、おたき婆さんはすつかり飯場の掃除をすまして、いつもより少し早目に自分の家へ歸つて行つた。

「さあ、これから家へ行つて亭主に飯を食はせたり、からだを拭いてやつたりせずか。こんな汚ない

婆あでも、家には良え男が待つてゐてくれるのぢやでなあ、はゝあ。おやすみなされませ。」
それから一時間たゝないうちに、私の家の入口に當つて、思ひがけないお婆さんの氣違ひじみた高笑ひと、喚き聲が響いてきた。
「はゝあ、名譽ぢや、名譽ぢや。こんな名譽がまたとあるもんか。萬歳、萬歳！」
爐傍で私たちと話してゐた母は、思はず眉をひそめて云つた。
「まあ、あの婆さんたら今頃どうしたと云ふんだらう。氣でも違つたのか、それとも醉つぱらつてゞもゐるのかしら。」
「おふくろ樣。」婆さんは大變な勢ひで呼ばはりながら土間へ入つてきた。「聞いて下され。わしの息子が戰死しましたぞ。名譽の戰死ぢや。偉いもんぢやございませんかな、へえ。」
彼女の顏は涙で汚れてゐた、眼は異樣にぎら〳〵輝いてゐた、そして齒のない赤い口をあけて笑ふところは實際物凄かつた。
「まあ、とう〳〵お前の息子も！」と母も思はず涙を流した。
「おふくろ樣、何を泣きなさる。」彼女は上り框に腰を下して笑ひながら云つた。「何にも泣く事はござんせんのぢや。皆が云ひなさるとほり、國家のためぢや、名譽の戰死ぢや。やつぱしわしの息子は偉い。わしは嬉しうて〳〵ならんのぢや。それぢやからわしはさつきから笑つてばかしゐるのぢや。あ

は〳〵、あは〳〵。」

　彼女は神經病的に益々笑ひ立てた。

　婆さんの話によると、さつき家に戻ると近所の人たちが家に集まつてゐた。そして留守の間に勇造の戰死が役場から通知されてきた事をつけて、いろ〳〵慰めてくれたのであつた。

　私の家でも皆が寄つてきて婆さんを慰めにかゝつた。やはりそれは悲しい事には違ひないが、實に名譽な事であると云ふ外に慰める術が無かつた。殊に母は東京にある靖國神社のことを云ひ出して、戰死者はそこに祭られる事や、年二回に大祭をしてもらへる事や、そしてどんな高貴の人たちもそこへ參拜して下さるのだといふやうな事を懇々と話してきかせた。

　母の話のうちに、婆さんはいくらか落ついてきた。そしてまるで有難い法話でもきいてゐるやうに絕えず涙を流しながら、一語々々に深くうないづいて、滿足さうに聞いてゐた。

「聞いてみれば、」と彼女は鼻をすゝりながら云つた。「ほんとに勿體ないくらゐな話ぢや。これで本當に名譽といふ事が分りました。有難うござります。ほんとに名譽ぢや、名譽ぢや。早う歸つて亭主にもよく云つて聞かせず。それにしてもなあ……あの勇造が……」

　さう云ひかけて、彼女はまたわつと泣き伏した。私の母は更にいろ〳〵と宥めた上で、番頭をつき添はせて、彼女を家まで送り屆けた。

後から更に委しく報告されたところによると、勇造が倒れたのはあの恐ろしい二〇三高地の攻撃戦でだつた。彼はそれまでにも勇氣と大膽でつねに人々を驚嘆させてゐたが、その日も彼は彈丸の雨ふる中を突撃隊の先登に立つて進んで行つた。倒れた時、彼は實に全身に二十三個の彈丸を受けてゐた。しかも彼はテントに運びこまれてから十時間生存してゐた。

彼は直ちに伍長に昇進し、拔群の働きによつて功六級の金鵄勳章を授けられた。伍長で功六級とは實に破格なことで、類例は極めて少ない。加ふるに、慰勞金として三百圓の大金が下つた。

おたき婆さんは得意で有頂天だつた。

「どうぢや、功六級だぞ。伍長ぢやぞ。町長さまでもわしの息子には及ばんのぢや。祝へ、祝へ、こんな名譽な嬉しい事があらうかい。」

それから彼女は私の母の前へきてかう云ふのだつた。

「なあ、おふくろ様。三百圓もらふなんてわしはまるで夢のやうですが。ぢやつて、考へて下され、三百圓、とてもどえらい金ですもなあ。わしなぞまだ生れてからそんな大金を見た事が無いので。考へると頭がほうとなりますのぢや。それにしてもわしは金持になつたもんですなあ。」

「ほんとに結構な事ぢや、」母は答へる、「何にしてもお前は立派な息子を持つたものぢや。見ない、町ぢゆうのものがみんなお前を羨ましがつてゐるから。お前ひとりの名譽ぢやない、町ぢゆうの名譽ぢや

と云つてなあ。」

婆さんは嬉し泣きにほろ〳〵と泣く。

「わしも考へると、息子はかわいさうぢやが、でもほんとによく死んでくれたと思ひますがなあ。死んでも魂は殘つて、東京の靖國神社に祭つてもらへるし、何にも不足はありませんさ。昔から云ふとほり、人は一代、名は末代ぢや。」

「さうとも。それにしても、政府つて實によく行屆いた有難いものでなあ。」

「わしもさう思ひまする。これといふのも全く天子樣のお蔭ぢや。勿體ない事ぢや。なむあみだぶ、なむあみだぶ。」

やがて遺骨がついた。婆さんはそれを病人の亭主と自分との間に入れて、生ける子のやうに一夜抱いて寢たといふ話だつた。

葬式を出すについて、町内の重立つた人々が皆集まつて、それ〴〵親切に世話を燒いた。おたき婆さんはその間すつかり熱に浮かされたように、大噪ぎにはしやいで、無暗にしやべり立てたり、高笑ひしたりしてゐた。と思ふと、急に何と思つたのか、どつさり菓子を買つてきて、貧しい近所の子供たちを家の前に多勢集めて、菓子を分けてやつたりした。

「おい、お前たち、」と彼女は子供たちが與へられた菓子を貪るやうに食べるのを滿足さうに眺めなが

ら云ふのだつた。「大きくなつたらみんな偉い人になるんぢやぞ。わしの息子の勇造のやうに偉い軍人になつて、お國のために御奉公するんぢやぞ。ふむ、お前たちは名譽といふ事を知つとるかい。名譽といふ事を知らん奴は人ぢや無い。さあ、まだいくらでも菓子をやるから偉くなれよ。これでお婆さんは今金持なんぢや。お前たちは知るまいが、政府(おかみ)から三百兩といふ大金を頂戴したのぢや。これといふのも勇造のお蔭ぢや。お前たちがかうして菓子をもらへるのも勇造のお蔭ぢや。分つたか。さあ。」

　そして彼女は猶殘つてゐた菓子をぱつと往來へ撒き散らした。そして子供たちが大騷ぎをして拾ひまはるのを、涙ぐみつゝにこ／＼して眺めて立つてゐた。

　通夜の晩、婆さんは例の「猫の皮」を持ち出した。そして町内の人たちが集まつてゐる中で、無暗やたらに三味線を搔き鳴らした。歌詞も節も出たらめに、いろ／＼な唄を喚き散らした。極めて猥褻(わいせつ)な唄まで大聲でうたひ出した。そして時々齒のない赤い口元を大きくあけてから／＼と哄笑した。家の前にはまつ黑に人が集(たか)つた。

　猫の皮は一時間ばかり續いた。そしてちよつと婆さんの姿が障子の蔭に見えなくなつたと思ふと、どこから借りてきたのか今度は軍服をきて皆の前に立ち現はれた。胸には功六級の金鵄勲章が燦然と光を放つてゐた。

然し、髪をぼう／＼と亂したお婆さんが軍服をきた姿は實に異樣なものだつた。加ふるに軍服にとつては、彼女の貧弱な衰へたからだは小さすぎた。そして兩手も兩足もすつかり服の中に隱れてしまつて、歩く度にだぶ／＼した服の手足がばたりばたりと無氣味に動いた。

「さあ、わしが勇造の代りぢや、」婆さんは兩眼をぎら／＼させて、狹い家の中をばつたん／＼兩手をふつて歩きながら、浮かれ切つた調子で云つた。「わしは伍長ぢや、功六級ざや、名譽の戰死ぢや。さあ、みんな大いに飮んでくれ、飮んで底ぬけに騷いでくれ。わしはこんな嬉しい事は無いわい。名譽ぢや、名譽ぢや。あ、こりや／＼。」

そして婆さんは怪しい手つき足つきで、大浮かれに踊りはじめた。

この時から人たちは婆さんを本當に氣が狂つたのだと思ひこんだ。

葬式の後、おたき婆さんはこれまでどほり朝早くから私の家へきて、夜まで大裏で働いてゐた。相變らずよく働いてゐた。相變らずよく働いた。別に發狂したやうにも見えなかつた。唯以前にも增してする事や云ふことにおかしく思はれる節が多くなつた。そして飯場に坐つて猫の皮を持ち出す事が前より頻繁になつた。これには家のものは同情しながらも、かなり閉口した。

それから、彼女に於いてもう一つ著るしくなつたのは、名譽といふ言葉の濫發だつた。名譽婆さん

の綽名はこの時分から始まつた。

一度私は用があつて、大裏の方へ大急ぎで走つて行つた事がある。その時何かに躓ついて、私はばつたり倒れた。

「名譽ぢや、名譽ぢや、早く起きなさい。」

帳場にゐた婆さんがさう叫んだ。

私は起き上つた。膝はひどくすりむけて、かなり血が滲んでゐた。

「大丈夫、」と婆さんはそれを見てさらにまじめに云つた。「名譽の負傷ぢや、金鵄勲章ぢや。」

これなぞはまだ良かつた。むしろ當時では一般に云はれた位の事だ。ところが、婆さんは猫が大好きだつた。よく猫を抱きあげて、可愛くて堪らぬといふやうに頬ずりしながら、かう呟いてゐた。

「かわいゝ猫ぢや、名譽な猫ぢや。」

この習慣で、彼女は「名譽な花」や「名譽な坊ちやん」や「名譽なおふくろ様」も連發するやうになつた。

或る時婆さんの近所で、貧しいひとり身の老人が縊死した。婆さんが私の母の所へやつてきて、その老人の善良な人だつた事や、その貧しい寂しい身の上なぞを、深い同情をもつてしやべつた、そして涙を流しながらかう云ふのだつた。

「何といふ氣の毒な事ぢやと思ひましてなあ。でも、これもやつぱし名譽でござんすな。」

私の母は笑ひ出した。

「人が首をつつて死んだのに、名譽も何も無いものぢや。」

「ぢやつて名譽ですさ。」婆さんは大眞面目に云ひ張つた「戰死では無いぢやらうけど、やつぱし貧乏で死んだのぢやし、わしは名譽ぢやと思ひまするが……」

「それぢや、」と母は益々笑つた。「お前の息子と同じやうに、その首つり爺さんへも政府から三百兩くらゐ下されるぢやらう。」

「さうでせう、あ。ほんとに名譽な事ぢや。」

婆さんはあくまで眞面目にさういふのだつた。

私の母はおかしいと思つた。そして戰死と首つりとどう違ふか、名譽とはどういふ事かをこまごまと說明してやつた。然し母の言葉は少しも婆さんの頭に入つたやうに見えなかつた。彼女は唯かう繰返すばかりだつた。

「名譽な事ぢや。羨ましい事ぢや。」

或る秋の夜ふけ、私の家では荒々しく戶を叩く音で起された。思ひがけない、警察からだつた。町

はづれの寺の庭でおたき婆さんが縊死してゐたのが、つひ少し前に發見されたといふので、巡査が知らせにきたのだつた。

私の家ではびつくりした。何故なら、この日も婆さんはいつものとほり朝早くから家へやつてきて、晩までまめ〳〵しく働いて歸つたのであつたから。

「ほう、ではとう〳〵本當に氣が狂つたかな。どうもこの間からおかしいと思つてゐたが……でも、もと〳〵おかしい所がある婆さんぢやから、さして氣にも止めなんだが……」

私の母はさう云つて、念佛を唱へ始めた。

私の家からは、番頭と下男が出かけた。私は恐いもの見たさに、そつと彼等について行つた。暗い寒い晩だつた。空には一面こまかい星がふるへてゐた。私たちは提灯の光をたよりにして、暗い町はづれへ急いだ。

寺へついた。婆さんの死骸はおろされて、本堂の階段の下に、蓆の上に横たへて、さらにまた蓆で蔽ふてあつた。

巡査が一人と、外に二三人、提灯の光で時々蓆に蔽はれた塊を闇から照らし出してゐた。

私は氣味わるくも、恐ろしくもあつた。そして番頭のうしろに小さく隱れるやうにしてゐた。番頭はそこに居合せた人たちから一應發見された時の模樣をきいてから、しづかに死骸に近づいた。そし

てそつと蔽ひの蓆をはねのけた。私は彼のうしろからこは〴〵覗いてみた。

驚いた事には、婆さんは例の大きなだぶ〴〵の軍服を着てゐた。胸には勳章が光つてゐた。

私は不意に彼女の氣違ひじみた聲をきくやうに思つた。

「名譽ぢや、名譽ぢや。」

——一九二六年十月七日——

不思議

今こそ牧野は淺草寺で相當責任のある地位にあり、畏くも觀世音菩薩に仕へる身であるが、かつては青島に出征してドイツ軍と勇敢に戰つたことのある騎兵特務曹長である。そして、彼の言葉によれば、さうした戰場生活の貴い經驗が、あの大震災の際、四方八方から押迫る猛火の中で觀音堂を完全に守護するのに大いに役立つたといふのだ。

「觀音堂に火を移すな！」

「自分の命が惜しかつたら觀音堂を守れ！」

「觀音堂が燒ければ我々も助からないぞ！」

「バケツ、バケツ、バケツ！」

「みんなバケツを持つて集まれ！　バケツをありつたけ探し出して池から水を運べ！」

「バケツ隊を組織して火を防げ！」

倉庫の板圍はすでに飛び火でめら／＼と燃え出した。觀音堂も、五重の塔も、その朱塗の肌に血のやうな熱い猛火の反映を浴びて、炎々と燃えあがつてゐるかと思はれた。堂のまはりの空地に身動きもならぬ位避難してきた幾萬と知れぬ群集は、互ひに突き當り、突き飛ばし、蹴ちらし合つて、降り注ぐ火の粉の夕立の中を喘いたづらに泣いて、叫んで、もがいてどよめきあつた。そして最早どうし

て火を防ぐかも考へず、多少思慮のあるものでも、この上は唯奇蹟にたよる外は無いといふやうに、「觀世音菩薩、南無觀世音菩薩」と震へる聲で口々に呼び立てるばかしだつた。この中で、牧野は軍隊で號令に慣れた聲をありつたけ振り絞つて、群集に向つて叫びつゞけた。

「バケツ、バケツ、バケツ！」

「みんなバケツを持つて集まれ！」

「池から水を汲んで、列を作つて手から手へバケツを送れ！」

まんざら正氣を失つてゐない人々には、この際、この呼びかけがどんなに緊急な、重大なものであるかゞ分つた。彼等はあちこちからバケツを探し出して、池のまはりに集まつた。忽ちバケツ隊ができあがつた。牧野は機敏にも彼等を指圖して、犇めき合ふ避難民を叱りとばし、押しのけつゝ、横向きの長い〳〵列を作らせた。そして彼自身は襲つてくる猛火に一番近い尖端を受持つて、云はゞポンプの筒先を扱ふやうに手から手へとつぎ〳〵にやつてやるバケツを取つては、燃えうつる火に水を注ぎかけた。中には彼の手へ渡るまでに水がこぼれ切つて、殆んど空になつてゐるのもあつたが、とにかく水はつぎ〳〵とやつてきた。

　バケツ隊の必死の働きは明らかに非常に効果があつた。彼等の働きによつて、倉庫の周圍に燃え移つてきた火は忽ち消し止める事ができた。社務所の裏塀をめら〳〵と嘗めて、一擧にそこから觀音堂

を居りさうに見えた火も、塀を境に食ひ止められた。團十郎の銅像のうしろの木立にも火は移つてきつたが、それも難なく消してしまつた。

人々が後でまことしやかに語り合つたところによると、この時あの巨きな觀音堂の屋根の上に、觀世音菩薩の金色燦然たるおすがたがすうつとあらはれたさうである。おほ勢の中には、もしかするとそんな錯覺に捕はれた血迷ひものがあつたかも知れない。誰が無いと斷言し得やう。いづれにしてもこの時から觀音堂に向つてまつしぐらに火を驅り進めてきた風が急に方向を變へて、今度は火を別の方向へ追ひ散らしはじめたのは、何よりの幸運だつた。

かうして一時絶望としか思はれなかつた觀音堂は、とに角貪婪な魔の火から安全になつたやうに見えた。

觀音堂が助かつた！

安政の大震火災の際に奇蹟的に助かつた觀音堂は、今度もまた難を免れた！

驚くべき觀世音菩薩の神威力！

奇蹟！　靈驗！　これこそ神靈の加護によるものでなくて何だらう？

南無觀世音菩薩！

南無大慈大悲の觀音さま！

今こそ私たちは觀音の慈悲と奇蹟で命を拾つた！
日ごろ不信心な、神をそしりつゞけてきた者でも、命拾ひをしたと感じたこの瞬間には、皆さう思つた。深い安心の溜息と一しよに、觀世音の名はひとりでに皆の口にのぼつた。彼等は一せいに觀音堂に向つて兩手を合はせ、頭をさげた。或るものは足下の大地の上にぺたりと膝をついて禮拜した。或るものは人を押しわけつゝ階段をよぢ登つて、閉ざされた扉の前に頭をすりつけて伏し拜んだ。そして子供たちまでそれぐ大人に倣つた、群集は一時に狂信者となつてしまひ、どうかしてその深い信仰と感謝を示さうとして命がけで競ひ合つてゐるやうに見えた。

あまりに露はな奇蹟の實證と、それによつて新しく吹きこまれた信仰のせいで、堂のまはりから公園いつぱいに犇めき合つてゐる數萬の避難民は、深いぐ安心に陥つた。そして宗教的感激の最高潮がとほりすぎると同時に、今度は深いぐ疲勞を感じはじめた。無理もない、彼等はきのふからといふもの、重い家財と共に、もしくは多ぜいの家族たちと一しよに、あつちへ逃げ、こつちへ逃げ、到るところで恐ろしい火の襲撃に追ひまはされて、ちよつとだつて眠るどころか、碌に食事をする隙間さへ無かつたのである。そして今やつとほつとしたのだ。今はもう途ちゆうで離散した妻や子供たちの行方を案じてゐるひまもない、空腹なのかどうかさへ思つてみる餘裕もない。この上は唯もう眠ること、どこへでもぶつ倒れて獸のやうに眠ること、その外何にも無かつた。そして彼等は場所をえら

ぶひまもなく、その立つてゐたところに坐りこんだり、ぶつ倒れたりして、片つ端から眠つて行つた觀音堂の椽の上に、椽の下に、階段に、大地の上に、倒れた大燈籠のかげに、要するに空間を除いて人間の入りこみ得るところならどんな隙間までも入りこんで、重なり合ひ、押し合ひ、蹴り合ひつゝ數萬の男女は正體もなく死のやうな抵抗し難い眠りの中に陥つてしまつた。大慈大悲の觀世音の廣大な翼の蔭に安心しきつて一切を投げ出してゐるものゝやうに。

この有樣は、恐ろしく牧野をいら立たせた。彼とてもきのふ大地震の突發以來、まんじりともしないでもの狂はしく馳けずり廻つてゐる事も、隨つて精神とからだが疲れつきてゐることも、みんなと同じだつた。唯、重大な責任感――この神聖な淺草寺を、同時に自分たちをどうしても救はねばならぬといふ一念が、彼を極度に緊張させ、昂奮させてゐた。それで、火が一旦こゝから遠のき始めたと云つても、彼は少しも安心しなかつた。實際、また少しでも風向が變れば火は直ちに燒け殘つた觀音堂を目がけて殺到してくるにきまつてゐたし、それで無くとも、大きなどか〳〵とした火の粉は時々炬火のやうな燃えさしをさへ交へて、空いつぱいに廣がりつゝ閃々と降り注いでゐたのである。

「おうい、みんな眠つちやいけない！」

「みんな目を醒ましてゐてくれ！　いつまた火がやつて來ないものでも無いぞ！」

「觀音堂の近くは四方でまだ盛んに燃えてゐるんだ。この恐ろしい火の粉がみんなに見えないか、あ

の恐ろしい音が聞こえないか。」
「助かつたと思つてまだ油斷はならんぞ。みんな目を醒まして觀音堂を守れ！」
「眠るな、眠るな、眠るな！」
まるで彼ひとりが奇蹟なぞ信じてゐないもののやうに既に叫び疲れてしまい枯れてしまつた聲をありつたけ振り絞りつゝ、つぎ〳〵と眠りゆく人々の間を驅けまはつた。彼はまたさつきから彼と一緒に働いてきた寺内の二三のものにも手分けして同じやうに驅け廻らせた。驅け廻ると云つても、もとよりそんな空地があつた譯では無い。彼等は片つ端から倒れた人たちの頭を蹴り、腹をふみ、胸をしめつけつゝ氣違ひのやうに驅けずりまはつたのだ。併し、どこにも何の反響も、手ごたへもなかつた。最後に牧野は一緒に驅けまはつてゐた寺内のものさへ、眠つた大群に交つて一人殘らず死んだやうに倒れてゐるのを見出した。
牧野は鐘樓の近くでぼんやりと立止まつた。そして力つきたやうに我にもなく境内を見まはした。
觀音堂は炎々と燃えさかるまつ赤な空を背景にして音もなく嚴かに立つてゐたが、その朱塗の肌の上に近い火事の反映が赤々と搖れて、やはり盛んに燃えつゝあるやうに見えた。赤い五重の塔はさながらうづまきのぼる火の柱に見えた。その中で、あの巨きな銀杏の樹だけが勇敢な消防夫のやうに、火焔に身を焼かれながらもあらゆる水々しい葉と葉をあげて、ふりかゝる火の粉をうち拂ひ〳〵悲壯

な鬪ひをつゞけてゐた。

脅やかされた白鴿が、血のやうな火あかりの中を、迷へる魂のやうにゆら〳〵と飛んだ。

公園の樹立を越えて、半ば破壞された十二階の塔が、まるで火焰の中に一人取殘されたやうに、苦痛にひきつゝた赤いもの凄い姿で突つ立つてゐた。

フト彼は、空一面にひろがる炎々たる火の粉の間から、澄みきつた初秋の嚴かな夜の空を、靑ざめた星のひと群をちらと認めた。この時ほど空と地上の生活とが彼にとつて懸け離れて見えたことは無かつた。

「天上はあんなに淸らかで澄んでゐるのになあ！」

こんな考へがちらと彼の胸を掠めた。

ぐわら〳〵、ぐわら〳〵……

どこかつひ眞近と思はれるあたりで、物の燒けくづれる猛烈な音が、つゞけざまに聞こえてきた。きつと大きな建物が燒け落ちたに違ひない。同時にもの凄い喚き聲がきれぎれに氣味惡く傳はつてきた。

わあつ、わあつ、わあつ……

見ると、龍卷のやうに地上から湧きあがつた一大火焰が、恐ろしい火の粉の夕立となつて、こゝの

境内をめがけて新しく降り注いできた。

「しまつた！　風向が變つたかな！」

さう呟くまもなく、牧野は自分のつひ近くで、大地に眠つた人々の間からめら〳〵と火が燃えあがるのを認めた。勿論、彼等の家財に火の粉が落ちて燒け出したのだ。

「火事だあ！　みんな起きろ、起きろ！」

彼は倒れた人たちを滅茶苦茶に踏みつけて、火の側へ飛んで行つた。誰も知らないで眠つてゐた。

「火事だあ！起きないか！、みんな燒け死んぢまふぞ！」

彼はまぢかな四五人の頭や足を長靴で力まかせに蹴飛ばした。五六人が夢に驚かされたやうにむつくりと飛び起きた。そしてやはり、夢の中のつゞきにゐるやうな動作で、默々として火を消しにかゝつた。

火はぢきに消えてしまつた。

すると、折角起きて出た五六人は、また地の上にごろりと横になつた。

「おい、もう眠つちやいかん。風向が變つたやうだから、いつまた火が迫つて、來ないものでも無いぞ！」

「さあ、起きろ、みんな起きろ！　ほうら、あの恐ろしい火が見えないか。」

「油斷するな。みんな起きろ！　起きて觀音堂を守れ！　でないと、みんな燒け死んでしまふ！」
「起きろ、起きてくれ！　起きろ、起きてくれ！」
言葉どほり、彼は命がけで叫んだ。その間に彼等はもう眠りに落ちてしまつた。
おゝ、どうしたと云ふんだらう！　血のやうに赤い火あかりの中で、ふり注ぐ火の粉の雨の中で、さし迫つた恐ろしい危險の中で、彼等數萬の人々は一せいに昏々と深い眠りの中に折重なつて倒れてゐる、泥のやうな眠りの中に溺れてゐる。魔睡の地獄！　そして彼はかうした眠りがどんなに不可抗な、拂ひ難いものであるかを戰場の經驗でよく知つてゐる。疲れきつた兵士は、彈丸がばら〳〵飛んでくる中で平氣で眠るものだ……
彼は絕望を感じた。最早どうしやうも無い。何と云つたつて、どうしたつて、彼等を起き上らせるなんてとても出來るものではない。
「觀音堂が燒けるぞ！」
「お前たちは燒け死ぬぞ！」
「起きないと片つ端から殺すぞ！」
駄目だ！　かうなると死ぬと分つてゐても彼等は眠りつゞけるに違ひない。
注意すべきは、この苦い絕望の中で、彼は一向觀世音のみ名も唱へなければ、祈願を凝らすことも

なくひたすら自分の智慧と工夫によつて危急を切り拔けやうと專念したことだ。ほんとに、救ひ難い眠りに陷つたこの數萬の人間の腦神經のどこを刺戟したら、彼等を一せいにがばと奮ひ起させる事ができるだらうか。この際、この秘密を知るためには彼は一切を拋つたであらう。

觀音堂の裏手にあたつて、底力のある無氣味な脅やかされたやうな獸の唸り聲がした。そこには花屋敷の猛獸仲間を避難させてあつて、さつき危險が迫つた時、虎と獅子が射殺されたと彼は聞いてゐた。それだのに、彼は今猛獸の唸りを聞いた。

「さうだ、」と彼は突差に考へた「獅子が檻を破つて暴れ出したときいたら、みんなはびつくりして起きるかも知れない。これは良い思ひつきだ。」

そして彼は再び聲をふり絞つてかう叫び出さうとした。

「おうい、みんな起きろ、ライオンが檻を破つて逃げ出したぞ！」

その瞬間、ふしぎな聯想が彼に或る事を思ひ出させた。後になつて、彼はその時までけろりと忘れてゐたのを奇妙に思つたのであるが、何でもその日の夕方、この大震災の不幸に乘じて×××が市內到るところで放火してゐる、×××を見つけたら片つ端からやつちまへと二三のものが昂奮して話してゐたのを彼は聞いてゐた。今彼はそれを思ひ出したのだ。それは彼にとつて一種の靈感のやうに作用した。そして彼は殘忍な歡びにふるへながら、聲を限りにいきなりかう叫び出した。

「おうい、みんな起きろ、×××が三百人觀音堂を包圍して燒打しやうとしてるぞ！」

何の反響も無かつた。彼等は相變らず眠りつゞけた。しかし牧野はこの呼びかけの効果に對して充分な確信をもつてゐた。そして彼は命がけで同じ言葉を繰返し〳〵叫んだ。

彼のつひ足もとから一人がむつくりと起き上つた。

「何だつて？　×××だ。やつゝけろ！」

つゞいて、あつちでもこつちでもむく〳〵と起き出した。

「何？　燒打するつて？　畜生、生意氣な！」

「×××を見つけ出せ！」

「×××をやつゝけろ！」

「おい、起きろ、みんな起きろ！」

「おい、男はみんな武裝しろ！」

「畜生、×××はどこだ。見つけ次第やつゝけろ！」

「やつゝけろ、やつゝけろ、やつゝけろ！」

人々は騷ぎ出した。初めの驚きは昂奮に、昂奮は激怒に、激怒は際限のない敵意と憎惡になつて彼等の間に強烈に傳染した。牧野は最早ひとりで叫びつゞける必要が無かつた。彼等はそれ〳〵側に眠

つてゐるものを蹴とばし叩き起した。そして十分と經たぬうちに、それまで魔的な眠りが支配してゐた境内には、今や烈しい憎惡と殺氣が赤熱した焔となつて渦卷いてゐた。

「しめた！」すでに湧き立つ群集の一人となつてゐた牧野は內心ひとりでさう呟やいた。

唯しかし、敵はまだ見つからなかつた。

「×××はどこだ？」

「×××を見つけ出せ！」

「×××をやつゝけろ！」

群集は手あたり次第な屠殺棒を手にしながら、憤怒と憎惡の一刻も猶豫ならぬはけ場を求めて、あちこちにどよめき渡つた。

フト牧野は、血のやうに赤い熱い火あかりをとほして、動亂する人群の中から、色のなま白い、心配げな眼つきをした、にゆつと背の高い一人の若い勞働者を見つけた。

「こいつだ！」彼はいきなりその勞働者を指して叫んだ。「×××、×××！」

「どいつだ？」

「どこにゐる？」

「こいつだ！」

「こいつだ！」

「そら、やつゝけろ！」

「わあつ、わあつ、わあつ！」

背の高い勞働者は、自分でもその×××なるものを見やうとするやうに、落つかない眼付でちよつとあたりを見まはしたが、周圍の群集がみんな自分に殺到しやうとしてゐるのに氣がつくと、反射的に身をそらして逃げ出さうとした。

「畜生、逃がすもんか！」

「とつ掴まへろ！」

「やつちまへ！」

狼はつひに餌を捕へた。群集は彼を中にして塊まり、揉み合ひ、かち合つた。喚聲、悲鳴、滅多打ち……

牧野はそれを見すまして、狂亂の指導者としての役目を果たすために、群集に向つてさらにかう叫んだ。

「みんな氣をつけろ！　×××は避難者に化けて、我々の中に入りこんでゐるぞ！」

まるで×××だけは大震火災から超越し得た存在であつたかのやうに！　然し群集はすでに正氣を

失つてゐた。そして彼等は火あかりの中で互ひに顔をすかし見つゝ、恐ろしい熱中をもつて××狩りをはじめた。牧野自身も、今では自ら放つた流言の狂ほしい渦の中に卷きこまれてゐた、そして人々の中を押しわけ搔き分けしつゝ、本氣になつて×××を狩り出すことに夢中になつてゐた。

堂裏の噴水池の側で、彼は石油罐が一つ地上に置かれてゐるのにぱつと目をつけた。石油罐！それが空罐であつたことはこの際問題では無かつた。さつきバケツ隊の一人が、バケツがはりに使用したものであつた事なぞ、彼は考へて見やうともしなかつた。石油罐、それだけで、充分すぎるぢや無いか！

殺氣にいきり立つた獵師は、またもや目ざす猛獸の足跡を嗅ぎつけたと思つた。石油罐のま近に、貧しげな四十ぐらゐな男がひとり、近い火事の火を眺めてぼんやり立つてゐた。そのまはりで多勢の人々が押し合つてゐたのは云ふまでも無い。それだのに、牧野のぎら〳〵する眼は、石油罐からひとりでに、――何の故にひとりでにであるか、誰が知らう――この見すぼらしい四十男に上に、燒きついた。

牧野はいきなりこの男に掴みかゝつた。

「貴樣は×××だらう？」

相手は脅えきつた、同時に哀訴するやうな顔付をして、口の中で何やら呟やいたが、彼には分らな

かつた。

「やつぱし×××だな。」

そして彼は周圍に向つて喚き立てた。

「×××だ、×××だ？」

群集は湧き立つた。

「見ろ、この石油罐を！　こいつはこれで觀音堂を燒き拂はうとしたんだ！」

「さうだ、燒き拂はうとしたんだ！」

「石油罐を持ち步いて放火するとはづぶとい野郞だ。やつちまへ！」

「放火だつて、こん畜生！」

誰かゞいきなり棒つ切れで犧牲者の頭をほかりとやつた。

「畜生、道理で火事の匂ひがしてやがる！」

「生意氣な、抵抗する氣かつ！」

「疊んぢまへ！」

「やつゝけろ、やつゝけろ、やつゝけろ！」

悲鳴、怒聲、罵聲、混亂、そして……

觀音堂の椽の下に、×××が二人もぐりこんでゐた。驚くべきづう／＼しさには（？）この二人の勞働者はどんな騒ぎが起つてゐるかも知らぬげに、聲高な××語でしやべり合つてゐた。しかもその一人は煙草を吸はうとして、消えやすいマッチを何遍となく擦つてゐた。

「×××が椽の下からお堂へ火をつけやうとしてゐる！」

もう一人は林檎を噛つてゐた。

「氣をつけろ、爆彈を持つてゐるぞ！」

爆彈、この聲に椽の下までなだれこんだ群集は、一時ぱつと後じさりした。その間に二人は椽の下の奥深くへ逃げこんだ。

「そうら、逃がすな！」

「とつ摑まへろ！」

「引きずり出せ！」

人々は椽の下へもぐりこんで、濕つぽい蜘蛛の巣だらけな暗がりで、柱で到るところ頭をうちつけながら、×××を追つかけ廻した。彼等は命がけで逃げまはつた。そして力かぎり抵抗した。群集はいよ／＼激昂した。そして、とう／＼、二人は髮をもつて椽の下から引ずり出された。然し、その時にはもう……

人ごみの中で、紅い赤光の中に互ひの顔を睨み合つて、こんな事を云ひ合つてゐる奴らもゐた。
「白状しろ、貴様は×××に違ひない。」
「馬鹿にするな、これでもばり／＼の江戸子でい。貴様こそ×××くさい面をしてやがるぞ！」
「何だと。やい、叩き殺すぞ！」
「うぬ、貴様こそ×××だ。やい、みんなしてこいつをやつけろ！」
「何を！　おうい、こいつこそ×××だ。やつちまへ！」
二人は揉り合ひ、取つくみ合つた。群集はどつちが×××なのか、どつちへ加勢していゝのか分らないで、そのまはりで唯動揺し、混亂した。
今では日本人でももうぼんやりしてゐられなかつた。少くともみんなと同じ様に血眼になつて×××を追かけ廻してゐる風をしてゐなければならなかつた。そしてあつちこつちから、「避難者に化けて入りこんでゐる」×××が見つけ出された。血の色をした恐ろしい巨きな仁王像の突つ立つた雷門の前では、二人の小さい子供をつれて震へてゐる××婦人が多勢に包圍されてゐた。五重の塔のまはりでも、一人の若い×××が見つかつたが、すばしつこく群集の中へ逃げこんだので、人々の中で烈しい混亂が起つた。彼等は姿の見えない敵を、無暗に人を突き飛ばしたり、蹴散らしたりして、無茶苦茶に追つかけまはし探しまはつた。

深夜の空は地獄のやうに赤々と燃えた。引き裂かれた焰は迷ひ火のやうに、無數の火の粉と一しよにはら〳〵と落ちてきた。巨きく鎭まりかへつた嚴めしい觀音堂、五重の塔、いてふの大樹、神聖な境内のありとあらゆるものが、今では眞赤な、不淨な血に染め出されたやうに見えた。そして殘忍なひき歪んだ、赤く染め出された顏の殺人者の大群が、血に狂ひ貪婪な血の渴きに驅り立てられて、さまざまなもの凄い武器をふりかざし〳〵とめ度もなく狂ひまはつてゐた……

夜が明け放れても、それはまだ續いてゐた。

觀音堂は、かうしてとう〳〵あの恐ろしい避け難い火災から完全に免れる事ができた。奇蹟は成就されたのだ。そしてこれに感動したのは、そこで命拾ひをした數萬の避難民だけでは無かつた。日本ぢゆうが驚異の目を見張つた。恐らくは外國にまで語り傳へられた事だらう。かうして東京の市民たちは、荒廢しきつた燒野原をとほして觀音堂を目がけて殺到した。每日々々、かつて前例の無いやうな人出がつゞいた、賽錢箱は言葉どほり、充ち溢れた。五圓や拾圓の紙幣が投ぜられてゐるのは珍らしくも無かつた。そしてそれは俵につめられて、日に何俵といふ風に算へられた。それを羨望したのも、やはり境内に燒トタンの小屋を築いて土の上に原始人じみた生活をつゞけてゐる避難民だけでは無かつた。新東京の復興は淺草觀音堂から！　新聞はこんな風に書き立てた。

牧野はさすがに得意ならざるを得なかつた。觀音堂を救つたものは、外ならぬ自分であることを彼はそれとなく信じてゐた。そして附近の人々や、視察にやつてくる役人たちを捕へて、あの夜のことをよくしやべつた。觀音堂が幾度か危急に瀕したこと、バケツ隊を組織して火を消し止めたこと、昏々と眠りに落ちてゆく數萬人を目ざまさせて置くためにいかに苦心し、最後にどんな効果ある處置をとつたかといふこと、等々しやべりながら彼はいつも戰場の手柄話をする時と同じやうに、知らず識らずうぬ惚れ強い得意と熱中に陷つてゐた。

それで聞き手はいつもいかにも感心した顏付をしてかう云はずにゐられなかつた。

「まあ、それは大變でしたね。だが、實に大きな手柄ですよ。殊に×××を持出したなんか、頭の機敏さに敬服しますよ。淺草寺が無事に助かつたのも、云はゞ君の働きといふものですね。」

「いえ、どう致しまして、これと云ふのもみな神靈の御加護による事でございまして、唯奇蹟とほかに申しやうがございません。」

そして牧野はいかにも信心家らしい、敬虔な眼付をしてうな垂れた。

——一九二七年十二月七日——

その日（一幕）

時。　千九百五年十月十七日。
所。　舊ペテルブルグ。
人物。　レオ・ヤコヴレフ。
　ゾーラ、その妻。
　アリヨーシヤ、その子。
　ワローニン。
　隣の女房。
　外に勞働者の男女若干名。

書齋と、客間と、食堂とをかねた五階のひと部屋。左手に大いなる窓があり、街に向つて開かれてゐる。窓の近くに食卓があり、正面の壁が半ば近く本でいつぱいにつまつた書棚になつてゐる書棚の上にはマルクスとエンゲルスの肖像が掛かつてゐる。正面右手の隅にドアがあり、右の壁に添ふて大いなる食器棚がある。中央に大きい圓卓があり、古ほけた布で蔽はれてゐる。側にやはり古ほけた肘付椅子、外に二三の小椅子。
總體として貧しく質素ではあるが、さつぱりとした部屋構へである。

丁度正午をすぎたばかり、ゾーラは圓卓の側の肘付椅子に腰かけて、灰色の靴下をせつせと繕つてゐる。彼女は三十歳、ブロンドの豊かな髪をもつた。肉づきのよい美しき女。つくりは至つて質素で、からだ全體に苦勞やつれのした痕が見えるが、どことなく氣品がある。

アリヨーシヤが長いパンを抱へて息をはずませながら飛び込んでくる。十になる少年。彼はパンをテーブルの上へ置くか置かないかに。

アリヨーシヤ。母ちやん、外はとても賑やかだよ。（いきなり窓へ行つて下の街をのぞいて見る。）ねえ、母ちやんごらんよ。旗でいつぱいだから。

ゾーラ。（ものうげに）、おゝ、さう、けふは憲法發布のお祝ひ日だつたわね。

アリヨーシヤ。ねえ、見てごらんてば。あんなに竝んでゐるよ。

ゾーラ。（屈托を紛らさうとするやうに）坊や、お茶を飮まない？

アリヨーシヤ。お父さんまだ歸らないの？

ゾーラ。（相變らず仕事をつゞけながら）けふあたりはもう歸つていらしてもいゝ頃なのだがね。

アリヨーシヤ。また外へ行つていゝ？

ゾーラ。まあ、坊やつたらちつとも家にゐないのね。早く歸つてらつしやいよ。

アリョーシャは元氣よく出てゆく。エーラ立上りて、パンを食器棚にしまはうとする。

戸を叩く音。

エーラ。（戸をあける。）あら、隣りのおかみさん。どうぞ。

隣の女房。（砂糖壺を手にして入つてくる。二十五、鍛冶工の妻で、貧しいなりをして、痩せてはゐるが、壯健で生々とした感じ。）毎度すみませんが、砂糖を少し分けて頂けませんか。つい切らしちやつて……。

エーラ。（愛想よく。）えゝ〳〵、お安い事ですわ、澤山もありませんけど。

隣の女房。えゝ、一度、煮ものにまに合へばいゝんですのよ。

エーラ。（壺を受取り、食器棚の前にゆき、パンを片づけながら）まあ、お掛けなさいませんか。

隣の女房。これでさうもなりませんのよ。それはさうと、街では大變な騷ぎですのね。

エーラ。さうらしいですね、私はこゝから旗を見てゐるだけですけれど。

隣の女房。さつきも私、ちよつと買物に出かけたんですけれど、商ひ屋は大抵店をとぢてゐますの、そして今にも街ぢゆう×動が起りさうな噂をして、憲法發布なんてお祭どころの騷ぎぢやないんですのよ。

エーラ。（壺を持つてきて渡す。びつくりして、）×動が！　まあ、どうして？

隣の女房。（呆れたやうに、）まあ、奥さんは御存知ないんですか。

ゴーラ。（言譯するやうに、）でも、夫はこの四五日まるで戻つてきませんし……。

隣の女房。まあ、御主人はそんなにお歸りになりませんの。さうでせうともね、工場はのこらずストライキをやつてゐるんですし、けふはまたけふで、勞働者は大示威運動をやらうとしてゐるんですもの、こんな時ヤコヴレフさんのやうな指導者は、それやとても……

ゴーラ。ストライキや何かの事は聞いてゐましたが……

隣の女房。私の夫なんかでさへ、けさちよつと戻つてきたかと思ふと、お茶を飲んだゞけで、もう出かけて行きましたのよ。

ゴーラ。まあ。

隣の女房。何でも夫の話では、けふの示威運動は政府や軍隊の出やう次第ではいつ×動化すとも云へないんですよ。そしてその方が却つて望ましいんですつて。

ゴーラ。じやあお宅では×動に出る氣でお出かけになりましたの。

隣の女房。（力をこめて）勿論ですわ。その證據には、出がけに、鐵槌をポケットにねじこんで、『俺たちは自由を得るか、死ぬるか。』だと云つて、あの腕で私をしつかり抱いてくれましたの、それで私も『えゝ行つてらつしやい。』といつてあの人を接吻して出してやつたんですのよ（そして知らず知らず夫から吹きこまれた口調で、）今さらあのブルジョアの犬が間にあわせに作りあげた、ごまかしの法

律なんか糞くらへだわ。あいつらは私たちに石を與へて置いて、これが特製のパンだなんて思ひこませやうとしてゐるんだ。馬鹿々々しい。そんな手に乘つてたまるもんか。

ゼーラ。（鋭い不安が募つてくる樣子で默つてゐる。）

隣の女房。まあ、御免なさい、ついおしやべりをしちやつて。どうも有難う。それから、示威行列が後でこの下をとほるんですのよ。きつと見ものですわ。奥さん、窓からハンカチを振つてバンザイを叫んでやりませうね。ではさようなら、奥さん。（そゝくさと出て行く）

後にゼーラぼんやりと立つてゐる。苦惱と不安に堪へやらぬ樣子。やがて彼女は引かれるやうに窓ぎはへ行つて、悲しげに街を眺める。

しづかにドアがあいて、レオ・ヤコヴレフが片手に鳥打帽を摑んで入つてくる。三十五、色青白く、痩せて、背が高い。疲れはてた樣子。

ゼーラ。まあ、あなた！（喜びのあまり夫の側へ行つて抱きつく）まあ、やつと戻つてきて下すつたのね。

ヤコブレフ輕く妻を抱いて接吻する。それから圓卓の側の肘付椅子へ行つて、ぐつたりと腰をおろす。

ゼーラ。（側に腰をかけて、心配さうに、おど／＼と夫を見いりながら、）まあ、ひどく疲れていらつしやるのね。（間）。お食事はまだなんでせうね。

ヤコヴレフ。（物うげに頭をふつて）いや、ほしくない。

ゾーラ。（少し間）お茶を入れませうか。

ヤコヴレフ。うん（間。）いや、いゝよ。

ゾーラ。（いよ〳〵心配さうに、）あなた、どうなすつたの？

ヤコヴレフ。…………

ゾーラ。ねえ、どうなすつたのよ。一體。

ヤコヴレフ。（うるさげに）三晩ばかり碌に寢なかつたんだ。それで疲れてゐるんだ。

ゾーラ。まあ、三晩も。ぢや、さつそくお休みになつたら……。

ヤコヴレフ。…………

ゾーラ。ねえ、さうなすつたら。

ヤコヴレフ。まあ、しばらくこの儘で己をうつちやつといてくれ。

ゾーラ。そりやもう、あなたの好きなやうで構ひませんけれど（間。）何にしても、あなたが戻つてきて下すつて私ほんとにほつとしましたわ。

ヤコヴレフ。…………

暫く間。

ゾーラ。（おづ〳〵と、）で、あの事はどうなりまして？

ヤコヴレフ。（急に落つかなくなつて立上る。）

ゾーラ。あなた…………

ヤコヴレフ。あゝ、已はかうしちやゐられないんだ！（歩きまはる。苦惱と焦慮。）

ゾーラ。（びくりとして、）では、ぢきまたお出かけになりますの？

ヤコヴレフ。…………

ゾーラ。さうなんですの？

ヤコヴレフ。（暗鬱に、）いゝや、多分。

ゾーラ。（思はず兩手を胸にあてゝ、）まあ、よかつた！

ヤコヴレフ。（初めて妻に目をとめる。間。そして詰るやうに、）ゾーラ、お前は今どういふ事が起らうとしてるか知つてゐるか。

ゾーラ。えゝ、知つてゐますわ、ストライキの事も、それから×動の噂がある事も。

ヤコヴレフ。…………

ゾーラ。あなたあれは本當でせうか、×動があるつてのは。

ヤコヴレフ。（苦々しい棄鉢の調子。）多分血が流れずにはすむまいよ。

ゾーラ。まあ、恐ろしい。
ヤコヴレフ。（次第に昂奮してくる。間。ひとり言のやうに。）全く、恐ろしい事だ。
暫く間。
ゾーラ。で、それはどうすることも出來ませんの？
ヤコヴレフ。少くも、己の力ではどうする事もできなかつた。
ゾーラ。まあ、あなたの力でも。
ヤコヴレフ。己はできるだけの事はやつて見たんだ。ゆつべも夜どほし、つひさつきまで、同志と激論をやつたんだ……
ゾーラ。ぢや、外の人たちはみんなあなたと反對に立つた譯なんですか。
ヤコヴレフ。（知らず識らず話に熱中してくる。）つまり、己たち幹部の間では、けふの示威運動を×動化しやうと主張するものと、あくまで示威運動として平和に終らせやうとするものと、二派に分れたんだ。ところが己の見るところでは、今暴動を起したところでどうひゐき目にみても我々が敗れるにきまつてゐる。それはペテルブルグの勞働者の花を、むざ〳〵と散らす事にすぎないのだ。そればかりぢやあ無い。今はもうそんな古くさい市街戰の時代はすぎたのだ。己たちはすでに憲法を獲得した。例へそれやブルジョアのものであるにしたつて、とにかくこれからは議會へだん〳〵己れ

たち代表者を送る事ができるんだ。

エーラ。そのとほりですわ。

ヤコヴレフ。さう云つて、己はあくまで暴動化の主張に對して戰つたんだ。そりや己の味方だつて無い事は無かつた。だが、結局己は敗れてしまつたんだ……（そして再び肘付椅子にぐつたりと腰をおろす。）

エーラ。まあ、これで分りましたわ。どうも入つていらつしつた時から、たゞの顏色じや無いと思つてゐましたのよ、まあ。（間。）だけど、どうしてあなたのその說が外の人たちには分らないんでせうね。どこに反對しなければならないやうな事があるんでせう。私分りませんわ。

ヤコヴレフ。…………

エーラ。えゝ、構ふ事は無いわ。だつてあなたは正しいんですもの。少しも間違つちやゐないんですもの。あゝ、血を流す、血が流れる、おゝ想像するだけでも恐ろしい。（からだを震はせる。）誰だつて反對しないでゐられるでせうか。

ヤコヴレフ。…………

エーラ。さうです。あなたのは正しいんです。あなたはあくまで信念に忠實に戰つていらつしつたんです。いくら敗れたつて、少しも悔んだり、くさくしたりする事はありませんわ。さうでせう。

さうお思ひになりませんか？

ヤコヴレフ。（自ら嘲るやうに、）己は「社會主義の裏切りもの」ださうだ。それから「革命と血に堪えられない」んださうだ。

ヱーラ。（憤然となる。）まあ、あなたの事を社會主義の裏切ものですつて。まあ、よくそんな事を。よくもそんな事を云はれたもんですわね。二十二の時から社會運動に身を投じて、二度までも監獄に入れられて、けふまでたゞもう、社會運動のために、身を捧げてきたあなたの事を！　よくもまあ……（そして涙をこぼす。）

ヤコヴレフ。…………

ヱーラ。それに、血を見るに堪へないつて、それがどうしていけないんでせう。どうして悪い事なんでせう。血を見る、それは實に野蠻な恐ろしい事ですわ、呪ふべき罪ですわ。それに堪へられないのが當り前です。殊にあなたのやうな愛情の深い方には、堪へられないのは當り前すぎる話です。あなたは大衆を愛していらつしやるから、だから一層善い社會を望んでいらつしやるから、だから一層血に堪へられないんですわ。これについてどこに不名譽なるものがあるでせう。まして×命に堪へる事と血に堪へる事とは、別ぢやありませんか。

ヤコヴレフ。…………

ヱーラ。それとも、もし血を伴はない×命なんて有り得ないと云ふんなら、私たちは血と一緒に革命なんか棄てゝしまひませう。血の洗禮を受けてまで、革命なんか來らせる必要は無いぢやありませんか。

ヤコヴレフ。………

ヱーラ。でも、あなたの深い思想が、反對者たちに分らないのは當り前とも思ひますわ。だつて、あの人たちは心の荒い、そして教養のない勞働者あがりが多いんですものね。あの人たちは人類の幸福を求めたり、若い純情を謳つたりするよりも、一番に復讐がしたいんです。だから何かと云ふと、すぐ暴動を起したり、血を流したりしたがるんです。ほんとに愛情のない、無智な人ほど恐ろしいものはありませんわ。

ヤコヴレフ。（何か云はうとして妻を見る。然しやはり默つてゐる。いら〳〵した樣子。）

ヱーラ。あなた、ほんとによく私のところへ歸つてきて下すつたのね。世界ぢゆうの誰が何んと云はうと、私はあなたをようく知つてゐます。あなたをどこまでも信じてゐます。あなたは神のやうに正しいのです。えゝ、あなたはさう自信していらつしやるがいゝのですわ。それが當り前ですわ。さうぢやありませんか。

ヤコヴレフ依然として默つてゐる。

暫く間。

ゾーラ、（夫の顏を覗きこんで）あなたは何にもおつしやらないのね。どうなすつたの？

ヤコヴレフ。…… ……

ゾーラ。私の云つてる事がお氣に入りませんの？

ヤコヴレフ。（苦悶しつゝ。）お前は己にどうしろつて云ふんだ。己は神のやうに正しいんだから、お前の側にいつまでもかうしてじつとしてゐろと云ふのか。

ゾーラ。（びつくりして）まあ、あなた、何といふ事を。

ヤコヴレフ。（腹立ちさいら立ち、）お前もやつぱし、己が血に堪へられない人間だつてことを極力證明してゐるぢや無いか。

ゾーラ。（愈々びつくりして、）だつて、それはさつきも云つたとほり、ちつとも非難すべき事ぢや無いぢやありませんか。

ヤコヴレフ。己はそんな事を問題にしてゐるんぢやない。（椅子から立上る。）己はこれでも、自分の信念の前には、いのちもからだも抛つ覺悟でやつてきたんだ。自分を血まみれにするつもりでやつてきたんだ。血なんか恐れちやゐなかつた筈だ。

ゾーラ。あら、誰もそんな事を疑やしないぢやありませんか。どうして私の云ふ事をそんなにお取り

になるんでせうね。えゝ、あなたは今あんまり疲れていらつしやるんですわ。お願ひですから、こんな問題は後でゆつくり考へるとして、今はあちらへ行つてお休みになつて下さいませんか。
ヤコヴレフ。お前にや、己の苦しみが分らないんだ。（舞臺のまん中へ行く。髪を掻き挘りながら、）己がもし裏切りものだつたとしたら！……革命と血に堪へられないといふのが本當だつたとしたら！……
ゴーラ。（絶望的に、）おゝ、神さま、私はどうしたらいゝんでせう、どうしたらこの人を慰める事ができるんでせう。（立つて夫の側へゆく。）ねえ、あなた……
ヤコヴレフ。（妻には構ひつけず、）己がこれまで張りとほしてきた理論も主張も、自分の中に潜んでゐる臆病さをあらゆる方法で合理化したものに過ぎなかつたとしたら！
ゴーラ。あなたはまさか、勞働者と一緒になつて、街に城砦を築いたり、機關銃を亂射したりするのが、やつぱし本當だとおつしやるんぢや無いでせうね。そんな恐ろしい事……
ヤコヴフレ。（獨語のやうに、）恐ろしい事、さうだ、恐ろしい事だ。（間。）あゝ、己は恐ろしいんだ。恐ろしかつたんだ。（よろ〳〵となる。）
ゴーラ。誰でも良心のあるものだつたら、恐ろしい事だと思ふに違ひありませんわ。
ヤコヴレフ。勞働者を裏切るやうな良心だつたら、神にでも惡魔にでもやつちまへ。
ゴーラ。（泣きさうになつて、）あゝ、あなたは今、自分がどんなに滅茶苦茶になつてゐるか、お分りに

ならないんですわ。

ヤコヴレフ。（片手で額を押へてやはり妻に構はず、）あゝ、己にはどうやら分つてくるやうだ。やつと今になつて、……あゝ、やつと今になつて……

彼はよろけて行つて、肘付椅子の上に身を沈める。苦悶する、

ゾーラはどうしやうも無いので、途方にくれて、立つた儘彼を見守つてゐる。絶望と悲哀の表情。

遠くからマルセイエーズの合唱が聞えてくる。アリヨーシヤ部屋に駆けこんでくる。

アリヨーシヤ。母ちやん、行列がやつてきたよ。

そして彼はすぐ父親に氣がつく。同時に親たちのたゞならぬ様子を見てとる。そして黙つて窓際に行つて、街を見おろす。一度ならず氣がかりらしく親たちの方を見かへる。然し彼はぢき街の様子に見とれて、大聲で叫び出す。

アリヨーシヤ。やあ、くる〳〵、大變な旗と人だなあ。（間。）おや妙な事をやつてるよ。先に立つてやつてくる人が、街に出てる旗を捲りとつてるんだな。おや、かはりに赤い旗をつけてるぞ。

ヤコヴレフ。（頭をあげ、靈感に打たれたやうに眼を輝かして、）あゝ、とう〳〵やつて來たか！（思はず立上らうとする。然し次の瞬間に再び力なく腰をおろす。）

暫く間。

ヤコヴレフ。さうだ、あのとほり大衆はちつとも迷はない、恐れもためらひもしない。屍を乗りこえても、進むべき方向へ進んで行かうとするのだ。（間。）己なぞけふまで働いてきたのも、唯あの大衆を呼び出すためだつたのだ。そして今、大衆が街に溢れてやつてくる時になつて、己はまるで力を失つて、こゝにぼんやりと坐つてゐるんだ……

暫く間。

マルセイエーズの合唱さ、足音さ、喚きが、だん〳〵はつきり聞こえてくる。

ヤコヴレフ。（苦悶が爆発したやうに、）畜生つ、今こそ己にははつきり分る、己は××を欲したが。しかし自分は殺されたくなかつたんだ。けふだつてさうだ、このどたんばになつて、己はやつぱしこゝへ歸つてきたかつたんだ。女房と小供が見たかつたんだ。己は……己は……裏切つたんだ。

彼はゐてもたつてもゐられぬやうに、身を悶えて苦しむ。

荒々しくドアが開いて、隣の女房が一歩入つてくる。赤い頭布をかぶつて、歓びに溢れた顔をしてゐる。

隣の女房。（押へ難い歓喜と昂奮をもつて、）來ましたよ、來ましたよ、奥さん、見ましたか。私、窓からなんかとても見ちやゐられませんわ。これから行つてあの行列と一しよにならうと思ひますの。奥さん、一しよに行きませんか。（この時彼女はやうやく部屋のたゞならぬ様子に氣がつく。）あら、御免なさい、つい何にも氣がつかなかつたもんで……ぢや私、ひと足おさきに。

彼女がドアを開けつ放しにしてしやべつてゐる間に、近所合壁に住んでゐる貧しい男女たちが、喚いたり、ウラーを叫んだりして、どや／＼と廊下を驅けおりるのが見える。

隣の女房彼等を追ふやうに、ドアをしめて出て行く。

アリョーシャ。（やはり窓際で叫ぶ。）あゝ、こりや面白い。街の旗がどん／＼赤いのに變つて行くよ。やあ、みんな窓から首を突き出して旗を振つてらあ。

そしてアリョーシャは兩親の目を脱れるやうにして、そつと部屋から出て行く。ヤコヴレフ決然として椅子から立上る。

彼は思はず窓の方へ向つて數歩歩いてゆく。フト立止まる。窓に背を向ける。そしていら立たしい昂奮した樣子で、足早に行つたり來たりする。

ヹーラ一心になつて夫の擧動を目で追ふてゐる。そして彼の後をつけて歩きながら、おど／＼と哀訴するやうに。

ヹーラ。あなた！

ヤコヴレフ。（冷淡に）何だ？

ヹーラ。あなたはまさかお出かけになるんぢや無いでせうね。

ヤコヴレフ。（默つて歩きつゞけてゐる。）

ヱーラ。あなたがあんな人殺しの場へお出かけになるなんて事は、絶對にありませんわ。

ヤコヴレフ。…………

ヱーラ。ねえ、お願ひです。どうかお出かけにならないで下さい。あんな野獸のやうに血を流し合ふ仲間には加はらないで下さい。

ヤコヴレフ。…………

ヱーラ。そんな事は勞働者に任せて置けばいゝんですわ。勞働者なんて、あんな下等な、血に饑えた狼のやうな……

ヤコヴレフ。馬鹿つ、己の前で勞働者を侮辱する事は許さんぞ。

ヱーラ。（ヒステリカルに、）侮辱しますわ、えゝ侮辱しますとも。アリョーシャと私からあなたを捥りとつて、あなたを地獄へ落さうとしてゐる人で無し共を、どうして憎まずにゐられますか。いゝえ、殺されたつてあなたをこゝから出しませんから、えゝ、どんな事をしたつて……

ヤコヴレフ。（蔑むやうに妻を見て、）それが、けふまで十年間の間、忠實に己を助けてきたお前だつたのか。

ヱーラ。えゝ、これが嘘も偽りもない、眞つ正直な私なんです。世界ぢゆうの誰れよりもあなたを愛してゐて、どんな場合にもあなたを危險や過ちから護らうとする、忠實な妻の私なんです。これが

お氣に召さないと云ふんですか。これを突き放しても、あなたは野獸たちと一しよになりたいとおつしやるんですか。

ヤコヴレフ。…………

ゴーラ。いゝえ、どんな事があつても、私あなたをお出ししませんからね。（間。）ねえ、あなた、お願ひです、お願ひします、どうか行かないで下さい！

（荒々しくドアをあけて、ワローニンが飛びこんでくる。二十八、菜つ葉服をきて、赤い旗をもつてゐる。）

ワローニン。（ヤコヴレフを認めて）あゝ、良かつた！　君を呼びにきたんだ。

ヤコヴレフ默つて同志の顔を見てゐる。ゴーラは敵意を含んだ眼をぎら／＼させて今にもワローニンに食つてかゝりさうな様子。

ワローニン。（喘ぎながら）ヤコヴレフ、君が己たちの主張に反對な事はよく分つてゐる。しかし大衆はすでに立つたんだ。この時になつて君は……

ゴーラ。反對ですわ。あなたなんかに絶對に反對ですわ。だからあなたはヤコヴレフなんかにもう用は無い筈です。出て行つて下さい。

ヤコヴレフ。（怒りに震へて、）ゴーラ、お默り！

ゴーラ。（半狂亂のやうに、）いゝえ、默つちやゐません、殺されたつて！　この人はあなたをだましに

來たんです。アリョーシャと私をひどい目に會はせやうと思つて、あなたを盗みに來たんです。この人は私たちの幸福が羨ましいんで、ぶちこはしに來たんです。えゝ、さうに違ひありませんわ。泥棒、とつとゝ出て行くがいゝ。

ヤコヴレフ。ワローニン、さあ行かう！ 己はインテリゲンチャの最後の泥を吐くために、一度こゝへ戻つて來なくちやならなかつたんだ。

　ヤコヴレフ、ワローニンの腕をとつて行かうとする。ヹーラはいきなり夫にしがみつく。そして引きずられながら、最後の努力をもつて。

ヹーラ。あなた、あなた、アリョーシャと私を棄てないで……

　ヤコヴレフ荒々しく妻をつき飛ばして、友と一しよに出てゆく。ヹーラは床に泣き倒れる。ドアが開かれたまゝになつてゐて、次々と喚きながら驅けおりる男女が見える。示威行列は今や窓の下に迫つてゐる。マルセイエーズの合唱や、もの凄い喚聲や、足音などが、壓倒的な勢ひで舞臺をゆり動かす。

しづかに　幕

——一九二七年十一月——

阿片戦争

（五幕　十三場）

第一幕

時。　千八百三十九年、秋。

人物。　エリオット、在廣東英國領事。

　郭子立、支那人化したる英國人。

　マクドナルド、英國宣教師。

　伍榮紹、阿片密輸入者。

　外に支那人の給仕一人。

所。　廣東なる英國領事エリオットの事務室。

右手に大いなるガラス戸ありて、珠江の大いなる流れと波止場を見晴らすやうになつてゐる。河上には遠く英國の商船が一隻だけ見える。

正面の壁には東洋の大地圖が掛かつてゐる。

エリオットは三十一、何やら落ちつかない、いらいらした樣子で部屋をあちこち歩いてゐる。つひに窓際に立止まつて、じつと外を眺めてゐる。表で何やら人々の罵る聲がかすかに聞こえる。

左手のドアをあけて、郭子立が入つてくる。ロンドン生れの英國人であるが、生涯の半分以上を支那で暮したので、すつかり支那人化してゐる。支那服を着てゐる。二十九。

郭子立。（ドアをしめながら、）畜生、馬鹿にしてやがる！

エリオット。（向き返つて、）我々にこの廣東を立のけとでも云つて來たのかね。

郭子立。三日の猶豫期間もけふ限りだ。夕方までに隱してある阿片を一切合切總督府へ提出しろつて云つてきたんですよ。（椅子に掛ける。）

エリオット。ふうん。（歩きつゞける。）

郭子立。（ぷり〳〵しながら、）僕、云つてやつたんだ。けさまでに提出した千三百十七函が一切合切で、それ以外には阿片の塵つぱひとつこちらには殘つちやゐない、それに英國の商船もすつかり引あげてしまつたんで、今ぢやどこの商館にだつてそんなもなあ有りやう筈が無いつて。ところが、御廷楨の奴、どうしてもまだ三萬函や五萬函は隱してあると云つてきかないんだ。あんな忌々しい豚尾野郎、悪魔に喰はれつちまやがれ。

エリオット。結局どうなつたんだ？

郭子立。どうなるもんですか。夕方總督府の門がしまるまでに、三萬函や五萬函かの阿片を提出すれ

ぱよし、でなけりやどんな殘酷に處するかも知れないから覺悟しろと嚇かして行きましたよ。それだけぢやまだ氣がすまないと見えて、兵士を二人表門に殘して行きましたぜ。この間奴がやつたやうに、領事館の門を出入する支那商人を見つけ次第、片つぱしから靑龍刀でぶつ切つて威嚴を示さうつて譯なんでせうよ。（煙草をつける。）

エリオツトは暫く歩きつゞけてゐる。

エリオツト。（椅子に掛ける。）ぢや、もう千兩も出してやるかね。

郭子立。（呆れたやうに相手を見る。）馬鹿々々しい。あなたはまだ支那人の性質をよく知らないんだ。僕は支那で十年も生活してきた經驗から云ふんだが、こちらでちよつとでも讓歩した所を見せてごらんなさい。あいつら圖に乘つて、それこそどんなことをし出かすか知れたもんじやない。けさ出した分だつて多すぎたと僕は思つてゐる位なんですからね。

エリオツト。僕はその點で君と少し意見が違ふんだ。といふのは、支那人はまだ我々の力を殆んど知らない。英國がどれほどの富と武力を持つてゐるかまるで知らうともしない。あいつらは、淸國が世界第一の强大國で、自分らが最も進んだ文明人だとうぬ惚れきつてゐるんだ。あいつらが我々をふだん野蠻人としか呼ばないのでもそれは分つてゐる。相手がさういふ頑迷な、無茶な野蠻人なんだから、無暗に怒らせてしまふよりは、或る程度にあいつらを宥めてかゝる方が悧巧なやり方ぢや

無いかと思ふんだがね、殊に、今は。

郭子立。大けさな言葉や身振りに驚いてゐたら、我々は一日だつて支那人の中に生きちやゐられませんよ。もしあいつらがあんまり目に餘る事をやつたら、その時は我々の力を見せてやらうぢやありませんか。

エリオット。そりや勿論だ。今にきつとさういふ時だつて來るよ。

郭子立。だが、今度の事件はそんなに大した事にはなりませんよ、大丈夫。林則徐も總督になり立てだもんで、やれ阿片輸禁令だ、死刑だ、英人追放だなんて馬鹿騷ぎをやつてゐるが、ぢき嵐が通りすぎる事は請合でさ。林が今どんなに威張つてみたところで、阿片は支那國民一般の氣違ひじみた要求なんですからね。この一般の要求の上に立つてゐるからには、我々の貿易の前途は少しも悲觀するには及びませんよ。我々はそんなひまに、あそこへ來てゐる商船から、阿片をうまく陸揚げする方法を考へるべきですよ。あの船を搜索されて、阿片をすつかり沒收されてしまつたらつまりませんぜ。

エリオット。君は伍榮紹を呼んで置いてくれたらうね。

郭子立。それだけが今の僕の氣がゝりですよ。何しろ門には靑龍刀をもつた奴が二人頑張つてゐますからね。

エリオット。ふむ。

郭子立。でも、奴の事だ。何とかしてやつてくるでせう。

ドアを叩く音。

郭子立。さうら來た。きつと奴だ。

十七八の支那人の給仕顔を出す。

給仕。伍棠紹さんです。

郭子立。こちらへお通し。

給仕。(もじ〱しながら、)それから、私はこれからすぐお暇を頂きたいんですが。

エリオット。どうしたつてんだ？

郭子立。支那役人に嚇かされやがつたな。何にも心配する事は無いよ。

給仕。だつて、イギリス人に使はれてゐるものは、阿片を飲む奴と同樣に、片つぱしから殺してしまふと云つてるんですもの。

郭子立。領事館の建物から一歩でも出たら、お前なんかすぐバサリやられるに極まつてるんだ。だから、暇をくれなんて云はないで、こゝに閉ぢ籠つて働いてゐるのが、お前にとつて一番安全なんだよ。

給仕しぶ〳〵立去る。

伍榮紹入つてくる。四十前後。媚びに充ちたずるい醜い笑顏。

伍榮紹。（エリオットの側へ行つてはあ〳〵喘ぎながら片手を出す。）今日は、領事さん。

郭子立。（側から。）いつもながら君の猪首が無事なのは何よりだね。

伍榮紹。（郭の方を向いて。）どうして〳〵、私の首ももう危ないもんですよ。（握手する。）實は今も御門の所に、ほら、（刀を拔いて斬るまねをする。）恐かないのが二人立つてゐるでせう。いくら私だつてこの首にかけ換へのない事は知つてゐますから、よつぽど引返さうと思つたんですがね、待てよ、旦那方から呼ばれたのも、これはまた何か大事な〳〵急用があつての事に違ひないと思ひ返しましたので、奴等に大金を握らせてやつと入つてきたやうな譯でがすよ。やれ〳〵危ない所だつた。（汗をふく。）

郭子立。いくら握らせたんだ。

伍榮紹。拾兩ですよ、旦那。つまり一人に五兩づつでがすよ。

郭子立。ほら吹け。一兩も出したかどうか怪しいもんだ。

伍榮紹。（大仰に驚いて。）飛んでもない、どうして私が大事な〳〵旦那方に嘘をつくもんですか。たしかにこの重くもない財布から、一兩の銀貨を拾枚出して渡しましたよ、これだつて全く旦那方のた

めだと思ひましたからね。どうして、この頃の官員や兵隊は昔と違つてちつとやそつとの賄賂ぢや
自由になりませんぜ。
郭子立。まあ、どつちだつていゝさ、今度の用だつてどうせ君の儲け仕事なんだから。
伍榮紹。（膝を乘り出す。）旦那、けさまたイギリスの商船がひとつ川へ入つてきましたね。
エリオット。（口を入れる。）それについて、是非またお前に骨折りを賴みたいんだがね。
伍榮紹。そりやあ、もう、私で役に立ちます事なら。私あこれでも、旦那方の役に立つ事なら、この
首くらゐ斬られたつて構はないといふ心意氣なんですから。さつきも申しましたとほりで、へえ。
エリオット。あの船は、當地で阿片厳禁令が布かれた事も、イギリスの商船がみんなここから引揚げ
てしまつたことも、何にも知らないでセイロンからはるばるやつてきたんだ。しかも檢べてみると
阿片を四萬函から滿載してゐるんだ。
伍榮紹。へえ、四萬函！
郭子立。それを君、見す／＼持つて歸らせるといふ事ができるかね。
エリオット。だから、ひとつ君の骨折で、今夜ぢゆうにあの船から阿片を全部陸あけして、市中のど
こかへ隠まつてもらひたいのだ。
郭子立。勿論　お禮はたんまりするよ。

エリオツト。どうだね、ひとつ引受けて貰へまいか。

伍榮紹。（勿體らしく考へてから、）いや、これはむづかしい仕事ですな。ちよつとこの伍榮紹でも手に負へんかも知れませんな。何しろふだんの時と違つて……

郭子立。君にはできないから、誰か他の商人に當つて見ろつて云ふのかね。さういふ譯なら……

伍榮紹。いえ、決してさういふ譯ぢやありませんよ。勿論旦那方から頼まれた以上、私も厭とは申しませんがね。（考へてゐる。）唯、どうも。

エリオツト。勿論かういふやかましい折だ。やりにくい事は充分解つてゐる。しかしそこはまた例の君の凄腕だ、何とか成りさうなもんぢや無いか。

郭子立。嚴禁令だ、何だつてやかましくどなり立ててゐるのは、要するに林則徐の大馬鹿と後一人二人ぐらゐのものなんだ。外のものはみんな阿片を吸ひたい連中ばかりで、どうしてこんなに騷ぎ立ててゐるか分らないくらゐのもんだ。それに、昔から支那ぢや賄路はいつだつて萬能膏だ。賄路さへいつもより少し奮發すりや、道はどこへでも自由につく事請合ひだよ。

エリオツト。そんな費用は勿論いくらでも出していゝ。それだけでなく、今後は何かにつけてもつと〱金儲けをさせてやることも約束していゝ。どうだ、ひとつ引受けてくれないか。

伍榮紹。良うございます。引受けました。

エリオツト。さうか、それは有難い。（伍と握手する。）

郭子立。君が引受けてくれりや、もう出來たも同じ事だ。（同じやうに握手する。）

伍榮紹。（急に頭をかいて苦い笑を漏らす。）やれ／＼大變なことを引受けてしまつたぞ。今度こそこの首も危ないもんだわい。だが、宜しい、引受けた以上は必ず船の四萬函を今夜ぢゆうにこつそり片づけてお目に掛けませう。まづボートを——あんまり多いと目立つから——それに苦力を……

首をつき出して聲を低くする。暫くの間、三人低聲で密談する。わき目も觸らぬ熱心さで。

ドアを叩く音。給仕顏を出す。

給仕。宣敎師マクドナルドさんがおいでゝございます。

郭子立。マクドナルド？

エリオツト。あ、分つた。一年前にここを立つて、支那の奧地へ傳導に行つた人だ。これは會はなくちやならん。ぢや君たちは別室でよく打合せをやつてくれ。

給仕。お通しするんですか。

エリオツト。さうだ。

給仕立去る。郭子立と伍榮紹は、右手のドアから別室へ入つて行く。

宣敎師マクドナルド入つてくる。四十五六、もう白髪がある。

エリオット。（立つて迎へながら、）おや、これはお珍らしい、牧師さん、お達者でしたか。
マクドナルド。あなたもお達者で。（抱き合ふ。）神のお惠みで、私もどうやら無事でお目にかゝる事ができました。
エリオット。隨分奧地まで入つて行かれたやうに聞きましたが。まあ、お掛けなさい。
マクドナルド。（掛ける。）行きました。（壁の地圖を指しながら、）貴州省へ入つて、殆んど青海省の境近くまで傳導をつゞけました。
エリオット。（掛ける。）ほう、そんな奧地まで。まつたく、暗黒な支那の內地を傳導して歩かれる苦勞は、ポーロやペテロにも分らないまた別なものでせうな。この荒地にも勿論到る處良い種が蒔かれたに違ひありませんでせうが。
マクドナルド。いや、そんなに云はれると、私は實に恥づかしい。だが、支那人の頑迷不靈と云つたら、とても〳〵。私なんかまあ命がけでやつて見ましたが、もう齒が立たない氣がしますよ。
エリオット。お察しします。ついこの間も南京でイギリスの宣敎師が一人虐殺されたさうですが、そんな噂を聞く度にあなたの事を思ひ出してゐましたよ。
マクドナルド。いや、こゝでは殺されないだけが精いつぱいだと云つてもいゝです。私なんかまあ、何遍殺されるやうな目に會ひましたかね。四川省の山の奧では、私が神の敎を說いてゐるところを

いきなりふん縛られて、さんざん石打ちにされて、穴へ放りこまれてしまひました。私もすつかり殉教の死を覺悟して、もう殺しにくるか〳〵と思つて待つてゐると、思ひがけない十四五の可愛らしい支那娘がこつそり穴へおりてきましてね、そつと私の繩を解いてくれたんです。そして云ふには、今親たちはみんな阿片を飮んで良い心持で眠つてゐる、この間に早く遠くへ逃げて行きなさい。そこで、私は知らない娘に心からお禮を云つたり祝福を與へたりして、夜どほし險しい山道を逃げ歩いて、やつと虐殺から脫れたやうな譯なんです。あんな奧地の未開な支那娘の心にもやはり神の宿り給ふことが……

エリオツト。（非常な興味と熱心をもつてこ ほう、四川の奧までも阿片が行渡つてゐますか。

マクドナルド。ゐますよ。實は私も驚いたのですが、傳導の旅に行くところ、どこへもひと足先に阿片が入つてゐるんです。

エリオツト。しめた！（立上る、そして歩きまはる。）そんな奧地まで阿片が行き渡つてゐるとは知らなかつた。我々はもう支那の大部分を占領したやうなものだ。もうかうなりや、支那政府がどんな死刑法で阿片の販布を防害しやうと、林則徐がどんな雷のやうな聲でどなり散らさうと、何にも恐れる事はありやしない。

マクドナルド。もし阿片がこんなに廣まつてゐなかつたら、私も四川省の奧で殉教の死を遂げてゐま

したよ。正直な所、私はこれまでイギリス商人の阿片密輸入には深い反感をもつてゐたのですが、今度は私も阿片に感謝しなくてはならなくなりましたよ。（笑ふ。）

エリオツト。マクドナルドさん、あなたは覺えてゐますか。一年前、あなたが奥地へ傳導に旅立たうとなさつた時、私たちはやはりこゝで話し合ひましたね。その時私が冗談半分に云ひました、あなたの聖書と、私の阿片と、どつちが先に支那大陸を征服するだらうつて。

マクドナルド。さう、覺えてゐますよ。あの時あなたの意見では、この二つは兩手のやうに協同して働かなくてはならんと云ふのでしたね。その時私は非常に反對したんでしたが。

エリオツト。さうでした、然しそれは今だつて變りません。右手に聖書を、左手に阿片をです、そして私たちは國家的な大目的へと邁進するのです。マクドナルドさん、實に愉快ぢやありませんか。あなた方の殉教的な勇氣は、支那の暗黑な奥地までも神の限りない愛で醉はせてゐられる、阿片はそれにも劣らず支那の民家を隅々までも快い眠りに誘ひこんでゐる……

マクドナルド。（よく意味の分らない樣子。）

エリオツト。（昂奮してだん〳〵雄辯になつてくる。）マクドナルドさん、僕は思ひ出すんです。僕がまだオツクスフオード大學にゐた時分、或る日クリストフ、コロンブスの傳記をよみました。彼があらゆる困難と戰つて、つひにアメリカ新大陸を發見するくだりをよんだ時、正直なところ、僕は感嘆

するよりも却つて羨望に堪へなかつたものです。そして僕がコロンブスよりひと時代先に生れて、この自分がアメリカを發見しなかつた事をどんなにか殘念に思つたでせう！　僕の若い心は當時そんなに大野心に燃えてゐたんですね。そしてその時はかう思つてやつと自分を慰めたんです。しかし、現在にも東洋には未開拓の大寶庫がある、例へば支那だ、僕がもし學校を出たら、早速支那へ行かう、そして大英帝國のためにその未開拓の大寶庫を開かう！　マクドナルドさん、その時の大決心が、かうして今日僕をこの遠い支那にあらしめるんです。

マクドナルド。さう云へば、前の領事のモリソンさんも、いつもあなたの事をほめて、エリオットこそ將來英國の利益のために東洋をすつかり開拓する人間だと云つてゐましたよ。

エリオット。モリソンさんには實さい世話になりました。しかしモリソン領事の時代には、支那への阿片輸出額はせい〳〵七八千函だつたのに、今日では四萬函から五萬函を突破するやうになつてゐますからね。

マクドナルド。いや、まつたくすばらしい勢ひですね。ふうん、確かにあなたは現代のコロンブスだ。

エリオット。（意氣昂然さ。）これからですよ、マクドナルドさん。困難はまだ〳〵大きいでせう。だが、私の胸には成算があります。まあ、見てゐて下さい。

マクドナルド。（立上りて。）エリオットさん、私にひとつ、あなたを祝福させてくれませんか。

エリオツト。恐れ入ります。云ふまでもありませんが、私はこれでも自分の利益のためにこんな仕事をしてるんぢやありません。私の念頭には唯國家の利害あるばかしです。ヰクトリア女皇陛下の光輝ある大英帝國あるばかしです。女皇陛下の統治がすでに印度に及んだやうに、この支那大陸にも及ばんことを願ふばかしです。

マクドナルド。それ、それ。それについては私たちは全然おんなじです。今度といふ今度、私も支那の奥地を傳導してみてしみ〴〵感じた事だが、支那人の頑迷不靈ときたら、とても〳〵想像の及ぶ所ぢやない。早く云へば、彼等は野蠻人だ。とても神の惠みに與かるどころぢやない。强ひても彼等を神の惠みに與からせやうとすれば、その前にもつと大事な事がある。それは彼等を大英帝國の臣民にする事だ。あなたはさう思ひませんかね。

エリオツト。失禮ですが、宗教家にしてはあなたはほんとに物のよく分つた方だ。さうですとも。マクドナルドさん、あなたも今後ずつと私たちと一しよに支那に止まつて、しつかりやつて下さらなくちや。

マクドナルド。やりますよ、大いに。私も暫く廣東で休養したら、今度は南支那の方へ傳導に出かけるつもりですよ。

エリオツト。素的だ。あなたにしてさうだ、私なぞ猶更勇氣を出して大いにやりませう、誓つて。

マクドナルドは感極まつた風で、エリオットの頭上に手を置いて心からなる熱き祝福を與へる。

第二幕

第一場

人物。 林則徐、廣東廣西總督。
鄧廷楨、その幕僚。家來大勢。

所。 總督府なる廣間。

林は五十五歳、眼光鋭く、髯深く、聲雷の如し。正面の椅子に嚴然と掛けてゐる。その兩側に幕僚數名づつ居流れる。

鄧廷楨が林の前にうや／＼しく立つて報告してゐる。夜である。蠟燭が燃えてる。

鄧廷楨。その儀につきましては、英國領事館を始めと致しまして、あらゆるイギリスの商館へ嚴達したのでござります。それに寸分の手拔かりはございません。

林則徐。それだのに、今に到つても、あれつきり阿片を提出しをらんと云ふのぢやな。

鄧廷楨。左様にござります。實に不埒至極な奴らにござります。この上はあの野蠻人どもをひつ捕へるなり殺すなり、極刑に處するが至當かと存じます。

林則徐。（立上る。）勿論ぢや。この上は傲慢無禮な赤猿共に、目にもの見せてくれやう。こらつ、鄧廷楨、お前はこれから兵卒多勢を引きつれて、すぐさま英國領事館へ行け。そしてエリオット以下をひつ捕へ、館を隅々まで捜索せい。さらに外のものも軍人多ぜいを連れて行つて、あらゆるイギリス商館へ押かけろ、そして主だつたイギリス人をひつ捕へ、隱まつてる阿片を捜し出せ。その際もし抵抗する奴がゐたら、イギリス人でも構はん、片つぱしから斬つてしまへ。商館へ出入する支那人を見つけたら、それも片つぱしから斬つて構はん。

鄧廷楨。はつ、畏りました。すぐさま奴等をそのやうに致します。それから、捕へたイギリス人はいかが處置致しませうか。

林則徐。獄屋へ放りこめ、そして阿片のありかを正直に白狀するまで、あらゆる拷問折檻を致せ。すつかり白狀するまで、食べもの一切やる事はならん。

鄧廷楨。畏りましてござります。ではこれから直ちに出かけまして、御命令どほりに致しまする。

鄧廷楨。林の前より引下がり左手より出てゆきかける。宋來つゞく。

林則徐。待て。まだ云ひ置く事がある。イギリスの船と商館へは食べ物と燃料を一切入れさせてはならん。町の商人どもにそのやうによく云ひ渡して置け。もしこの命令に背く奴があつたら、そんなものは片つぱしから斬つて捨てゝしまへ。

鄧廷楨。はつ、畏りましてござります。直ちに町人へそのやう申渡しますでござりませう。（退場。）

林則徐。（憤激はなか〳〵止みさうにも見えない。）實ににつくい奴ばらぢや。いかに無智な赤猿どもに、天子の威光が分らんとは云へ、國家の財寶を掠め取られた上、國民を亂されて堪るもんか。一日も早く清國から阿片を根絶やしして、野蠻人どもを追つ拂ひ、畏れ多くも天子の御胸を安め奉らんでは臣下としての本分が立たんわい。（兩側の家來を見まはして。）おい、もの共、みんなよく心得たか。

一同。はつ。（低頭する。）

第二場

人物。林則徐。
鄧廷楨。
英人數名。
苦力多數。

所。　虎頭門の廣場

正面に門がある。廣場では山のやうな阿片が炎々と燃えてゐる。右から、左から多ぜいの苦力が續々と阿片の函を運んできては火の中へ投げこんでゆく。

右手に林則徐が床几に坐し、鄧廷楨外數名の家來をつれて監視してゐる。

左手前には群集が押寄せて見物してゐる。二人の兵士が拔劍でそれを制してゐる。

兵士甲。そんなに前へ出てはいかん。

兵士乙。もつと退れ、さがれ。

兵士甲。誰だ、阿片の灰を盜まうとした奴は。

兵士乙。畜生、灰のひと握りでも盜んで見ろ、すぐにぶつ斬つてやるから。

林則徐。もうどれ位燒いたか。

鄧廷楨。けさから、少くも二萬函は燒いたでござりませう。

林則徐。まだ少ない。奴らの持ちこむ阿片は、五萬や十萬では無い筈ぢや。ひつ捕へたイギリス人共はまだ實を吐かんと見えるな。

鄧廷楨。充分折檻も拷問も致しまして、とにかくこれだけ白狀させたのでござりますが。

林則徐。いや、まだ〳〵拷問が足りんと見える。お前行つて、エリオット以下をもつとひどい責苦に會はせろ。一切合切白狀するまで、少しでも拷問の手を愆めてはならんぞ。

鄧廷楨。はつ、畏りました。

林則徐。急げ。

鄧廷楨。はつ。（急いで退場。）

暫く間。

イギリス人が二人、群集を押分けて左手から出てくる。

兵士甲。こらつ、そんなに前へ出てはいかん。

兵士乙。さがらんか、ぶつ斬るぞ。

イギリス人A。お願ひです。お願ひであります。

兵士甲。何のお願ひだ？

イギリス人A。總督にお目にかゝらせて下さい。

イギリス人B。是非會はなくちやならん急用で來たのであります。

兵士乙。馬鹿野郎、總督閣下は赤鬚なんかにお會ひなさる譯に行かん。

兵士甲。退れ。早く退らんかつ。

イギリス人A ⎫
イギリス人B ⎭（嘆願する。）お願ひであります、お願ひであります。總督に會はせて下さい。

林則徐。何物だ？　會つて遣はすからとにかくこゝへ連れ出せ。

兵士甲。乙。はつ、とほれ。

イギリス人二人、喜んで林則徐の前へ進み出る。

イギリス人A、總督閣下にお目にかかることを至上の光榮に存じます。（そして右手を延ばして總督と握手しやうとする。）

林則徐。（雷の如くどなる。）無禮もの、退れ。貴樣は淸國の禮儀作法を心得ぬかつ。

イギリス人二人は雷に打たれたやうに堅くなつて立つてゐる。

家來甲。貴樣たち、なぜ總督の前に突つ立つてゐるんだ？　こら、膝をつかぬか。

家來乙、膝をつけ、膝を。

イギリス人二人は止むを得ず土の上に膝をつく。

家來甲。禮拜しろ。

家來乙。かうするんだ。（兩手を組んで支那式の禮拜の形をする。）

イギリス人は仕方なく、云はれるまゝに支那風の禮拜をする。

林則徐。何の用か、早く申せ。

イギリス人A。閣下、お願ひであります、領事エリオット以下全部のイギリス人を一日も早く釋放して下さいますやうに。閣下、もとよりそのためには、私共でできることなら何んでもする考へでをります。これは私共心からのお願ひでございます、閣下……

イギリス人B。閣下の命令は、神の命令であります。どんな嚴格な命令でも、私ども神に誓つて正直に守ります。そのかはり、領事エリオット以下を直ちにお助け下さいますやうに。

林則徐。ふゝん、今になつてやつといくらか分つたか。

イギリス人A。分りました。閣下の偉大さは山の如くであります。

イギリス人B。閣下、寛大さに於いてもまた海の如くでゐられます。

林則徐。それぢやお申渡す。よく聞け。貴樣たちが一時間以內に、市中に隱まつてゐる阿片を二分の一提出したら、みんなに食物を得させてやる。

イギリス人A。はつ、二分の一どころか、全部でも直ちに提出致します。

林則徐。もし阿片全部を差出すと云ふなら、直ちに領事以下を釋放して遣はす。場合によつては今後も貿易を許して遣はすかも知れん。

イギリス人A。はつ。有難う存じます。

イギリス人B。はつ。有難う存じます。

林則徐。但し、もし余がこの命令に從はない時は、貴樣たちの妻子もひつ捕へて嚴刑に處するから、左樣心得ろ。

イギリス人A
イギリス人B はつ、よく心得ました。

林則徐。ぢや早く行つて、阿片をみんなこゝへ運ばせろ、塵つぱ一つでも隱したら、その時は一切容赦しないぞ。

イギリス人A。畏りました。

イギリス人B。有難うございました。

イギリス人そこ〳〵に退場す。

林則徐。これでよい。（滿足さうに立上る。）これで、あいつらが夕方までにはまだ一萬函や二萬函は持ちこむぢやらう。例へ二日かゝつても、三日かゝつても、そいつを全部燒き盡くすまではこの仕事を止めてはいかん。よいか。

家來一同。はつ。

林則徐。それからさつき見てゐると、人民の中に阿片の灰を盜まうとする者がある。折角阿片を燒き

棄てても、灰を皆が殺ふやうでは何にもならん。お前たちに云ひつける、お前たちはすぐ鹽と石灰を用意しろ。そして阿片を燒きつくしたら、その中へ鹽と石灰をよくつき交ぜて、川へ運んで棄てゝしまへ、さうしなければ安心がならん。

家來一同。畏りました。

林則徐。これで、どうやら清國から、阿片を根絶やしできやうと云ふものぢや。この上赤猿どもを追拂つてしまへば、もう何にも心配することはない。中華中國は安全なること泰山の如しぢや。永久に内からも外からも禍を蒙ることは無い譯ぢや。

林則徐右手より退場する。二人を殘して、他の家來つゞく。

苦力たちはいよ〳〵盛んに阿片の函を運んでくる。火はます〳〵盛んに燃え上る。

第三場

人物。伍榮紹。

マクドナルド。

阿片中毒者二名。

失業者大ぜい。

所。　街路。いろ〳〵な支那の商店が並んでゐる。
眞ん中に伍紫紹の店がある。店先には英國製の陶器や、器具や、贅澤品が並べてある。「英吉利國産品」「同濟問屋」等の看板が出てゐる。
失業者の群が街上にごろ〳〵してゐる。伍の店の入口にも三人ばかり日向ぼつこをしてゐる。一人は軒下にごろり寢そべつてゐる、
賭博に耽つてゐる二三人もある。
一隅には阿片中毒者が二人、ぽかんと坐つたり起きたりしてゐる。

阿片中毒者甲。（寢ながら苦しむ。）あゝ、苦しい。せめて阿片の匂ひでも嗅がれたらなあ。

阿片中毒者乙。己もさ。だが、廣東ぢゆう隅から隅まで探しまはつたつて、阿片なんかもう塵一つだつて無えよ。（膝を抱へて深く溜息する。）

阿片中毒者甲。さうでもあるめえ。己あきのふ或る金持の家の前をとほつたら、確かに內から阿片の匂ひがしてをつたよ。己あさつきまで、その家に夜ぢゆう寢ころんで、一生懸命匂ひを嗅いでたんだが、けさはもうおしまひになつた。ああ、苦しい。金さえありやなあ。（呻く。）

阿片中毒者乙。己あゆんべ虎頭門へ行つて、夜ぢゆう廣場を這ひずり廻つたよ。こないだ燒きすてた

阿片の灰を、ひと背めでも拾はうと思つてなあ。
阿片中毒者甲。（もの憂さうに、）それで、いくらか有つたか。
阿片中毒者乙。石つころと砂ばかしだ。匂ひさへ殘つちやゐねえ。外にも已のやうなものが多ぜい來て、夜ぢゆう這ひずり廻つてたが、あんなに阿片を燒きすてるなんて、何ちゆう罰當りだつてみんな怒つてたよ。あつ、痛つ、痛つ。
阿片中毒者甲。（起きなほつて、）ふん、已も今夜虎頭門へ行つて見やうよ。もつと根氣よく探したら、ひと背めの灰ぐらゐは無いもんでもねえ。
阿片中毒者乙。駄目々々。（今度は彼が寢そべる。）もつとも廣場を這ひずり廻つてるだけでも、何だか阿片の匂ひがするやうで、惡い氣持ぢや無えがなあ。あゝ、堪らない。（不意に泣き出す。）
失業者甲。（忌々しさうにどなる。）やい、阿片中毒のふら〳〵野郎、やかましいやい！　已たちが毎日職にあぶれて、ろく〳〵たうもろこしも食へねえ時に、何が阿片々々でえ。
失業者乙。阿片なんかお金持の召あがるものだ。柄にもねえ事あ諦めた方がいゝぜ。
失業者丙。あの野郎、追剝や泥棒をやつちやあ、阿片に浸つてやがつたんだ。その罰なんだよ。
失業者乙。ぢや阿片が無くなつたお蔭で、追剝や泥棒もよつほど減つた譯だ。
失業者甲。お前なんか早く死ばつた方がいゝぜ。

失業者乙。さう云やあ己たちもぢき死ばりさうだ。二三日何も食はねえんだ。
失業者丁。己たちも泥棒か追剝でもしなくつちや、もうやり切れねえな。
失業者乙。何といふ不景氣だ。いつになつたら仕事に有りつけるんだ。
失業者丙。船なんか一つも入つて來やしねえ。
失業者乙。せめて阿片でもあるとなあ。
失業者甲。誰だ、また阿片の事を云ひ出す奴あ。くたばりやがれ。
失業者乙。あゝ、そんなにがみ〳〵言はなくつたつてぢきに死ばるよ。
伍崇紹が家の中からぶらりと門口へ出てくる。
失業者甲。（いきなり彼の側へ行く。）親方、何か仕事をおくんなさい。
失業者乙。己たちにも、親方。さつきからこゝでお待ちしてゐたんです。
失業者丙。何か食べるものを。己たちやまるで何にも食はないんです。
失業者丁。餓え死にするのを助けて下さい、親方。
失業者の群は伍崇紹を取圍んで喚き立てる。阿片中毒者は動かないで倒れてゐる。
――仕事を！
――食ひ物を！

――わつしらをどうかしてくれ！

伍榮紹。（癇癪を起してどなる。）やかましい！ 何が何やら分らん。話があるなら一人々々もつと靜かに云へ。

失業者甲。親方、わしらあ今までどほり仕事がほしいんです。仕事に有つかない事にや、わしらあ餓え死にするばかりなんです。親方、何か仕事に有りつかせておくんなさい。

伍榮紹。それなら己だつて同じ事だ。己にも仕事と食ひ物を貰ひてえもんだ。

失業者乙。親方は金持だ。わしらを助けてくれる事ができるんだ。

失業者一同。さうだ、さうだ。

伍榮紹。うむ、己ももとは少しは金持だつた。ところがイギリスの商船が來なくなつてから、己もお前たちと同じさ。失業して、食へなくなつたんだ。（一方を指して、）お前たちは河岸に行つて見たかこないだまで、あそこにやイギリスの商船がいつぱいゐて、イギリスの立派な商館もずらりと並んでゐた。お前たちもどつさり仕事があつて、町は繁昌したもんだ。それが今ぢやどうだ。イギリス船なんか雨夜の星だと云ひたいが、一つもゐやしない。廣東の町は不景氣々々でまるで火の消えたやうだ。誰がこんなにしやがつたんだ？

――林則徐だ！

――いや、イギリス人だ！

――林則徐だ。林則徐のせいだ！

伍榮紹。お前達あよく知つてる。勿論林則徐のせいだ。あいつが町を不景氣にして、己たちみんなを食へなくしたんだ。きけば、あの馬鹿總督も、この不景氣風にはえらくヘコタれて、もとどほり海外貿易を盛んにしやうとしてあせつてるさうだ。その癖、業つく張め、イギリス人にだけは貿易を許さないつて頑張つてるんだ。そればかしぢやない、あいつは澳門まで出かけて行つて、そこでも阿片退治とイギリス人の追つ拂ひに躍起になつてると云ふぢやないか。あいつこそ古い阿片の中毒で昔ながらの天上天國の夢に醉つぱらつてやがるんだ。新しい時世つてものが、あいつにやまるで分らねえんだ。國を滅ぼすのはあんな奴だ！

――そんな奴あ追つ拂つてしまへ！

――林則徐をやつつけろ！

伍榮紹。だが、心配する事あ無い、今にあいつやり過ぎて、きつとしくじるから。それに間違ひはない。そしてイギリスの船がまた河へ入つてくるやうになるさ。

――イギリス人がどうしたんだ？

――イギリス人は己たちの敵だ！

――あいつらはこの國の寶を盜みに來やがるんだ！

――あんな野蠻人を二度と上げるな。

伍榮紹。何を云つてるんだ、馬鹿野郎共。イギリス人は唯商賣にやつてくるんだ。向ふでも儲けるだらうが、こつちだつてやり方次第でいくらでも儲ける事ができるんだ。

――ふん、儲けるなあお前たちだけだ。

――さうだ、さうだ。

――己たちあ打たれたり蹴られたりしてこき使はれるだけだ。

――己あ右腕をたゝき折られた。

――己あ、見てくれ、この片目をつぶされちやつた。

――己たちあイギリス人に養はれろつて譯か。

伍榮紹。ぢや、今になつて、仕事が無いの食へねえのつてほざかぬがいゝ。

――そんな馬鹿な事があるか。

――あいつら野蠻人だ、鬼だ！

――己たちあ白鬼なんかどうだつていゝんだ。

――仕事をよこせ！

食ふ物をよこせ！
――己たちを餓え死にさせるつもりか。
　失業者一同騷ぎ立てる。
　宣敎師マクドナルド片手に聖書、片手に傘をもつてさぼ〳〵と通りかゝる。
――やあ、白鬼だ！
　失業者一せいに彼の方を見て急に憎惡に目を光らす。
――づう〳〵しい奴だ。まだこの邊にぐづ〳〵してやがる。
――早く失せやがれ、人殺し！
――不景氣風はこゝからつてやうな面あしてやがる。
――毆るぞ。けだもの！（一人がつか〳〵とマクドナルドの側へ寄る。）
マクドナルド。（しづかに。）皆さん、私はあなた方に少しでも害を加へやうとするものではありません、反對に、私はあなた方に……
――坊主、己たちに說敎しやうつてんだな。
――說敎ぢや腹の足しにならねえ。
――いや、こいつあ阿片の密輸入者に違えねえ。

――さう云やあ阿片の臭がするぞ。

――やつちまへ。やつちまへ。

マクドナルド。まあ、皆さん、靜かにして少し私の云ふ事をきいて下さい。なる程、私たちは異人種です。言葉も皮膚の色も違つてゐます。しかし高いところにゐられる神樣の目から見れば、そんな區別はありません。神樣の前には私たちはみんな兄弟です。私たちは愛し合はねばなりません……

――へん、己たちと白鬼と兄弟だつて。糞くらへだ。

――命だけは助けてくれつてんだよ。

――うつかりすると魔術にかけられるぞ。

マクドナルド。（混亂しながら命がけでつゞける。）私があらゆる危險を冒して、かうして遠い國へ來て傳道に獻身してゐるのも、一つに神樣の愛を皆さんに傳へたいからであります。有難いことに、私どもイギリス人は皆クリスチアンとして生れて、小さい時から他人を愛するやうに躾けられてゐます。他人を愛し、他國を愛することは今ではイギリス人の深い習慣になつてをります。だからこそ私たちはアフリカ、インドは云ふに及ばず、この遠い支那のあなた方兄弟まで救はうとして……

この時一人がいきなりマクドナルドを蹴り飛ばす。マクドナルド悲鳴をあげて逃げ出す。

――さうら、逃がすな！

——みんなで毆つてしまへ。

——やつつけろ。

轉がつてゐる二人の阿片中毒者をのけて、失業者の群はみんなマクドナルドを追つかけてゆく。そして舞臺の蔭で、つひにマクドナルドを捕へて毆つたり蹴つたりする音が聞こえる、呻る聲。叫ぶ聲。

伍榮紹。(忌々しさうに、また馬鹿にしたやうに、)仕事が無い、飯が食へないつて、騷いでゐながら、イギリス人さへ見りやすぐあの仕末だ。ちえつ、手に負へない氣違ひ共!(そして家の中へ入つてゆく。)

第三幕

第一場

人物。　ハミルトン、東印度商會支配人。
　　　エリオツト。
　　　マクドナルド。
　　　印度の勞働者、印度人女奴隷、イギリス人等。

所。　印度に於ける阿片栽培地。

右手にバンガローの建物。家のまはりに棕櫚と椰子が繁り、前面には色彩の强烈な草花が咲亂れてゐる。高いひろいヴエランダでは、宣教師マクドナルドが、頭をぐる／＼繃帶でまいて、椅子の上でぐつすりひる寢をしてゐる。サリーを纏ふた女奴隷がひとり、彼のうしろに立つて、天井にかゝつた棕櫚の葉でできた煽風器を、紐を引く事によつて、根氣よく、しづかに風を送つてゐる。

左手には工場の屋根の一部が見え、背景は目の屆くかぎり、一面のけし畑が續いてゐる。そして烈しい炎熱に、多ぜいの黑人勞働者が（女も交つてゐる）酷使されてゐるのが見える。そして彼等の歌ふ聲が微かに聞こえてくる、つゞいたり、切れたりして。

暫く間。

左手からエリオツトが、東印度商會の支配人ハミルトンと二人で話しながら出てくる。ハミルトンは五十歲近くででつぷりと肥つてゐる。二人ながら白服に白いヘルメツト。絕えずシガーをふかしてゐる。

エリオツト。實にすばらしい！　僕もこの地へ來てみるまでは、こんなとは思はなかつた。

ハミルトン。ぢや、君にマールワンや、ベナレスの栽培地を見せたいもんだ。

エリオツト。いや、實際たいしたもんだ。ここだけでも年一萬函ぐらゐできるでせうね。それとも…

ハミルトン。なに、二萬函は動かないところさ。

エリオツト。へえ、ぢや印度の阿片生産額は年十萬函ぐらゐ悠々たるもんですね。
ハミルトン。さうさ。外國の市場さへできりや、十萬が二十萬でも作つてお目に掛けるよ。ところで外國に市場を殖やすことは君たちの役目だ。
二人はヹランダに上つて、向ひ合つて掛ける。マクドナルドはやはり眠つてゐる。
ハミルトン。（笑ひながら。）マクドナルドさんの眠る事つたら！　この人はここへ來てからおほかた眠つてばかりゐる。
エリオツト。僕なんかもさうだが、支那から久しぶりであなた方の中へ歸つて來たら、急に故國へ戻つた樣にほつとしてしまつたんですよ。マクドナルドさんもあちらでは、隨分苦勞したんですからね。
ハミルトン。そりやあ君、お互ひに故國を遠く離れて、かうして、未開の天地へ來て奮鬪するのは實に愉快でもあるが、またなか／＼容易な苦勞ぢやないよ。
エリオツト。まつたく、獨特の殖民地的勇猛心、乃至は冒險心が無くちやできないことですよ。くにぢや唯僕らが殖民地で勝手な面白い事ばかりしてるやうに考へてますがね。
ハミルトン。はゝはあ。（急に調子を變へて、）ところで、さつきの話だがね、支那の市場が最近あんな風にならなかつたら、今年からうんと増資をやつて、阿片の生産額を倍にするつもりだつたのだ。近年支那への輸出は全くすばらしい勢ひで上昇してたからね。しかし困つたものさ、當分は増資ど

ころか、大部分は中止しなくちやならぬかも知れん。

エリオツト。そりやあ一時的の事ですよ。少しも前途は悲觀するに當らないですよ。

ハミルトン。そりや、勿論さうだ。

エリオツト。正直な所、僕はさつき栽培地を見て歩きながら、實に我々の責任の大きいのを痛感したんです。もし支那で我々が長年かゝつて築きあげて來た大市場を失ふやうな事があつたら！ それこそ實に大英帝國の繁榮に關する大問題だ。我々はいかなる事があつても支那の市場を確保するだけでなく、もつと大々的に擴大しなくちやならん。

ハミルトン。そして我々は其をする事ができるんだ。之迄もアフリカや印度でやつてきたやうにね。

エリオツト。さうです。そして支那の場合について云へば、現狀打開策としては、唯一つの方法があるだけです、――戰爭だ！

ハミルトン、(冷淡に。) そりや、いつの場合だつてさうだ。

エリオツト。そして我々が戰爭以外に取るべき手段が無いと考へる時には、それだけでもう開戰の理由は立派にあるといふものだ。

ハミルトン。(マクドナルドを振返りながら思はず聲をひそめて。) 君、大きな聲ぢや云はれないがね、未開國でもしわがイギリスの宣教師が二人以上殺されたら、それだけで充分開戰の口實にできるん

だ。支那では、――まあ、我々の親愛なマクドナルドさんはかうして無事に戻つて來られたが、――殺された宣教師は二人や三人ぢやない。それに、宣教師以外にイギリス人で殺されたものも多いんだ。有難い事に、開戰の理由には苦しむ必要が無いさ。

エリオツト。唯こゝで問題になるのはですね……

エリオツトとハミルトンは頭をよせてこそ〱密談に入る。

女奴隸は相變らず風を送つてゐる。

印度人の給仕が飲物を運んでくる。そして一通の大封筒をエリオツトに渡して去る。

エリオツト。（默つて封筒をハミルトンに示し、急いで封を切る）

ハミルトン。ほう、本國政府からだね。

エリオツト。僕がさきに支那の狀勢を報告して置きましたから、その返事でせう、多分。

ひと通り急いで目をとほす。

ハミルトン。何ていふんだね。

エリオツト。默つて手紙を相手に渡す。ちよつと暗い顔をしてゐる。）

ハミルトン。（受取つてよむ。）

「ヸクトリア女皇陛下の政府は、イギリス商人を援けて、通商國の法律を破らしむるが如き不正なる處置を爲すこと能はず。ゆゑに、もし清國政府が國法を實行する事によつて、イギリス商人

が損害を蒙ることありとも、もとより自業自得の事にして、みづから負擔の責めを負ふべきのみ。」

ほゝう。メルボルン首相の署名があるね。

暫く間。

エリオツト。つまり、本國政府は我々を支持しないと云ふんですね。

ハミルトン。(冷靜に)この手紙を言葉どほりに取ればね。

エリオツト。本國政府だつて、我々の仕事が單なる個人的利害の問題ぢや無くて、大英帝國の東方發展の大事業だといふ事を知らない筈がないでせうにね。

ハミルトン。(聲高く笑ふ。)はつはつは。これをよんですぐムキになるなんて、君も殖民地政治家らしく無いぢやないか。君、これは勿論一片の外交辭令にすぎないよ。

エリオツト。…………

ハミルトン。それが君に分らないと云ふのかね。え?

エリオツト。そりや、さう思はれない事もありませんがね。

ハミルトン。さうだとも。勿論さうにきまつてるさ。(更に笑ふ。)

エリオツト。さういへば、東印度商會やイギリスの商人が、支那へ阿片を密輸出してる事を本國政府がずつと前から熟知してるんですからね。

ハミルトン。知らなくつてさ。

エリオツト。しかも本國政府はこれまで一遍だつてこれに喙を入れた事は無いんですからね。

ハミルトン。つまり、實際的には大いに我々を支持してゐた譯なのさ。

エリオツト。なる程、分りましたよ。

ハミルトン。はははあ、僕から見ると、君はまだ殖民地の仕事に經驗が淺いよ。君はまだ我々が仕事をする上に於て、一番大事なモツトーを知らないらしい。それはかうだ。

「わがイギリスは、特別なる一外國と貿易を行ふに當つては、その政府、及び輿論の反對に頓着することなくそれを斷行する權利がある!」

どうだ、分つたかね。

エリオツト。(微笑する。)なる程、あなたは確かに僕たちの尊敬すべき先輩ですね。

ハミルトン。早い話が、印度に於ける、わが東印度商會のやり方を見るがいい。君も知つてるだらうが、我々は初めから、一々本國政府の承認や了解のもとにこの土地を占領した譯じや無かつた。それどころか、政府は我々のする事なす事に難癖をつけて、事面倒になるといつも「これはわが英國政府の關する所に非ず」といふやうな聲明書を發してきたもんだ。それも君、無理はないよ。何と云つても政府は世界列國の手前、大英帝國の上品な威嚴を保たなくちやならんからね。それでもし

かし、本國政府が印度に於ける我々の政策や行動を積極的に妨害した事は一週でも無かつた。反對だ。しまひにはあらゆる方法をもつて積極的に參加してきたのだ。今になつて君、イギリスの誰が印度占領に於ける東印度商會の大功績を非認して、歴史の名譽あるページから抹殺しやうとするものかね。氣違ひか大馬鹿で無い限りはさ。

エリオツト。(默つて考へてゐる。)

ハミルトン。(非常な熱心さをもつて、)だから、我々は何も躊躇する事は無いんだ。君のいはゆる殖民地的勇猛心と冒險心とをもつて、まづ事を初めよだ。政府は何のかのと文句を云ふだらうし、議會では政治家が攻撃の雄辯を揮ふ機會を捕へるだらうが、構ふ事あ無い。事實こんな遠い外國にゐて、一々勝手の分らぬ政府の指令を待つてゐられる譯のもんぢや無いからね。要は、うまくやりさへすりや良いんだ。印度に於けるわが東印度商會のやうにうまくやる事さ。これで我々が戰爭をおつ始めて、支那をうまく片つけて見給へ、男爵とバス大勳位章はまづ動かないところだね。

エリオツト。(深い決意をもつて、)ハミルトンさん、本國政府が我々を支持しやうとしまいと、大英帝國の威嚴と將來の發展を考へれば、我々は今斷じて支那と戰爭をしなくちやならぬ。そして我々はその權利をもつてゐるといふ事は疑ふべからざる事實だと思ひますね。

ハミルトン。(愉快さうに兩手をあげて心から叫ぶ。)ブラボー! それある哉だ。だから我々は早速本部

へ戻つて、一切の計畫と準備を立てやう、そしてすぐにでもできるだけ多く黑ん坊を狩り集めて軍隊を作らう、――なあに黑ん坊なんか五萬や十萬殺したつて惜しくはないからね。そして早速軍艦にのせて、セイロンから廣東に向けて出發させやうぢやないか。

エリオツト。さう云へば、この前本國政府から英國の軍艦を廣東の川に入れないやうにしろ、とか注意してきてゐましたつけね。

ハミルトン。もう戰時だ。我々は北京のまん中へでもどし／＼軍艦を持ちこむさ、はつはつはあ。

ハミルトン。マクドナルドさん。やつとお目がさめましたか。隨分長い間天國の夢をお樂みでしたね。

マクドナルド。私、眠つて何か云ひましたか。

ハミルトン。いや、何にも。

マクドナルド。私は今夢の中で一生懸命に說敎してゐたんですよ。

ハミルトン。眠つてゐても、あなたは傳道の事ばかり考へてゐられるといふ事が分りますよ。

マクドナルド。何でもアジヤの廣い／＼高原で、聽衆が目の屆かないくらゐにいつぱい溢れてゐるんですね。そしてその聽衆といふのが、大部分は支那人と印度人で、外に色々なアジア人が交つてゐるのです。私は小山の上に立つて熱心に天國の福音を說いてゐました。聽衆も熱心に聞いてゐました。ところがどういふものか、その熱心な聽衆が片つぱしからつぎ／＼と眠つて行くんです。これ

はいかん、今ここで皆を眠らせてはいかんと思つて、私は一層声を励まして説教をやるんですが、一向に甲斐が無いんですね。ふと気がつくと、私の側にエリオット君が立つてゐて、私の顔を見てにや／＼笑つてゐます。それで、私はすぐにはゝあ聴衆がこんなに重い眠りに捕はれてゐるのは、エリオット君が阿片を持ちこんだからだと悟りました。で、私は今度はエリオット君に食つてかゝりました。するとエリオット君は相変らずにや／＼しながら、かう云ふんですよ。

「何にも心配しなさんな。みんな自由に眠らせて置きなさい。彼等をはつきりと醒まさせるために、もう一度ぐつすり眠らせる必要があるんです。」

この言葉に私はひどく感心しましてね、それじやあと再びアジヤの大衆を前に、熱心に説教をつづけましたよ。ところが、今度はしやべつてゐる私自身が眠くつて、眠くつて、どうにもならなくなつてきたんですね。それで、私が……

左手から印度人労働者がひさり逃げて走つてくる。そしていきなり躓づいてころぶ。巡査監督のイギリス人が鞭を振つて後から追つ駆けてくる。そして印度人を捕へて目茶苦茶に打つたり蹴つたりする。労働者は強ひて抵抗しやうとしないで、死なんばかりに苦しみ呻くばかりだ。ヹランダでは珍らしくも無いといふ風に出来事を眺めてゐる。マクドナルドだけ思はず立上る。

マクドナルド。（ハミルトンに、）これはひどい……これはどうした事だ……

ハミルトン。御心配には及びません、マクドナルドさん、ここは殖民地ですからね。

マクドナルド。一體あの勞働者が何をしたつてんでせう。まさかイギリス人を殺さうとした譯でも無いでせうに。

印度人は半殺しになるまで打たれたり蹴られたりする、最後にイギリス人は彼の耳をもつて左手へ引きづつて行きながらどなる。

イギリス人。さあ、持場へ行つて働け。またちよつとでも居眠りしやがつたら、今度は肋骨を叩き折つてやるぞ。

ハミルトン。(笑ひながら、)あいつは印度人を扱ふ事を心得てゐる!

エリオツト。(皮肉に、)マクドナルドさん。あなたは支那で一度ならず殺されかけた事があるじやありませんか。それだのに、ちよつとこんな場面を見ると、そんな事を忘れてしまつて、顏色を變へてゐられる。さすがにあなたは宗敎家ですね。

マクドナルド。(やつと腰をおろす。)もちろん、私は宗敎家ですよ。だから、例へ殖民地にしろ、例へまた彼等に誤りがあるにせよ……

ハミルトン。これでも僕が若い時分、アフリカのダイヤモンド坑で見たことに較べりや何でもありませんよ。あそこじや黑人が自分で見つけたダイヤモンドを、こつそり盜まうとして仕方が無いんです。耳の穴に入れたり、髮の中へ隱したり、時には呑んでしまつたりするんです。それで、こいつ

怪しいなと思つたらいきなり捕へて、生きた儘で腹を裂いて見るんです。さうすると大抵胃袋の中から大きなダイヤモンドがぴかぴかしながら出て來ますよ。

マクドナルド。へえ。生きたままで、……腹を裂くんですつて。ぢやその勞働者は死んでしまふでせうが。

ハミルトン。勿論死んでしまひますよ。はゝ。そのかはり立派なダイヤモンドが手に入りますからね。

マクドナルド。（靑くなる。）もし、生きた奴の腹を裂いてみて、萬一ダイヤモンドが無かつたら？……

ハミルトン。勿論そんな事だつて時々ありますよ。だが、それでも醫者は生きた人間を解剖するといふ滅多に得られない特點が得られる譯です。御承知でせうが、古代のアレキサンドリア學派以來、醫者にとつては人間を生きたまゝで解剖することは、大きい野心なんですからね。

エリオツト。（不意に立上り感激をもつて、）さうだ、我々は今武力でもつて支那の巨きな腹を斷ち割つて、隱れてゐるダイヤモンドを取り出さなくちやならん。ほんとにその中には、どんな豐富な寶があることでせうね、ハミルトンさん。

第二場

映畫で東洋の地圖と、英國の殖民地を示す。それからイギリスの軍艦が二隻、コロンボより、シンガポ

ールを經て、廣東を攻擊するところを出す。
軍艦と廣東の實寫ができれば、一番良い。

第三場

人物。　メルボルン、總理大臣。
　　　マコーレー、陸軍大臣。
　　　グレシアム、議員。
　　　ピール、議員。
　　　その他議長、議員多勢。

所。　千八百四十年四月に於ける、英國衆議院の議場。
右手に演壇があり、その上に議長席があり、うしろの壁にヴィクトリア女皇陛下の大なる肖像畫が掛かつてゐる。首相メルボルン、陸相マコーレー等大臣席に居並ぶ。
左手に議員席があり、その中にサー・ゼームス・グレシアム、サー・ロバート、ピール等が控えてゐる。

グレシヤム。（すでにもう一時間以上も熱辯をつづけてゐるのだ。）諸君、我々がすでに見てきたとほり、

今回の事件につきましては、惡いのはかの清國政府では無くして、實にわがイギリス政府である事は、最早、少しも疑ふ餘地が無いのであります（拍手喝采。）

數年前、千八百三十八年に、清國政府は早くも阿片貿易を法令を以つて嚴禁してをります。わが政府にして、もし一片の信義を重んずる心があるならば、その時直ちに清國政府に向つてわが密輸出者の取締りを委託すると同時に、イギリス政府も充分力をつくして、取締まるのが至當でありま す。例へさうまでの手段を取らないとしても、いや、それだけの取締りをなし得ないとしても、わが政府は密輸商人の如き無辣卑賤なる輩とは斷然關係を絕つて、彼等がその不正極まる貿易の上からいかなる損害を蒙らうとも、全然顧るに當らないのであります。（拍手）しかるに、現政府の優柔不斷なるや、時に彼等を放任するかと思へば、時にまた彼等を保護するといふ有樣で、清國に於けるわが當事者をしてイギリス政府の意のあるところを知るに苦しましめたのであります。これこそ今日この事件を惹き起した大原因でありまして、これを現政府の大失態と云はないで何と云ひませう！　メルボルン内閣にして一片の良心あらば、よろしく責任を負ふて、處決すべきであらうと余輩は信ずるのであります。

割れるが如き拍手大喝采。グレシアムは汗を拭きながら得々として降壇。

議長。總理大臣メルボルン氏。（一部の間に余り盛んならざる拍手起る。）

メルボルン。（水を飲みながら、悠々迫らざる態度をもつて、）諸君、堂々一時間にわたるグレシアム君の演説を拝聴致しまして、いろ／＼と得るところ多かつたことを、本大臣はまづ感謝したいと思ひます。同時に氏の演説が、用意周到なる科學的根據に立てるものとは不幸にして云ひ得ないにしても猶言々句々が、氏の熱誠なる人道的正義心の現はれで無いものは無いのに對して、本大臣は實に深い感銘を受けたといふことを敢て公言するものであります。

　ところで諸君、グレシアム君はこの事件をあくまで人道上、徳義上の問題として扱はれたのでありますが、果たしてそれは妥當と云ひ得るでありませうか。それについて本大臣は全然反對の見解をもつてゐるものであることをまづお告げして置きたい。

　賢明なる諸君。清國政府が阿片の賣買を徳義上より禁止しやうとしたとグレシアム君が云はれましたが、それは單に口實にすぎないと本大臣は斷言します。事實清國政府が徳義上よりさうするのだとすれば、彼等はまづ何故に支那内地に於いて阿片を栽培する事を許可してゐるのでありませうか。諸君も知つてをられるでありませうが、支那内地ではそれは公々然と行はれてをります。そこでは少しも徳義のことなぞ問題になつてゐないのであります。

　それからまだグレシアム君は、何かにつけて「大害ある阿片」といふ言葉を盛んに使はれましたが、これもまた氏の熱誠なる正義感によつてくらまされた、獨斷論では無いかと考へるのでありま

す。これについてはもとより諸説さまざまでありませうが、少くとも本大臣の知る限りに於きましては、阿片は淸國政府もつねに誇張して唱へるやうな、そんな恐ろしい大害があるものではありません。よしや、淸國にとつて多少の害があるとしましても、ブランデーや、ウヰスキーや、ジン酒の類がわがイギリスに與へる害よりも、遙かに少ないものであると承知しております。（冷笑、くすくす笑、輕い罵倒起る。）隨つて阿片禁止の問題と德義上の問題とを、强ひて混同して考へる必要は無いのであります。

では、問題の核心はどこにあるのであるか。外でもない、一面に於いては淸國に於ける貨幣濫出の問題であり、他面に於いては農民保護の問題なのであります。つまり阿片の利益をイギリス人に獨占させて銀を濫りに外國へ流れ出させる事を防ぐと同時に、淸國の農民を阿片栽培によつて救助しやうとする經濟上の問題なのであります。諸君、冷靜であるべき政治家が、かくの如き經濟上の問題に根を置く今回の事件を、單なる人道的正義心より批判するとしたら、――いかにそれが熱烈至純なるものであるとしても、――その愚や笑ふべきでは無いでせうか。（弱き拍手。）

賢明なる諸君、要するに我々はあくまで冷靜になりませう。そしてかゝる經濟的政治的見地に立つて事件を批判しませう。さうすれば、諸君も直ちに淸國との戰爭の避け難いことを承認されるでありませう。そして本内閣がここに提案したほうゝ大なる軍事豫算も喜んで、滿場一致をもつて可決

されるでありませう。本大臣は衷心よりそれを希望し、かつ期待するものであります。（降壇。弱き拍手に送られて大臣席にかへる。）

グレシアム。議長、サー・ジエームス・グレシアム

議長。ジエームス、グレシアム君。

グレシアム登壇。盛んなる拍手。

グレシアム。唯今メルボルン首相のお言葉によりますると、清國に於ける阿片禁止令は德義上の問題では無いとの事でありますが、それならそれで宜しいのであります。然し、であるからと云つて、わがイギリス政府はわが國の商人に清國の禁令を犯させても差支へないといふ事になるのでありませうか。斷じて否であります。（拍手。）他國がひと度人民保護の必要上から或る法令を發布したとすれば、イギリスはまた一個の道義ある國家としてそれを重んずる國際的義務があるのであります。然るに奸惡なるイギリス商人は、清國の阿片禁令を犯して、つまり不正なる手段によつて莫大な利を占めたのであります。これでも今回の悶着についてイギリスの方が惡くないといふことができるでありませうか。（拍手。）

更に一つの卑近なる例を取らせて頂きませう。諸君も御承知のやうに、アメリカ合衆國のメーン州に於きましては、酒類の通常販賣は嚴禁されてをります。そこで、假りに、我がイギリス商人が

そのメーン州で、各地の都會に酒造場を作つて、ビールやウヰスキーを作つたとしませう。そしてメーン州の法律を無視してこれを公衆の間に密賣したとしませう。そしてそのために、州の當局者が法律に照らして、わがイギリス商人を犯罪者として處分したとしませう。この場合、わがイギリス政府は、酒の密賣者を保護するために、メーン州に向けて鋼鐵艦を送るでありませうか。否々、わが政府は斷じてかかる無法な處置を取らないでありませうし、我々イギリス人は決してさやうな處置を許して置きはしないでありませう。これは云ふを待たない明々白々たる事であります。

それでは、アメリカ合衆國のやうな國に對しましては、いかに思慮のない現內閣でも國交上の禮節を守りはするが、これが一旦支那の事になりまするといふと、わが政府はその是非を問はないでいきなり戰爭を開始しやうとするのであります。かくの如くして提出せられた軍事豫算に對しましては、本議員はこゝにゐられる大部分の議員諸君と共に、絕對に反對の意を表するものでありまます。

グレシアム降壇。滿場割れるが如き拍手大喝采。軍事豫算は到底議會を通過しさうも無い形勢。

議長。陸軍大臣、マコーレー氏。

マコーレー一部の拍手に送られて登壇。

マコーレー。（單純率直に、）諸君。本官は諸君と一しよに、阿片を密賣することの不可を認めるもので

あります。これについては最早何の疑ふところもありません。だからこそ、現政府はこれを廢絶させるためにできるだけの方法を取つてきたのであります。この點は諸君もまた諒とせられるでありませう。（ノー、ノーの叫び。）

併し、支那の事と云へば、何しろ東西萬里を隔ててをります。隨つて事毎に指令を與へる如きは到底できない事でありますし、また强ひてもそうする必要はないと考へたのであります。でありますから、政府としては唯大體の方針を示すに止めて置いて、枝葉の問題はすべて當事者に一任したのであります。我々はロンドンにゐて、遠い印度を支配する事はできません。印度の事務は大體その地に於いて處理しなければならぬ事は、諸君もまた御承知であります。かくいふ本官は、暫く印度にゐた事がありますので、自分の經驗からして一層直接にそれを知つてをります。印度に於いて既にさうだとすれば、支那に於いてもやはりさうだと云はなければなりません。しかも、わが政府は廣東領事エリオット君に向つて、女皇陛下の政府はイギリス商人を援けて、通商國の法律を破らせるやうな不正な處置はできない、だから淸國政府が國法を實施する事によつて、イギリス商人がどんな損害を蒙らうとも、自分で責任を負ふべきであると明言したのであります。然るにエリオット君その他はこの訓令を守らうとしないで、つひに今日の事件を惹起したのであります。ともあれわが政府は當然盡すべきを充分につくして、（そんな指令一枚で！といふ彌次が入る。）今日に到つたの

でありまして、その間何の非難を受くべきものはないのであります。

しかも諸君、こゝに非常に重大なのは、我々がこの議場に於いて、すでに三日間に亘つてこの問題を討議してゐる間に、印度と支那にあるわがイギリス人と、清國政府との間にもう戦争が開始されたといふ事實であります。戦争はすでに開始された。この際我々はいかなる態度を取るべきでありませうか。わがイギリス商人の非を並べ立てゝ、全然放任すべきでありませうか。

それは最早云ふを待たない事であります。我々は一刻も早く軍事豫算を可決して、直ちにイギリス軍隊を派遣し、同胞を助けなければなりません。もしそれをしないとすれば　第一に、わが光輝ある大英帝國の威嚴をどうしませう。第二には、在外同胞の危難を無視する事になります。それは我々イギリス人として到底堪へ得ないところであります。

さらに一言附加して置きます。支那人は我々イギリス人を野蠻人としか呼ばないのであります。随つてその態度はつねに傲慢無禮でありまして、かつてマカトニー卿が使節として支那に赴かれた時の如きは、文字の通じないのを幸ひとして、わが使節の船に「イギリス人貢物を持ち來る」と大きく張紙をしたものであります。加ふるにイギリス人をして支那式の卑屈極まる禮拜をさせるやうに強要したものであります。殺された宣教師もまた二三に止まつてはをりません。かくの如き國民的侮辱を我々は今日まで忍んできたのでありますが、諸君は今度もまた清國政府を意のまゝに振舞

はせて、あらゆる侮辱を忍ぶ覺悟でゐられるのでありませうか。

マコーレー降壇。

議場動搖する。我も〳〵と發言を求めるものが多い。

暫く間。

議長。サー、ロバート、ピール君に發言を許します。

ピール滿場の拍手の中に登壇。

ピール。（猛烈なる身振をもつて、）諸君、我々は、この軍事豫算の問題を中心にして、すでに三日に亘つて激烈なる討論を戰はせてきました。そして大勢は明らかに政府に不利なるかに見えてをります。かくいふ私も、政府反對の先頭に立つて今日まで戰つて來た事は、諸君の見て來られたとほりであります。

然し、諸君、我々今大いに考へなければならないのではないかと思ひます。といふのは、先刻マコーレー氏も云はれたやうに、支那とイギリスの間にはすでに戰爭が開始されてしまつたといふ事實であります。正直な所、私もこの間から軍事豫算反對で熱心に戰つてきたのでありますが、この事實から寸時も心が離れた事が無いのであります。云へかへれば、いかに軍事豫算に反對したとは云へ、私は內心で戰爭の避け難い事をはつきり知つてゐたのであります。恐らくこれは私一人の心

理では無くて、こゝにゐられる議員全部の心理であらうと信ずるのであります。

諸君、我々はわがすぐれた先輩フォックス君の事を思ひ出さうぢやありませんか。諸君も知つてゐられるやうに、彼はいつでも熱心なる非戰論者でありました。彼の議會に於ける戰爭反對の演說は有名なものであります。殊に對佛戰爭に際しては、彼は政府の斷乎たる敵でありました。しかもその彼が、愈々開戰止み難しと知るや、直ちに、その日のうちに立場を變へて政府を支持して、軍事豫算に承諾を與へたのであります。

諸君、我々はすでに充分討論をつくした。諸君の公平なる正義的立場は世間すでに周知の事實となつた。この上は、諸君、我々はかのすぐれたるフォックスの例に倣つて、直ちに政府を支持し、軍事豫算に承諾を與へやうじやありませんか。

議場烈しく動搖する。あちこちに同意の叫びあがる。形勢急變する。

ピール。（つゞける。）諸君。我々は正義と理想にはあくまでも忠實でなくてはなりません。しかも政治家としてはあくまで現實的でなくてはなりません。そしてわがイギリスと支那との戰爭こそ、現在もつとも重大なる現實の問題なのであります。諸君、我々はイギリス人たる名譽を棄てる事は絕對にできません、同時に女皇陛下の忠良なる臣民としての義務を忘れることもできません。この上は我々は完全に一致してメルボルン政府を支持し、直ちに精銳なるイギリス軍隊を派遣して、かの傲

慢無禮なる清國政府を懲らしめやうぢやありませんか。

議場沸騰する。一般的同感の形勢。

ビール。（つゞける。）諸君、我々はすでに充分論議しました。そして今や何をなすべきかをはつきりと見ました。これ以上なほ討論に貴重な時間を費す必要があるでありませうか。（必要なし、の叫びあちこちに上る。）然らば議長は直ちに決を取られるのが至當だと存じます。

議員たち。贊成、々々、々々。

ビール降壇。活氣づいた盛んなる拍手。

議長。唯今ビール君から、直ちに決を取るやう提議されましたが、皆さんこれに異議ございませんでせうか。

議員たち。異議ありません、贊成であります。

議長。では、決を取ることに致します。軍事豫算可決に贊成の方は御起立を願ひます。

議員は一人殘らず起立する。グレシアムまた起立する。

議長。軍事豫算は滿場一致をもつて可決されました。

議場に歡聲湧く。ひとりでに萬歲の聲あがる。

——ヴィクトリア女王陛下萬歲！

――大英帝國萬歲！

第四幕

第一場

人物。サー、ヒユー、ゴフ、征清軍司令官。
パーカー、水師提督。
イギリス將校數名。
イギリス軍隊多勢。（印度人の傭兵が多く交つてゐる。）
支那將校數名。
滿洲兵多勢。
オランダ將校二名。（支那軍に雇はれたる砲術長。）

時。千八百四十一年五月二十四日、（ヰクトリア女皇卽位四週年記念日。）

所。丘の上なる支那軍の砲臺。

舞臺の大部分は砲臺の內部を示す。大砲を二門、左手に砲口を向けてゐる。

右手下には平原と珠江があり、そこで數隻の英艦と支那の艦とが戰つてゐる。同時に河岸から支那軍が應援してゐるのであるか、こゝからは何にも見えない。唯絶えまなく大砲の轟きと、小銃の音と喚聲とが聞えてくる。但しこの砲臺はまだ攻撃されてゐない。

砲臺の上には支那の旗が、鮮やかな朝の光の中に翻つてゐる。

滿洲兵は砲臺から戰場の方をみやりながら、昂奮した早口で話し合つてゐる。

――白鬼の奴ら、何と思つたかけさ一せいに攻撃を始めやがつたぢやないか。

――己たちをひと揉みに揉みつぶさうつて譯なんだらう。

――畜生、まだ滿洲兵の威力を知らんと見えるな、赤猿どもは。

――己たちの方の船は一向玉を打たんやうだな。どうしたんだらう？

――英艦の大砲からばつかり煙が出てるぞ？

――なあに、何にも心配する事は無いさ。へん、憚りながら清國第一の砲臺だ。この砲臺さへありや外がどうならうと恐れる事は無い。この砲臺だけはイギリス兵にも手をつけさせるもんか。

――さうだ、オランダの技師にたのんで、うんとこさ金をかけて、多ぜい人を死なして、長い年月をかけてできたんだ。さうやす〳〵取られないぞ。

――さうよ、いくらイギリス兵がこゝを目がけて突貫して來たつて、こゝから大砲と小銃をぶつ放

しや一歩でも近よれるもんか。絶對安全といふものさ。

——もどかしいなあ、早く大砲をぶつ放してやりたいなあ。

支那將校一名と、オランダの傳通手の二名とが、砲壘の側で双眼鏡で川の方を眺めながらしやべつてゐる。

オランダ人A。おや、河岸にゐた支那兵が筏のやうなものを幾つも川へおろしてゐるぞ。あれで何をしやうつてんだらう？

オランダ人B。あれに乘つてイギリスの船へ乘りこまうといふのかな。

支那將校。（得意さうに。）あれはわが軍の巧妙な作戰ですよ。

オランダ人A。英艦があんなに攻擊してるのに、支那側がちつとも應戰しやうとしないのも變ぢや無いか。

支那將校。（やはり得々として。）まあ見てゐ給へ、あの火の筏がみんなイギリスの軍艦に流れついて、見るまに敵の船體が燃え上つてしまふから。

オランダ人は互ひに呆れた顔を見合はせて默つてゐる。

滿洲兵もやはり口々にしやべつてゐる。

——おい、見ろ、イギリスの船がボートをおろし始めたぢや無いか。

――畜生、上陸しやうとするんだな。

――おや、どの船でも續々ボートをおろして、赤猿がどし／＼乘込んでやがる。

――なぜあいつらに大砲を喰らはせないのかなあ。

オランダ人A。見給へ、火の筏が流れ出したぞ。

オランダ人B。あれが側へ流れついたとして、船が焼けるかどうか見ものだぞ。

支那將校。ほうら、イギリスの奴等は船を焼かれるのを恐れて、續々ボートをおろして逃げ出したぢやないですか。

オランダ人B。おや、變だぞ、火の筏がイギリス船の方へ流れて行かないで、却つて支那船の方へ流れて行くぢやないか。

支那將校。（青くなつて叫ぶ。）こりや一大事だ。これぢや味方の船が焼けてしまふ！

オランダ人A。河岸の支那兵が逃げ出した。

オランダ人B。それにイギリス兵がどし／＼上陸し出した。こりやいかん。

オランダ人二人で何事かこそ／＼さゝやき合ふ。そして人ごみに紛れてそつと姿をくらます。

この時不意に砲臺の上で一個の砲彈、爆裂する。同時に數名の淸流兵が倒される。

烈しい興奮と狼狽が支配する。

支那將校。（劍を振りまはしながら、）やあ、イギリス兵がこゝを目がけて押寄せてくるぞ。さあ、みんな部署につけ、射撃しろ。イギリス兵を一人でも打ち漏らすな。

砲臺のまはりに絶え間なく炸裂する砲彈の爆音、滿洲兵の小銃を連發する音。

支那將校。大砲だ。大砲だ。砲手はみんな大砲の側へ集まれ。それからオランダ人は？　オランダ人はどうした。

――たつた今そこにゐたぢやないか。

――おい、オランダ人、オランダ人、いよ〳〵大砲だぞ。

――見えない、二人とも見えない。

――怖氣ついて隱れやがつたな。

支那將校。（激怒する。）この機に及んで逃げ隱れするとは何事だ。あいつら己なんかよりずつと月給が多いんだ。月三十斤づつ貰つてるんだ。みんなして探し出して引ずつて來い！

――ゐません、どこにもゐません。

――逃げたに違ひありません。

――赤猿の仲間はみんなこれだ。

支那將校。（大砲のまはりをいら〳〵して歩きまはる、）さあ困つた。オランダ人がゐないとすると誰が大

砲を打つんだ。己はまたどうしたら丸が打てるかまるで分らん。おい大砲を打てる奴がゐないか。ゐたらイギリス兵を目がけてどん〳〵ぶつ放してくれ！

支那兵が二三名づゝ大砲のまはりへ集まる。そして無暗に弾丸を押こんだり、出たらめに砲身を動かしたり大騒ぎする。

——それをこつちへ廻すんだ。
——いや、さうぢやない。
——早く火をつけろ、火を。
——危ないぞ。
——これがちつとも動かないんだ。

支那將校。（青くなつてどなり立てる。）貴様たち何をぐず〳〵してるんか。早く大砲をぶつ放せ。一發について一兩づつ賞金を出すぞ。さあ、打てつ！

いら〳〵して焦つてみるが、結局丸が出ない。敵の砲撃はます〳〵盛んになり、支那兵相ついで倒れる。

——駄目だ！
——どうしても丸が出ない。
——この上はもう小銃で一せい射擊だ。

不意にイギリス兵の一隊が右手、即ち支那兵の背後より突撃して現はれる。つゞいて、砲臺を乗りこえて英兵が乗りこんでくる。イギリス兵の中には多くの印度人が交つてゐる。

暫くの間混戰がつゞく。支那兵の多くが殺され、一部は右手へ敗走する。かくして砲臺は忽ち英兵に占領されてしまふ。

支那の旗が引ずり下ろされ、かはりにイギリスの旗が上る。そして兵士は旗を仰いで一せいに萬歳を叫ぶ。

――ヸクトリア女皇陛下萬歳！

――大英帝國萬歳！

――イギリス陸海軍萬歳！

砲撃止む。唯遠くから小銃の音と、喚聲が聞こえてくる。

暫く間。

征清軍司令官、サー・ヒユウ・ゴフと、水師提督、サー・ウヰリアム・パーカーが數名の幕僚を從へて現はれる。前者は六十二歳、後者は六十歳、いづれも緋羅紗の服に白いヅボンをつけてゐる。

イギリスの軍隊は直立不動の姿勢をもつて迎へる

ゴフ。みんな御苦勞ぢやつた。予は諸君の勇敢さを滿足に思ふぞ。

パーカー。諸君の手柄は早速女皇陛下にお傳へするつもりぢや。

　　彼等は双眼鏡であちこちを眺める。

幕僚一。支那兵は到るところ敗走してゐるやうであります。

パーカー。これは愉快ぢや。支那の船に自分が流した火の筏が燃え移つて盛んに焼けてゐるわい、は
はゝ。

幕僚二。支那人といふ奴は實に奇妙な頭の持主でありますな。

ゴフ。けふの戰況を聞きたいものぢや。大隊長はゐるか。

大隊長。はつ、こゝに控えてをります。

ゴフ。どうぢや、支那兵は頑强に抵抗しをつたか。

大隊長。はつ、なか〳〵頑强に抵抗しました。

ゴフ。わが軍の死傷者はどれ位かな。

大隊長。分明しましたところでは、兵卒二十名ばかりであります。それも大部分は黒ん坊で、イギリ
ス人はほんの少しであります。將校は私が右手に微傷を受けたばかりであります。

パーカー。分捕品はどれくらゐぢや。

大隊長。大砲七門、小銃三百以上。捕虜千名以上であります。（間）捕虜はいかゞ處分致しませうか。

ゴフ。そんな事を聞く奴があるか　適當に處分せい。

大隊長。はつ。

　　幕僚一がゴフ將軍の耳元に口を寄せて、ちよつとさゝやき合つてから、

幕僚一。捕虜二名だけこゝへ連れて來給へ。

大隊長。はつ。

　　大隊長二名の部下をつれて右手へ去る。やがてうしろ手に縛られた支那兵が二人連れて來られる。二人の辮髪はつなぎ合はされてゐる。

　　捕虜はゴフとパーカーの前に引すえられる。彼等はぶる／＼震えてゐる。

捕虜甲。どうぞ命をお助けを！

捕虜乙。命だけは助けて下さい、私には女房も子供もあります。

捕虜甲。私には年取つた兩親があります。（二人は泣き出す。）

幕僚一。こらつ、顔をあげい。貴樣たちはこゝにゐられるお二人を誰か存じてをるか。

捕虜乙。存じてをります。イギリスの偉い王樣に違ひありません。

捕虜甲。王樣でなければ、偉い大將樣であらせられませう。どうぞお助けを！

幕僚一。では、云つて聞かせてやらう。よく聞け。こちらにゐられるのは、征清軍司令官ヒユ、ゴフ

閣下だ。勇敢無類で有名な將軍だ。お若い時には、アフリカで戰爭をなさつて、黑ん坊を何萬人となく殺されたお方だ。殊に希望峰の戰ひでは、御自身深手を負ふてゐながら。敵軍の中へ驅けこんで、群がる黑んぼを片つ端から斬つてしまはれたものだ。それから印度でも、何十遍戰爭をなされたか分らない。支那兵なんかより十倍も强い印度人を何萬人となく刺し殺して、大手柄を立てられたこと數知れないのだ。そのため印度人は赤ん坊に到るまで、ゴフ將軍の名をきいたゞけで、震え上つてしまふといふ恐ろしい偉い方だ。みんな閣下を鬼將軍と外云はないのだ。

捕虜甲。
捕虜乙。}どうぞお助けを、鬼將軍さま！

幕僚一。それからこちらにゐられるのは、水師提督パーカー閣下だ。これもゴフ將軍に劣らない勇猛並びないお方だ。この方もこれまでアフリカや印度やマレー半島で戰爭をされた事は數が知れないしかも一遍でも負けられた事がないのだ。この方の手にかゝつて殺されたアフリカ人や印度人の數は何十萬と云つてもよい。この方はいざ戰爭となつたら、敵をみな殺しにしてしまはねば置かないのが流儀なんだ。かよわい女や子供でも決して容赦はされないのだ。

捕虜甲。
捕虜乙。}（いよ〳〵震へる。）どうぞお助けを。

幕僚一。このお二人がどういふお方か、これで分つたらう。かういふ神のやうな恐ろしい偉いお方がわがイギリスの何百萬といふ陸海軍を指圖してゐられるのだ。どうだ、見ろ、戰爭が始まつてからもう一年にもなるが支那兵は一遍でも勝つた事があるか。貴樣たちは一年間負けつゞけたぢやないか。わが軍が厦門（アモイ）を攻め落し、定海を攻め落し、寧波（ニンポー）を攻め落し、陸海軍到る所で大勝利を得た事は貴樣たちだつて知つてるだらう。そこへ今度さらにこのお二人が新たに勇敢無比なるわが數百萬の陸海軍を指圖して戰爭されるんだ。アフリカや印度で敵軍をみな殺しにされたと同じやうに、支那兵がみな殺しにされるのも間がないぞ。どうだ、分つたか。

捕虜甲。
捕虜乙。 } 分りました。どうぞお助けを！

幕僚一。宜しい。特別の慈悲をもつて、貴樣達二人だけの命は助けてやる。有難く思ふがよい。そのかはり、いゝか、これから貴樣たちは支那軍隊の中や廣東の町へ行つて、今わが輩が話した事を云ひ擴めろ。ゴフ閣下やパーカー閣下の恐ろしい偉い將軍であることを皆に話して、一日も早く降服しないとみな殺しにされてしまふと云ひ振らせ。それをやればすぐに放してやる。どうだ。

捕虜甲。やります。どんな事でもやります。

捕虜乙。みんなにそのやうに云ひふらします。支那兵がすぐに降參することは請合です。どうぞお助

けを！

幕僚一。よし、許してやる。おい、二人の繩を解いてやれ。

　　二人の兵士捕虜の繩と、結はへられた辮髪とを解いてやる、支那兵喜びのあまり涙を流して三拜九拜
　　する。

幕僚二。おい、ついでにお前たちはこの二人を安全な所まで連れてつてやれ。途中で殺されるかも知
れんからな。

　　二人の兵士は二人の支那兵を連れて右手に去る。

ゴフ。（パーカーを顧みて。）はゝは、わしらは支那へ戰爭をしに來てるんだが、氣散じの旅に來てるん
だか分らんね。

パーカー。全くぢや。どうもあんな奴等を相手ぢや手應へが無さすぎる。インド人やアフリカ人の方
が戰爭するにはずつと手强いが、そのかはりずつと面白いね。

幕僚二。閣下、この勢ひでは廣東を占領するのもうひと息であります。

ゴフ。さうぢや。さう云へばけふはヰクトリア女皇陛下即位四週年記念日ぢやつたな。わしらはめで
たい勝戰で立派な記念をしたわい。

第二場

人物。　海齡、廣東都統。
　　　　彼の妻。
　　　　支那兵、（滿洲兵）多數。
　　　　イギリス兵多數。（やはり印度人の傭兵多く交つてゐる。）

所。　廣東なる北門の廣場。

北門は今炎々と燃えてゐる。
廣場には支那兵の死體が散亂してゐる。大砲の轟き、小銃の音、喚聲聞ゆ。
初め舞臺には誰れもゐない。

暫く間。

海齡、二十人ばかりの支那兵を引連れて左手より現はれる。惡戰苦鬪して皆傷つき疲れてゐる。

海齡。もう四方八方イギリス兵に取圍まれてしまつた。殘念だが、もう、これまでだ。この上は一人でも多く敵を斬り殺して、枕を並べて討死するばかりだ。おい、話したい事がある。みんなわしの

まわりに集つてくれ。

支那兵皆ぐるりと彼を取卷く。

海齡。さうだ。その前にわしは賴みがある。恥かしい話だが、この際になつてわしは女房と二人の子供の事が氣にかゝる。誰かわしの家へ行つて、その事を女房に話して、一刻も早く田舍へ落ちのびるやうに云つて貰ひたいものだ。できれば女房を助けて逃かしてやつて貰ひたいのだ。

支那兵一。私が參ります。

支那兵二。私に行かせて下さい。きつと奥さんとお子さんをお助けします。

海齡。ぢや、お前行つてくれ。さうして女房にかう告げてくれ、海齡はもう二度とお前に會へないだらう、しかし彼は最後まで戰ふだけ戰つた。お前はどうか生きのびて子供たちを大事に育てゝくれ。

支那兵二。必ずそのやうに申します。

支那兵二は右手へ驅けて行く。

海齡。さあ、これで良い。（兵士に向つて、）わしはこれまで必死に戰つた。お前たちも實によく戰つてくれた。わしは心からお禮を云ふ。だが、運拙くしてわしらは敗北した。しかしこれは支那兵の徹や勇氣が缺けてゐたからではない。そんな事は決して無い。唯不幸にしてわしらはイギリス兵の立派な武器に叶はないのだ。あいつらは實際ふしぎな、魔術のやうな器械をもつてゐる。この上は最

後の力を傾けて、國家のためにこの恐ろしい武器ともうひと勝負しやう。そしてみんな一緒に討死しようぢやないか。

兵士たち感動してうな垂れてゐる。中には涙を流すものもゐる。

海齡。敵の武器について、ひとつわしの發見したことを話してやる。イギリス兵が發砲する時、よく銃口を注意してみるがいゝ。白い煙が出る時と、黑い煙が出る時がある。白い煙のときは空砲で、音ばかりだ。少しも恐れるに當らない。黑い煙が出る時は、きつと實彈だ。だから黑い煙を見たらお前たちはすぐ地べたへ腹ん這ひになれ。さうしたら丸がお前たちを飛びこえて行つてしまふ。分つたか。

兵卒一同。分りました。

海齡。では、一緒にもう一度敵の中へ斬りこまう。さうだ。その前にお前たちにやるものがある。(ふところから袋を取出す。)これは先祖傳來の貴い靈藥だ。戰ひに臨む前にこれを一粒づつ口に含むと、急に元氣になつて、膽氣がすわり、勇氣が湧いてくるのだ。これをお前たちに分けてやるから口に含むがいゝ。

海齡兵士の一人々々に丸藥を一粒づゝ分けてやる。兵士たち喜んで口々にそれを含む。

海齡。(刀を振り翳して、)さあ、みんな用意は良いか。

海齡の若く美しき妻、幼兒を抱きて右手より慌て、驅けて出る。

海齡。あ、お前ぢやないか。どうしてこんな所へ來たんだ？

妻。唯今お使ひを頂きました。上の子はすぐあの兵隊さんに負ぶはせて、親類の家へあづけましたから御安心なされませ。あれはまた立派に成人してきつとあなたの後を嗣ぐやうになりませう。

海齡。さうか、それは良かつた。だが、お前はこれからどうしやうと云ふんだ。北門はあのとほり燃えてゐる。敵は八方から迫つてゐる。早くどこかへお隱れ。

妻。いゝえ、私の事は決して御心配には及びません。この赤ん坊はまた、私の好きなやうにさせて下さいませ。

海齡。何を無茶な事を云つてるんだ。ほら、あそこへイギリス兵が押寄せて來るのが見えないのか。危ない、丸だ！　早く逃げろ。

妻。いゝえ、私は逃げやうとは思ひません。逃げればすぐ野蠻人に捕へられて、辱しめを受けるにきまつてゐます。それよりもあなたがこの大事の瀬戸際になつて、まだ妻子のことを心に掛けていらつしやるのが悲しいのです。あなたは武人です。私どもの事なぞ少しも氣にしないで、あくまで勇敢に戰つて下さいませ。そしてこの廣東を決して敵の手へ渡さないで下さいませ。さあ、私は、このとほり。

さう云ひ終ると同時に、彼の妻は兒を抱いたまゝ、燃えさかる北門の焔の中へ飛びこんで死ぬ。

一同呆氣に取られてゐる。

海齡。（やつと我に返り、憤然となる。）さあ、憎みても餘りあるイギリス兵、かうなればもう國の仇と云ふだけではない。妻子の仇だ。一人でも多く殺してくれやう。さあみんなわしに續いて來い。進め！

海齡兵を率ゐて左手へ突進する。

暫くの間舞臺空虛となる。

銃聲、喚聲まぢかに聞こえる。

海齡、及び殘兵四五人、イギリス兵に追はれて左手より出てくる。大低のものはもう負傷してゐる。

海齡。もう最後だ。この上は妻子の後を追ふばかりだ。

後は駈けて北門の焔の中に飛びこんで死ぬ。イギリス兵殺倒する。支那兵は一人殘らず殺されてしまふ。

第三場

人物。伍榮紹

余寶仁、廣東の大地主。

ゴフ將軍。

イギリス兵數名。

幕僚　數名。

所。　平野の中の大天幕。

天幕の上にイギリスの國旗翻える。

ゴフ將軍、數名の幕僚と共に天幕の中に、粗いテーブルを圍んで、何かしきりに相談してゐる。側には傳令がひとり控えてゐる。

天幕の外には銃劍をもてる歩哨が突つ立つてゐる。

ゴフ。では、とにかくその支那人を引見する事にしよう。こゝへ連れて來させてくれ。

幕僚一。はつ。（向き返りて。）傳令、行つてすぐにその支那人をこゝへ連れてくるやうに云ふんだ。

傳令。はつ。（急ぎ足で右手へ去る。）

ゴフ。奴ら、またこの前のづるい手をやらうと云ふんぢやらう。この前なんか正式に媾和を申こんでこつちに承諾させて置きながら、その間に我々を料理屋へ呼んで御馳走したり、美人を提供したりして、正式の談判を二ケ月もずる／＼引延ばしをつた。おまけにその間にこつそり軍勢を整へて置いて、わが軍を暗打しをつた。

幕僚一。隨分我々を甘く見てゐるんですね。あの時はまた實際我々は甘かつた。だが、今度はさうは行かせません。

幕僚二。しかし支那人といふ奴は實にふしぎな國民ですな。馬鹿と云へばこの上なしの大馬鹿に見えるし、偉いと云へば、また無類に偉さうにも見えますよ。

幕僚三。ずるくつて信用の出來ないのもちよつと類がありませんね。

ゴフ。ぢやが正直なところわしは、支那軍はもうそろ〳〵媾和を申しこんで來る時分ぢやと思つてゐた。いかに鈍な淸國政府も、これだけ敗北したらもう考へるぢやらう。

幕僚二。今の媾和申込は或ひは本心からかも知れないと考へます。

幕僚一。わしはその點はまだどうも信用ができないやうに思ふ。支那といふ國は馬鹿にづう體が大きくつて、人並はずれてうぬぼれが强くつて、この上なく愚鈍と來てゐる。國が亡びてしまふまでは、まだ本當に負けたと思へないのだ。そして本當に負けたと思へなければ決して心から降參しないのだ。我々が北京へ乘りこんで、天子をとりこにしてしまはないうちは、あいつらの媾和申込はまじめに取らない事ですね。

幕僚三。やつぱし今度も窮した揚句、一時逃れに使ひをよこしたのかな。

幕僚一。第一、そんな商人だか百姓だか分らんものをよこして、正式の軍使とは受取れませんよ。勿

論一應會つて、奴らを検べて見るのも無益では無いでせうがね。

ゴフ。まあ、一切はこのわしに委せて置いて貰はう。

伍榮紹と余寶仁、數人の兵士に護られて右手より天幕へ入つてくる。兵士たちは直ちに退く。伍榮紹はゴフ將軍を見かけると、いきなりその前へ行つて膝をついて禮拜する。

伍榮紹。恐れ多くも、ゴフ閣下でゐらせられまするか。私如き卑賤のものにお目どほり許されて、光榮至極に存じまする。

余寶仁。（伍榮紹の例に倣ひて禮拜する。然し青くなつて震えて思ふやうに言葉が出ない。）……光榮に存じます。

ゴフ。（伍に向ひて。）ふん、貴樣はなか／＼達者に英語が話せるな。貴樣は一體何ものぢや？

伍榮紹。恐れながら申上ます。名は伍榮紹と申します。商賣はいろ／＼でございまして、回漕問屋も致しますれば、店ではイギリスの國產品も扱ひますし、戰爭前までは阿片貿易商でござりました。そんな譯で、領事のエリオットさまとは特別親密な間柄でございまして、それから……

ゴフ。それから？

伍榮紹。この男は余寶仁と申しまする。閣下たちの前へ出まして、すつかり御威光に脅えて言葉が出ないやうに見受けますから、私が代つて申し上げまする。廣東の大地主でございまして、到つて道

徳堅固な人格者でございますところから、誰一人尊敬しないものは無いと云つても良いのでございます。

ゴフ。貴様たちはそれで、何用あつてこゝへ参つたのぢや。

伍榮紹。媾和でございます、閣下。媾和のお願ひに参つたのでございます。

幕僚一。をかしいぢや無いか。それならそれで支那軍から正式に軍使をよこす筈だ。

伍榮紹。はい、私共がその正式の軍使なのでございます、閣下。こゝにちやんと證據がございます。支那軍からの委任狀でございます。

　伍榮紹ふところから大きな書狀を出してゴフに渡す。ゴフひろげて見る。幕僚たちも覗いてみる。

幕僚一。まさかにせ物ではあるまいな。

伍榮紹。どう致しまして、この私の猪首に掛けまして。(間)實はかうなのでございます、閣下。昨晩支那軍の司令部から私のところへ呼出がありました。これは私が殺されるか、でなければ何かすばらしい儲け仕事があるのだと思ひまして、びく／＼しながら、また喜び勇んで司令部へ出かけたのでございます。すると、司令官が早速私を自分の部屋へとほして申されますには、イギリスの軍隊の強いのには全く驚いた、あれは人間ぢや無くて神さまだ、この上は兜を脱いで降參するより外に仕方が無い。それで早速軍使を送つて媾和を申こみたいのだが、みんな恐れて軍使になるものが無

い。だから伍榮紹、すまないがひとつ軍使になつて敵陣に乗こんでくれ。お前なら英語も出來るし、イギリス人とも慣れてゐるし、それに……その……大變智惠者でもある。どうだ、行つてくれないか、といふ譯なのでござゐます。そして更に、廣東で大地主として、また道德堅固な人格者として有名な余寶仁を添へてやらう、いかにイギリス兵でも、この立派な人格者と一緒なら、その人格の威力に恐れをなして、決してお前たちを殺すやうな事はしないだらうといふ事でございまして……

幕僚一。（彼を遮ぎる。）つまり貴樣たちは支那軍から委任されて媾和申込にやつてきたものに相違ないと云ふんだな。

伍榮紹。へえ、全くそのとほりで。

ゴフ。ぢや貴樣に尋ねる。支那軍はこれまでわがイギリス軍に何遍媾和を申しこんだのぢや。答へて見い。

伍榮紹。二遍でござります。へえ、これで三遍目でござります。

ゴフ。そのとほりぢや。しかも二遍とも我々をだましをつた。その度にいかにも降參して和を求めるやうなふりをして置いて、わが軍に不意打を食らはせをつた。今度もまたその手をやらうと云ふのぢやな。

幕僚一。貴樣たちはイギリスの軍隊を子供だと心得てゐるのか。

伍榮紹。飛んでも無い事でござります、閣下。前の事はこの私は何も存じてをりません。唯話にきいて知つてゐるだけでござります。でも、私は正眞正銘、まつたく僞りの無い媾和申込なのでござります。もし僞りでございましたら、遠慮なくどうぞこの首をちよん切つて下さいまし。元來私は平和論者なのでござります。それを林則徐が下らない阿片征伐なんかをやつて、こんな事にしてしまつたのでござります。ですが、林則徐も今はやつと目がさめたでござりませう。あいつはこんな戰爭をおつ始めたといふので、えらく天子樣の怒りに觸れて、免職になつて、田舍へ閉門になつてしまひました。全く當然の罰で良い氣味でござります。でも、戰爭と不景氣は林がゐなくなつても、止まないのでござります。そのために、わけても私ども商人の難儀はひと通りでは無いのでござります。私どももみんな心からして戰爭が止んで、もとどほりイギリス人と商賣ができるやうになるのを祈つてをるのでござります。嘘でも何んでもない。まつたく本當の事なのでござります。

幕僚一。おい。我々は貴樣の相談相手になつてるんぢや無い。例へ貴樣はさうであつても、支那軍の本當の意向はよく分らん。

伍榮紹。(にたりとして、)閣下、それなら決して御心配には及びません。私は支那人でござります。支那の事情なら何から何までよく存じております。支那人は兵隊でも何でも、この戰爭にはほんとう

に弱り抜いてゐるのでござります。土地は荒らされる、商賣はできない、悪い病氣は流行する、掠奪と泥棒が多くなる、全く堪つたもので無いのでござります。それで土地のものはイギリス軍が勝つたときく度に、いつも喜んでゐたのでござりますよ。ええ、嘘でも何でもございません、閣下。これは全く正眞正銘、私の偽らないところでござります。

幕僚一。おい、餘計な事はべら〳〵しやべらぬでも良い。

伍榮紹。（恐縮する。）申譯ござりません。どうぞお許し下さいまし。これはまことに私の悪い癖なのでございまして……

ゴフ。とにかく貴様に云はせると、今度は支那軍も心から媾和を欲してゐて、我々をだますつもりぢや無いと云ふんだな。さうか。

伍榮紹。さうでござります。全くそのとほりでござります。

ゴフ。（余寶仁に向ひて）貴様も同じか。

余寶仁。（震へながら。）まつたく……そのとほりで……

ゴフ。もしこれが出鱈目だつたら、貴様たちの首が無事でゐないぞ。

伍榮紹。宜しうござります、いつでも首を差上げるつもりでござります。

ゴフ。（あちこち歩きながら。）ふむ、支那政府に誠意があるといふなら、媾和を許さぬものでもない。

（同）それで、貴様たちはこゝで講和の條件を議する資格も與へられてゐるのか。

伍榮紹。さやうでございます。どんな事でも申し開けて下さいませ。どんな大變な條件でありましても、私がきつと支那軍に承認させてお目にかける覺悟でございます。

　　ゴフは蘇條一とこそ〳〵話合ふ。

　　暫く間。

ゴフ。ぢや貴様たちは明朝八時にもう一遍こゝへやつて來い。けふはもう歸れ。

伍榮紹。では、閣下。御承諾下されたのでございませうか。

ゴフ。そんな事はあしたよく相談した上で無ければ分らん。

伍榮紹。有難うございます。閣下、有難うございます。

蘇條一。さあ、歸れ。

伍榮紹。唯今歸ります。閣下、ほんとに心からお禮申あげます。私生れてけふほど嬉しい思ひをした事は無いのでございます。正直、私今度の戰爭を内心感謝してゐるのでございます。戰爭のおかげで、かうしてお偉い閣下方ともお目にかゝれたのでございます。これを機縁に、どうか私をお忘れ下さいませんやうに！　下賤な奴ではございますが、いつもイギリスの御恩を思つてゐて、皆さまのためになら命を捨てゝも惜しくないゝ人間なのでございます。どうか私をよく覺えて置いて下さい

ますやうに。先も申しあげましたとほり、私の名は伍栄紹でございます。へい、阿片貿易商の伍栄紹でございます。では、閣下、御免下さりませ。

第四場

人物。　葉銘寶。貧しき農夫。

　　葉花林、その娘。

　　黒人兵士二名。(イギリス傭兵。)

　　支那兵數名。

所。　荒地の上に立てる貧しい農家。

　外から暗い入口が見えてゐる。

　前庭左手に古井戸あり、樹が一本寂しく立つてゐる。夕日が赤く射してゐる。

　葉花林が井戸で水を汲んでゐる。やがて水桶をさげて家の中へ入る。

　暫く間。

　巨大な印度人の黒い兵士が二人右手より貪欲さうにして出てくる。甲が入口からそつと中を覗いてみる。

黒人甲。(小さい聲で、仲間に。)おい、ゐるぞ、ゐるぞ。

黒人乙。（側へ行つて一寸に覗いてみる。）うむ、しかも一人つきりだ。

黒人甲。別嬪だぞ。

　二人獲物を狙ふ猛獸のやうにどか／＼と家に押入る。

　女の鋭い悲鳴。

　やがて葉花林が入口から逃げて出てくる。黒人どもが追つかけてくる。

　そして暫くの間、前庭を追つかけ廻す。

　父親の葉銘寶が左手から出てくる。いきなり娘の前に立つて、黒人兵士との間を遮る。

葉銘寶。な、何をするだ？（間）お前たちこゝに何にも用が無えだ。行け、あつちへ行け。

　黒人兵士は父親の抗議にも係はらず、なほしつこく娘を奪はうとする。

　葉銘寶、激怒して兵士どもに摑みかゝる。兵士甲がその間に葉花林をひつ抱へて家の中へ隱れる。

　黒人兵士乙はとう／＼葉銘寶を締め殺してしまふ。そして死體を前庭に打つちやつたまゝで、甲の後を追つて家の中に隱れる。

　暫く間。

　支那兵が數名右手から出てくる。

——やあ、やられてるぞ。

——己たちより先に、イギリス兵が來て荒して行きやがつたな。

――玉を盗まれたかも知れんて。

どか〳〵と家の中へ押入る。

忽ち怒聲、罵聲が起る。

支那兵と黑人どもとが爭ひながら家から出てくる。前庭で烈しい格闘になる。

結局支那兵一人、黑人甲が殺される。

黑人乙は右手へ逃げ去る。

亂鬪の終る頃、葉花林が家の中から走り出てくる。そして井戸の中へ身を投げて死ぬ。

――あ、しまつた！

――玉を臺なしにしちまつた。

――畜生、黑鬼がゐやがつたおかげに。

――家の中には何かあるだらう。

――女がゐなくちやつまらねえな。

――何だつていゝや。かうなりや何でもかんでも掻つ拂つてやれ。

支那兵再び家の中へ押入る。そして各自手あたり次第のものを掻つ拂つて逃げる。歸りがけに死骸から物を盗んでゆく奴もゐる。

第五場

人物。　イギリス兵多勢。（印度人の傭兵も少し交つてゐる。）
　　支那兵多勢とその隊長。
　　支那農民數百名と「がつちりした奴」

所。　第四幕第一場と同じ。但し夜半で、砲臺の上に月が懸つてゐる。
イギリス兵が砲臺によりかゝつたり、ぶらついたりしながらしやべつてゐる。時々月光に銃劍が閃く。

――己も近頃になつて支那の女の味がやつと分つて來たよ。
――大いに味はつたやうな事を云ふぢやねえか。一體何人ものにしたんだい？
――七八人さ。
――ほらもいゝ加減にしろよ。
――ほらなもんか。貴樣まだ一人もものにしねいのか。
――いくじなし！
――己あ初め、支那の女が小ちやい曲つた足でよちよち歩いてゐるのを見ると、厭で厭で堪らなか

つたが、この頃とても好きになつたよ。

――はゝあ、助平野郎！

――貴樣たちや一體支那の女がどうして足をあんな風にしてるか知つてるかい。ありや腿と腰を發達させるためだぜ。

――なる程、そいつあ素敵だ！

――支那人も馬鹿にできねえ。

――いや、あの味は特別だよ。何なら自分で驗して見な。

――あの足のおかげで、己たちあ隨分うめえ事ができるな。云はゞ、支那の女は男子に對していつも無抵抗の狀態に置かれてゐるわけだからよ。

――さうだ。あれぢや決して逃げることも抵抗する事もできねえ譯だ。

――おい、みんな聞けよ。

――どうしたんだ。

――いやに改まるぢやねえか。

――實は己は大變な事を見たんだ。

――女のおばけでも見たのか。

――うむ、おばけだつたかも知れん。

――實はかうなんだ。この間廣東の町を占領した日に、己はまづ若い女を見つけ出して樂しんでやらうと思つたんだ、そこでどこだつたか金持らしい家を見つけて、銃劍をもつたまゝ飛びこんで行つたんだ。

――碌でもねえ奴だ。戰爭の最中に助平根生なんか出しやがつて。

――やつと女の部屋を見つけた。若い女が寢てゐた。しめた！　と思つて飛びつかうと思つて見ると、女の白い咽喉からたら〳〵血が流れてゐるぢやねえか。

――自殺してたんだ！

――さうだ。自殺してたんだ。おまけに、側にはまた御亭主がぶら下がつてるのさ。

――へえ。

――おい、さう云へば己も同じ事を見たんだ。唯己の見た奴あ、女が首を吊つて、男が胸を刺してた。

――親と子を殺してた奴も見た。何でも家ぢゆうに死骸か、大小七つばかりごろ〳〵してやがつた。

――へえ。

——みんな色んな所を見てやがるな。

——そりやどれもこれも、廣東を占領した日の事かい。

——さうだよ。

——うむ、みんな默つてやがつて、きつと悪い事をやつてゐるんだなあ。

——何んでも士官の話ぢやあ、廣東ぢゆうにそんな自殺者が、千くらゐごろ〳〵してたつていふ話だよ。

——へえ。

一同しんとする。

暫く間。

遠くで風の渡るやうに、ざあつといふ音が聞こえる。

——何だい、あの音は？

——風だよ。

——何でもありやしない。

——今は休戰だ、まさか支那兵が押寄せて來もしない。

——分らないぞ。休戰を申しこんで置いて、不意打を食らはすのはあいつらの手だからな。

――なあに、大丈夫さ。支那兵にもう戰ふ勇氣があるもんか。

――さうだとも。

暫く間。

――おい、もつとさつきの話を續けやうよ。

――女の話かい。

――ぢや、あれだね、若い女がそんなにしてみんな死んでしまつたんなら、ものにする事あできなかつた譯だね。

――さうだよ。

――さうでも無えさ。

――こん畜生、ふゝふ。

――貴樣なんか死體を嗅ぎまはつて來た方だらう。

――うむ、黑んぼの奴らみんなそんな事をやつて來たよ。

――どうだい、支那の女と印度の女とどつちがいゝかね。

――貴樣なんかどつちも知らねえだらう、その面構へでは？

――はゝはあ？　……

——馬鹿にするない。これでもづう體は君なんかより大きいぞ。

——女つて奴は大男を喜ぶんだぜ。

——馬鹿野郎！

——己はまたイギリスの士官が殺されてゐるのを見たよ。腹を短劍で突き刺されて。

——へえ。

——娘がイギリス士官に强姦されて、腹立ちのあまり油斷を見て相手を殺したんださうだ。

——やれ〳〵、こんな話をきくてえと、支那の女にもうつかり手が出せねえな。

——分つた。この頃仲間が理由もなくつて時々行衞不明になるのは、女をいたづらに行つてあべこべにやられるんだな。

——時々珠江にどこでやられたか知れないイギリス兵の死體が浮くのは、そのためだ。

——さう云やあ、己らこの間仲間と二三十人土手を歩いてゐたら、ばた〳〵つて土百姓が多ぜい出てきて己たちを殺さうとするんだぜ。己たちあ命がけでやつと逃げて來たよ。

——油斷かならねえな。

——己たちを怨んでるんだなあ。あいつら。

——どうせ敵同志だ。よく思はれつこは無いさ。

──はゝは、全くだ。

暫く間。

あまり遠くない所でちよつと不穩な物音が起り、まもなく止む。

──何だらう。變だよ。

──石でも轉がつたらう。

──大丈夫だよ、歩哨が立つてゐるから。

──さうだつた。

──あゝあ、眠たい！

──やつぱりイギリスの女が戀しいなあ。

唯か口笛を吹く。

暫く間。

──おや、あれは何だらう。

──うむ、砲臺目がけて多ぜいの人間がどや〳〵登つてくるやうだ。

──夜襲か。

──丸が鳴らないぢやないか。

――今頃イギリスの軍隊がやつてくる筈も無い。

――何だか大きな旗が見えるぞ。

――やつぱり夜襲か。

――歩哨はどうした？

――歩哨が見えない。やられたかな。

重い、步調の亂れた、數百人の足音が迫つてくる、がや〳〵云ふ群集のざわめきが聞きされる。

――夜襲だ！

――打て！

イギリス兵狼狽しながら一せいに亂射する。

砲壘の外に烈しい喚聲あがる。しかし彈丸は飛んで來ない。

暫く間。

怒濤の如き喚聲と共に、土民の群が砲臺を乘りこえて、溢れるやうに砲臺の中へ飛びこんでくる。彼等はいづれも乞食のやうな身すぼらしい、汚ないなりをしてゐる。鍬と鎌をもつてゐるのがせい〴〵で、殆んど武器を持つてゐない、多くは鐵の片や棒つ切れを携へてゐる。

右手からもやはり烈しい喚聲と共に同じやうな土民の大群が押寄せてくる。

「平英團」と云ふ大旗を押立てゝゐる。

武器と無手との淒慘なる亂鬪が始まる。かなりつゞく。イギリス兵の殆んど全部が殺される。

——よくも己の娘を辱しめをつたゞ。

——うぬ、女房の仇ぢや、思ひ知れ。

——やい、泥棒、人殺し。

——こゝに黑鬼がまだぴく〳〵しとる。

——一人も生かして置かぬがえゝだ。

——勝つた！

——勝つた！

——イギリス兵をみんなやつゝけたゞ！

——大勝利！

——萬歲！

萬歲の呼聲一せいに高くあがる。英國旗のあつた所に、「全英國」の大旗靡く。

土民たちは意氣揚々として死屍の上を濶歩する。

中には腰をおろして休むものがあがある。傷の手當をするものもある。

——己たちやこれからどうすれば良えだ。

——己たちあ砲臺取つたゞねえか。己たち砲臺守るだ。

——砲臺守つてどうするだ！

——これからイギリス兵の本營へ攻めて行かうでねえか。

——さうだ、それがえゝ。

——己たちや勝つたゞ、もうちつと休むがえゝ。

——また白鬼が責めてきたらどうするだ！

——みんなで打殺してやるだ。

——いつまでもかうしてもゐられめえ。それに腹もすいてきたゞ。

——己あちつと寝るべえ。

この時三十ばかりの「がつちりした奴」がいきなり砲臺の胸壁の上へ飛びあがる。

「がつちりした奴。」おい、みんな、己の云ふ事を聞いてくれ。

——誰ぢや、あいつは。

——己あ知らねえ。

——えらい強さうな奴ぢや。

「がつちりした奴。」己たちあイギリス兵をやつゝけた。この砲臺を占領した。いくじなしの支那兵

が追つ拂はれた砲臺を、己たちの手で奪還したんだ。つまり、己たちや勝つたんだ。

――さうぢや、さうに違えねえ。

――何をほざいてるだ？

――あいつあ爲になる事を云ひさうだ。

――しつかりたのむだ。

「がつちりした奴。」己たちや勝つた。だが、イギリス兵を全部、一人殘らずおつぱらつた譯ぢや無え。イギリス兵はまだ廣東にも、寧波にも、定海にも、中國の到るところに何十萬となくゐるんだ。今度は己たちの手でそいつらを追つ拂はなくちやならねえんだ。

――さうぢや、さうぢや。

――うめえ事を云ふだ。

――己たちやどうすればえゝだ？

「がつちりした奴。」ぢや、どうすれば良いかとお前たちは聞いてゐる。それを今己は云はうと思つてゐるんだ。己たちやこの砲臺を占領した。つまり己たちにや立派なあじろができたんだ。まづ己たちやこゝを堅めやう。だが、己たちやこゝであんまりぐずぐずしてゐると、イギリス兵がきつと攻め寄せてくる。それに負けちや、折角の大勝利も無駄になる。おい、みんな、勝つて兜の緒を締

めろつてのは今の己たちの事だ。

――全くだ。

――お前己たちの大將になつてくれるとえゝだ。

――イギリス兵が攻め寄せてくる前に、己たちの方から攻め寄せて行くべえ。

――それが良え、それが良え。

「がつちりした奴。」己もさう思ふ。こゝから一里さきにイギリス軍隊の本營があるがそこではまだ己たちがこゝを占領した事を知らねえだらう。まだ何にも知らねえで油斷してゐるに違えねえ。そこへ攻めよせるんだ。百人ばかりがこゝを守つて、外のものはみんな押寄せるんだ。

――攻めて行かう！

――イギリス兵を一人殘らずやつちまへ。

――勝軍（かちいくさ）だ。己たちが勝つにきまつてるだ。

――白鬼が何ぢや、黒鬼が何ぢや、廣東のお百姓に勝てたちお目にかゝらねえだ。

――行かう！

――おい、みんな行かう！

「がつちりした奴。」おい、みんな待て。己れたちや一つ大事な事を忘れてゐる。己たちにや武器が

無え。

――さうぢや、武器が無えだ。

――なあに、己にあ鎌がある。

――棒つ切れで澤山ぢや。

「がつちりした奴。」こゝは砲臺だ。どこかにいろんな武器が隠してあるに違えねえ。それから白鬼黒鬼がごろ／＼死んでやがる。そいつらみんな鐵砲や劍を持つてゐる。みんなそいつらを分捕して銘々自分の身につけろ！

土民たち急に氣がついて、そこらの死骸から銃や彈丸や劍を奪ひ合ふ。そしてちぐはぐに身につける。

「がつちりした奴」は砲壁より飛びおり、誰よりりも手早く死骸から銃さ劍をさつて武裝する。

土民はいつまでもごた／＼する。

――己あ鐵砲持つたつて、どうして打つだか知らねえ。

――己あやつぱり劍より鎌の方がえゝだ。

――こりや何ぢや。

――ピストルぢや。

――それ己によこせ。

――こりや己のだ。

土民たちはしまひに分捕品の奪ひ合ひさへ始める。

烈しく罵る聲が起つて、右手より一隊の支那兵が出てくる。一人の隊長に率ゐられてゐる。

隊長。こらつ、貴様たち何といふ事をするんだ、早く出て行け、出て行け。とつとゝこゝから出て失せろ。こゝは貴様たちの來る所ぢやない。早く出て行かぬか。

土民たち默つて見てゐる。

隊長。貴様たちはこゝを何だと心得てゐるんだ。こゝは砲臺だ。イギリス兵が占領してたところだ。それを何といふ亂暴な事をしやがるんだ。へつ、多勢殺しやがつたな。みんな貴様たちの仕業(しわざ)か。

――さうだ、己たちの仕業だ。

――君たちが立派な武器を持つてて追拂はれた所を、己たちや無手で取り返したよ。

土民の間に哄笑おこる。

「がつちりした奴」隊長の前に進み出る。

「がつちりした奴。」己たちはこれからイギリス兵の本營を不意打ちしやうとしてるんだ。どうだ、君たちも己たちと一緒になつて攻めて行かねえか。お互ひに敵は同じなんだ。

隊長。これから本營を攻めるんだつて。馬鹿野郎、何を途方もねえ。そんな下らない事をしねえで、

とつとゝ砲臺から出て來せろ。おい、みんなで、百姓どもを追つ拂へ。ぐづぐづ云つたらぶつ放すぞ。

兵卒ども土民を蹴つたり毆つたりする。土民たち激昂する。烈しい亂鬪になる。

第五幕

時。 戰爭の五年後。

人物。 伍榮紹。

ポチンジヤー、香港太守。

トーマス。陸軍中佐。

蔣化成、紳商。

支那の美妓七八名。

外にイギリス紳商、支那紳商、給仕等。

所。 香港なる或る料亭の華やかなる廣間。

幕あくと、眞ん中の大テーブルのまはりに伍榮紹、ポチンジヤー、蔣化成の三人が酒をくみながら話し

てゐる。テーブルの上にはぜい澤な料理が並んでゐる。給仕が出入してゐる。
廣間のあちこち、壁よりの所に寢椅子や腰かけがある。トーマスやイギリス人の紳商などは、おの〳〵膝の上に美妓を擁して、しやべつたり、いちやついたりしてゐる。支那人の紳商二名は、阿片に醉つて寢てゐる。最後の幕まで眠りつゞける。
その他の美妓は絲竹を鳴らしてゐる。

ポチンジヤー。それは是非とも實現させたいと思つてゐるんですがね。實は場所もわしは大體きめてゐるんです。
伍榮紹。山のてつぺんが宜しいでございませう。それとも、港の入口のやうな所が宜しいでせうかな。
ポチンジヤー。いや、わしはまづ波止場近くに立派な公園を設計しやうと思ふ。そしてその中に、わしが今云つたヸクトリヤ女皇陛下の大銅像を建てやうと云ふんですよ。
蔣化成。なる程、それはすばらしい思ひつきですな。
伍榮紹。さすが閣下は目のつけ所が我々と違つていらつしやる。それはきつと立派でございますぞ。黄金の王冠を冠つて、堂々と玉座に坐つてゐられる女皇陛下のお姿が、もう目に見えるやうでござ

いますよ。

ボテンジヤー。わしの考へでは、ヰクトリア女皇陛下の銅像こそ、この香港に一番ふさはしい記念だと思ふんです。云ふまでもなく、女皇陛下の御代になつて、こちらに初めて大英帝國の領土が開拓され、イギリスの旗が飜へるやうになつたんだからね。まあ、君たちの前でこんな事を云ふのも變だが。

伍榮紹。何が變なものでございますか。私なんか若い時から、大のイギリスびいきでございまして、香港がイギリスの領土になつた事を心から喜んでゐるんでございますよ。どうしてお世辭なんか申しませうか。論より證據、この香港の立派になつた事は？　五六年前までは實につまらない町だつたのですがね。それが、今ぢや堂々たるイギリスの商館は並んでゐる。道路は立派になる、それに今度は公園と女皇陛下の銅像ができやうてんでございますからね。

ボチンジヤー。今では貿易の中心も廣東より香港に移つてしまつたやうだね。

伍榮紹。さやうでございますとも。私なんか元來廣東人で、廣東でこそ〳〵商賣をやつてたんですが、それぢやもう追つゝかなくなつて、昨年からかうして香港へひつ越してきましたやうな譯なんでして。

將化成。さう云へば、今ぢや伍榮紹さんの店の發展ぶりもすばらしいもんですな。まるでイギリス商

館のやうになつてしまつたぢやありませんか。

伍榮紹。いや、まだ〳〵とても駄目ですよ。これからでさあ。

蔣化成。お店で扱ひなさる阿片だけでも、なか〳〵大したもんでせうな。

伍榮紹。まあ、ざつと十五萬函でせうな。林則徐の時代と違つて、今ぢやおほつぴらに商賣ができるんで有難いしやはせですよ。

蔣化成。わしはあなたが今ほど大きくならなくて、こそ〳〵阿片の密輸入をやつてゐられる頃を知つてゐますよ。あなたも隨分えらくなつたもんですね。

伍榮紹。はゝは、いや恐れ入ります。どうです、一杯。

皆で酒を飲み、物を食ふ。

ボチンジヤー。伍榮紹さん、あんたは阿片を飲まれないと聞いてゐますが、それや本當ですか。

伍榮紹。はあ、本當でございます。もつとも女と來たら大好物でございますが。

ボチンジヤー。それは不思議だ。

伍榮紹。なぜでございませう。

ボチンジヤー。だつて、支那人と云つたら例外なしに阿片が好きでせうが、それだのに阿片商人のあんたが阿片を飲まないなんて、わしは不思議でならん。

伍榮紹。閣下、それや不思議でもなんでもございませんよ。酒問屋で働いてゐるものは昔から酒を飮まないものでございますよ。それと同じ事でございますよ。それに、わしが阿片に耽つてゐたらてんで商賣はぶちこはしでございますから、はゝは。

蔣化成。でもまあ、阿片を飮まないのはあんた位のもんでぜうな。

伍榮紹。さあ、さうかも知れませんね。いや、まだ外にありますよ。

蔣化成。誰でせう。

伍榮紹。苦力(クリー)でさあ、はゝあ。

蔣化成。苦力ですか、はゝあ。苦力ぢや飮まうにも金が無くつて飮めませんからね。

ボチンジヤー。苦力がどうしましたか。

伍榮紹。いや、つまらない馬鹿話でございますよ。

ボチンジヤー。わしも苦力どもにはつく〴〵困つてゐる。香港の美觀を害ねること實に甚だしいのです。けふの夕方も、波止場附近に多ぜい集まつて、何だかわい〳〵騷いでゐるつて聞いたが、あいつらをゴミのやうに海へ掃きすてる方法はありませんかな。

蔣化成。けふ何でも、波止場でイギリス人が苦力を一人射ち殺したつてぢやありませんか。

伍榮紹。苦力なんか打ち殺したつて、人間を殺した事にはなりませんよ、閣下。全く苦力なんか一人

でも多く片づけた方が宜しいんでさあ。でも、不景氣な苦力の話なんか止めに致しませう。そして閣下が多忙の中を割いて、折角我々の會に臨席の榮を賜はつたのですから、一つ大いに愉快にやらうではございませんか。おや〳〵、みんな別嬪さん相手にしんみりやつていらつしやいますね。おい別嬪さん、ボチンジャー閣下にお愛想をしないか。そして誰か一つ踊つてくれ。

美妓の一人はボチンジャーの側にゆきて、その膝の上に乘る。他の美妓は絲竹の音と歌に合せて、優雅なる踊をおどる。男たちは酒を飮みながら、そして女を擁しながら、踊に見されてゐる。

戸外が急に騷がしくなる。人々は然し氣にとめてゐない樣子。

給仕。（慌しく馳けこんでくる。）苦力が今イギリス商館を燒打してゐるといふので町ぢや大騷ぎをしてゐますが、どうしたもんでございませう。

ボチンジャー。（立上る。）なに、苦力が暴動を起したつて？

給仕。はい、左樣で。香港の政廳へも押かけるといふ噂でございますが。

トーマス。何を生意氣な。フン、あいつらに何ができるか。

ボチンジャー。いや、あいつらだつて建物を壞したり、燒打するくらゐの事はできるよ。こりや、軍隊を出動させにやなるまい。

トーマスと小聲で何か相談し始める。

蔣化成。（青くなつてゐる、）一體どうした譯でせうな。イギスリ人が苦力を射ち殺したといふのが元なんでせうかな。

伍榮紹。いや、前からちよい〳〵そんな兆候が見えないぢや無かつたですよ。

蔡化成。わしの家は大丈夫かしら。

伍榮紹。さあ、わしの所もどうですかな。でもあいつらの狙つてるのはイギリス人でせうからね。

トーマス。では直ちにそのやう手筈しますから。

　　トーマス中佐はそゝくさと出てゆく。給仕も出て行く。

イギリスの紳商。（よろ〳〵立つてくる。）どうでせう、かうしてゝも大丈夫でせうかな、大丈夫保護して頂けますかな。

ポチンジヤー。まあ、たいして心配はいらないでせう。

伍榮紹。大丈夫でございませうな。

蔡化成。まあ、商館の二三軒もやられる位ですめば結構ですが……

イギリス紳商。あゝあ、だからわしがロンドンからこつちへくる時に、女房があんなに泣いて止めたんだ。（泣く。）

伍榮紹。たかゞ苦力どもの事です。大した事はありますまい。わしら腰をすえて飲みつゞけるとしませう。

然し宴席はもう落つかなくなつてゐる。女たちは青くなつて震へてゐる。

絲竹を鳴すものも無い。

給仕再び飛びこんでくる。

給仕。伍榮紹さん、大變です、あなたの商館も燒打にかゝつたつて云ひますよ。

伍榮紹。（青くなつて立上る。）えつ、畜生。（出て行きさうにする。）

ボチンジャー。出て行かない方がいゝです。我々は今こゝに坐つてゐる方が危なくないでせう。今に護衞もやつてくる筈です。落つきなさい。

伍榮紹。（哀訴する。）閣下、早くあいつらをやつゝけて下さりませ。

ボチンジャー。心配しなさんな、もう軍隊が出たでせう。

伍榮紹。私の家が今やられてゐるんです、あゝ。（絕望の身振。）

ボチンジャー。そりやわしの住居だつてどうなつてゐるか分らんです。

蔣化成。わしの所もやられるかも知れん、あゝあ。

不意に戶外から軍隊の行進する重々しい足音が地ひゞき立てゝ聞えてくる。

伍榮紹。有難い。イギリスの軍隊だ！

ボチンジヤー。さあ、もう安心です。

蔣化成。もうすぐ鎭まるでせうな。

宴席のもの皆助かつた思ひする。

不意に銃聲おこる。つゞいて戶外の騷ぎが急に大きくなる。

二三人驅けこんでくる。

——隣の商館から火が出ました！

——苦力が隱れてゐて、火をつけたんです。

——逃げて下さい、早く。早く。

七秒の後には廣間には誰れもゐない。唯、阿片に醉つた支那人の紳商が二名、相變らず何も知らずに眠つてゐる。銃聲、喚聲、建物の燒け落ちる音。廣間にも黑い煙が靡いて入つてくる。

幕

——一九二八年八月七日作——

阿片戰爭　完

昭和五年二月十八日
2001部――3000部發行

昭和五年一月二十六日印刷
昭和五年一月二十九日發行

定價70錢

日本プロレタリア作家叢書第六篇

阿片戰爭

著者 江馬修

發行人 印刷人 山田清三郎
東京市麴町區有樂町一ノ四

發行所 東京市麴町區有樂町一ノ四
日比谷五番館
戰旗社
振替口座東京一〇三二六番

ユニオン社印刷所印刷

★戦旗社出版目録★

——一九三〇年一月——

日本プロレタリア作家叢書

	書名	部数	著者	定価	送料
1	光と闇	二〇〇〇部	藤森成吉著	七〇銭	六銭
2	蟹工船	一五〇〇〇部	小林多喜二著	五〇銭	四銭
3	五月祭前後	(近日重版)	山田清三郎著	七〇銭	六銭
4	太陽のない街	七〇〇〇部	徳永直著	一〇〇銭	八銭
5	軍隊病	三〇〇〇部	立野信之著	七〇銭	六銭
6	阿片戦争	(最近刊)	江馬修著	七〇銭	六銭

日本プロレタリア作家同盟編輯

紡績労働調査会編 製糸工場で働く姉妹へ兄弟へ！ 定価一〇銭

発売禁止 日本プロレタリア詩集二九年版 改訂版

戦 旗社出版部は、日本プロレタリア作家叢書の続刊、プロレタリア詩集、海外プロレタリア文学、其の他の出版の他に、誰にもわかる経済学、宣伝パンフレット等々と労農大衆必読の書を出してゆきます。戦旗社は労働者農民の出版屋だ。諸君の要求意見をどんどん実現します。守れ戦旗社を諸君の手で！